

澤高雄股澤外三條の溪流と、明礬平・八幡平・ツムシガ平の三平原とは、此の火口内に存じ、諸所より硫氣を吐き、有名なる那須八湯中の六湯は、實に此の内に抱擁せらる。(詳しくは温泉の部を見るべし)即ち知る、那須温泉浴客の過半は、實に往古熱石灰塵を飛ばし、其の後灼々たる熔岩を迸らしたる大修羅場裏に、平然夢を結びつゝあるものなることを。茶臼山は、斯かる雄大なる爆裂火口壁の西端に崛起したるが故に、其の熔岩流は、多くはこの火口内に溢流し、座積大ならず。其の形状半球形をなし、上部は稍平坦にして、恰かも椀を倒置せるに似たり。其の北部に三丈餘の峭壁ありて、熔岩丘を以て成れる外輪山の一部をなし、二重式火山たるを示す。峯頭は即ち中央火口丘にして、是れと峭壁との間は火口原なり。外輪山が斯く火口原の北にのみ存するは、火口丘の南方に偏倚して崛起したるが爲めなり。本火山には、大小數多の爆裂火口、頂上の諸所及び側面に散布し、其の多くは、今尙ほ硫煙と水蒸氣とを噴出し、大活動の餘喘を保つ。其の頂上に在るもの、中、稍南方に偏せる高湯爆裂火口、西に懸崖をなせる無言ノ谷の上部にある爆裂火口等は、

最も大なるものにして、其の他は、皆四五條の裂罅に沿ひて起れる小爆裂火口たるに過ぎず。然れども、現今盛んに噴煙しつゝあるものは、却て後者に屬し、殊に北西より南東に走れる裂溝中に噴出するものは、最も活潑優勢にして、常に轟々の音を發し、遠く其の噴煙を望見し得べし。亦下流の那須大爆裂火口内に在る硫質噴汽孔は、明礬澤・大丸苦土澤・那須湯本の四個所にあり。古來怪説を以て有名なる彼の那須野の殺生石は、湯本元湯の北西二町計の溪谷中にある噴汽孔の邊りにありたりとの俗傳あり。此の附近は賽の河原と稱し、現に硫黄を採掘し、硫氣鼻を衝て頗る不快を感ぜしむるを以て察すれば、昔時人畜を害したりと傳ふる所の妖氣は、或は劇しき硫臭なるべし。

○下野國の平野は宇都宮及び那須の兩平原にして、其の廣袤は國中の三分の一に過ぎず。足尾、日光の諸山其の西を限り、那須高原の諸嶺その西北を擁し、東北は八溝山脈の蜿蜒として那須平原に臨めるを認む。兩平原共に第四紀古層の累積にして、河川の近傍に少許の第四紀新層の堆積するを見るのみ。第三紀の末期まではこの地方より東京平原、水戸地方に至るまで、皆一面の

水系

海水にして、かの筑波山佛頂山脈の如きは全く海中の一孤島たるに止まりしなり。其の後漸次海底隆起し、那須平原のごときは遂に一大砂礫層を構成し、遂に第四紀の前紀を経て以て今日の状態を呈するに至れり。

○大谷川は中禪寺湖より發し、その上流の山間に華嚴方等般若の瀑布あり。奇岩絶壁あり。其の風光實に愛すべく、日光町今市町を経て鬼怒川に合す。鬼怒川は鬼怒沼山の鬼怒沼の下流にして、川治に至り鹽原山の上岩代の國境より來る五十里川と合し、高德より山中を出て宇都宮の平原を流れ、常陸西部の平野に出て遂に利根川に合す。渡良瀬川は足尾山中蓼湖より發し、南に流れ上野に入り、大間々より東南に流れ、足利の西を流れ相生川と合して利根川に入る。蛇尾川松尾川箒川内川荒川等は鹽原山の溪谷より發して東南に流れ、那須の平野を潤し、那珂川に合す。

渡良瀬川

第二章 海洋並に海岸線

關東地方は東と南との二面に於て海に向へり。殊に其東方常陸の沿岸と東南房總半島の海濱とは直接太平洋の洪浪の洗ふ所となり、南方は伊豆三浦房總の三半島突出せるが爲めに、海水は深く陸地に灣入して、相模灣東京灣の二海灣を造れり。今順次此等の水域と其海岸線の形勢に就きて觀察すべし。

一 相模灣

相模灣

本灣は相模國の南方に横れる一大海灣にして、伊豆半島其の西を擁し三浦半島其の東を扼し、伊豆七島中の最大火山なる大島は其南に横りて、太平洋との間に多少の境界を造れり。灣の東南は直に東京灣の入口たる浦賀水道に連りて、房總半島の南端安房の岬角其の後に横れるを見る。本灣は素と駿河灣と相連りて本州南部の海岸に横はれる一大陥窪部をなせしものなるが、彼の大部分は火山より成れる伊豆半島の其間に生じたるが爲に今は分離して別に一灣を造りしものなり。されば其の面積の著しく大ならざるにも係らず其の深さは比較的大にして、殊に西方伊豆半島の附近に於て著しく、百尋の同

深線は海岸に通りて、僅々約一海里内外の間隔を保ちて走れる處少なしせず。且つ海岸を距る五海里ならずして既に六百尋の深サに達せるを見る。東岸に沿ふて其の増加の度前者の如く甚しからざるも、中央に近くに從ひて其の深サは著るしく増加し、相模灣内の最深所は恰も大島と三浦半島の南端に横はれる城ヶ島との中間に位して、鍾測七百七十五尋の多きを示せり。

相模灣内の隆起

灣内一帯に潤くして嶋嶼と稱すべきは唯沿岸の地に接近して散點せる城ヶ島・江ノ嶋等の外著るしき者あるを見ざるも、精しく海底の地形を察する時は此の深き灣底に峙てる一基の隆起部あるを見るべく、宛も浦賀水道の口と大島の間横りて灣内最深點の東に隣り海底急に隆起して僅に四十一尋の深を示し、海底に孤立せる急峻なる山嶽をなせり。其の海底に伏在せるを以て其の構造未だ明ならず、果して大島の如き火山嶋が所謂海中火山なるものとなして峙立せるものなるか、或は三浦半島房總半島等に見るが如き第三紀層の地が斷絶して嶋嶼状をなせるものか、今遽かに斷言する能はずと雖も、此の隆起は相模灣内に於て注意すべき地形の一たるを失はざるものなり。

更に其の海岸の地形を見るに、西方伊豆半島の海岸は概ね險急にして、本編關東區域内に屬する相模國に屬する所に於ても、灣の西北隅に位せる小田原の南なる早川の河口より南方眞鶴崎に至るの間は、函根火山の外輪山をなせる聖山の山麓直に海に臨み、海岸急斜して所々絶壁をなし、眞鶴崎は此沿岸に於ける神奈川縣管下の南端に横はり、狹長なる岬角をなして海岸に斗出し、其の北蔭には沙濱の小灣をなすありて、爰に眞鶴港の錨地を造るの他は、岬の邊緣は一帯に岩壁をなし、岬端に横はれる岩礁には笠嶋の名あり。

相模灣北岸

小田原より相模灣の北岸に沿ひ、東方鎌倉附近の稻村崎に至るの間凡そ九里の間は、すべて砂濱にして些の出入なく、鈍き彎形をなして一帯長く連れるを見る。小田原より海濱に沿ふて東に進まば足柄山より流れ來れる酒匂川の下流に稍平坦の地あるも東海鐵道の屈曲點なる國府津(第十七圖の甲)より以東は丘陵近く海岸に迫りて、其の麓に狭き沙濱を剩し、東海道の舊街道は之に沿ふて走り、大城町の東花水川口に至る大磯の北なる高麗寺山は海岸にありて稍高き丘陵なり。花水川以東は馬入川下流の平地にして、海岸には沙丘よく

江の島

發達し、舊街道の如きも次第に海濱を離れて内地を走れり。馬入川口の如きも花水川酒匂川の川口と同じく波浪の爲めに打寄せらる細沙の爲めに塞がれて、其の下流の巾より狭き水道をなして纒かに外海を通ぜり。其の他の小流亦河口に近きて沙丘の爲めに其の流れの方向を變ぜるもの少なしとせず。馬入川の河口より東南に當り、海岸より程近き處に平島姥島の二小嶺あり。更に其の東に當り境川の口、片瀬に對して七百米許り隔たりて江の島あり。沙洲長く海岸より延びて之と相連なる。片瀬の東、腰越の小岬角を越ゆれば、又七里ヶ濱(第十七圖の乙)沙濱なり。其の盡頭にありて中古の戦史に名高き稻村崎の峭壁を回れば、由井ヶ濱の小沙濱ありて鎌倉低地の南岸をなす。

三浦半島

由井ヶ濱より次第に東南に回れば、三浦半島突出して相模灣の東を扼し、其の海岸は前者の如く單調ならず。断崖沙汀參差して又出入に乏しからず。由井ヶ濱より小坪崎の峭壁を回れば返子(第十八圖の甲)の沙濱あり。葉山之に次ぎ(第十八圖の乙)、其の海上には菜島の岩礁あり。之より沙濱は丘陵の麓に沿ひ芦名灣に連り、其の南に斗出せる荒井崎を回れば、半島の南端は概して低き峭壁

三崎

を以て回らし、リアス式の小灣出入し、其の灣内には所々沙濱ある者あり。小網代は此附近に於ける一錨地にして、其の西南の小灣に瀕し、東京帝國大學臨海實驗所あり。是れ此の附近の海水は種々の海産動物に富み研究に便なるによる。

三浦半島の西南端には海峡を隔て、細長き小島の横はるあり。稱して城ヶ島と云ひ、其の西角には燈臺を設く。島の南岸には岩礁あるも北岸には沙濱ありて、海峡を隔て、半島の南端にある三崎港の市街に對す。三崎港は即ち海峡の一部にして、城ヶ島(第十九圖の甲)は屏風の如く其の前に横はるを以て能く相模灣の風波を防ぎ、好錨地たるを失はず。半島の南端は三崎以東小灣相隣り、其の東南端に突出する小半島を稱して松輪崎と云ひ、其の東北角を雨崎と稱し、南角を劔ヶ崎と名く。劔ヶ崎の岩頭には燈臺屹立し、城ヶ島と共に遙かに安房の洲崎に對し、東京灣口浦賀水道の門戸を照せり。

相模灣沿岸の地は一帶に風景に富み、其の快濶にして白浪磯に激する小田原・國府津大磯茅ヶ崎等の海濱には夏時海水浴の浴客廣至し、曲汀碧灣參差し

東京灣

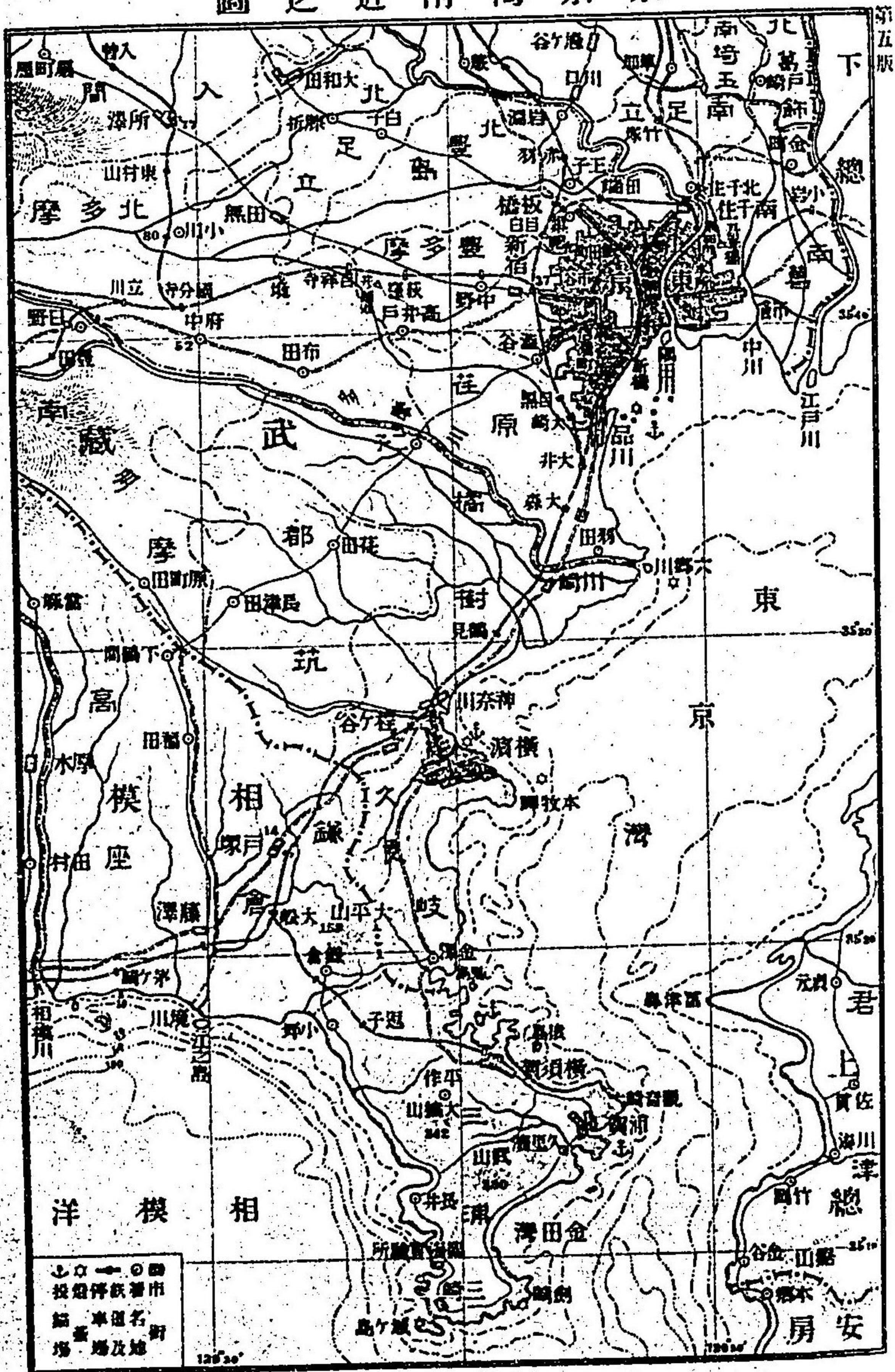
て、穩波漣々たる逗子葉山の浦邊には、皇室の御用邸を始めとし、貴紳の別墅を設くるもの尠なからず。加之鎌倉江の島等の名勝其の間に横はるを以て、汽車電車の便を藉て行樂する都人士は、常に其の跡を絶たざるなり。

二 東京灣

東京灣は房總三浦の兩半島を以て其の口を扼し、深く武藏下總の間に灣入して直に平野と相觸接せるのみならず、舟楫の便を有して平野の間を横流せる荒川江戸川等其の他の諸川は來て爰に注ぎ、加之灣の沿岸には首都東京を始めとし、本邦第一の貿易港たる横濱港、並に帝國最要の軍港横須賀等の横るありて、此海灣は單に關東地方を營養する一大臟器たるに止らず、一方に於ては又世界に對する本邦の門戸たるの位置を占め、本邦沿岸幾多の港灣中最も重要なるものたるを忘るべからず。

灣形南北に長く東西に狭く、其の中央部に於て盛まり、不規則なる瓢形をなす。相模灣より東北に向ひ、東京灣口に入り、劔崎を過ぎ、東北に進むこ

東京灣附近之圖



ス示子以ヲ等ハ以圖子以ヲ安米ハ巨萬
一 分 月 十 五 厘 尺

と八海里許にして、観音崎は三浦半島の東端に突出し、斜に上總の西岸より長く斗出せる富津洲と相對し、其の間縫に四海里、兩々相通て宛も東京灣の咽喉をなす。灣口より此處に至るの間を特に稱して浦賀水道と云ふ。観音崎を過ぐれば灣は再び膨大して爰に東京灣の内灣を造る。

東京灣は相模灣に比すれば其の深さ少くして、五十尋の同深線は浦賀水道より以内には入らずして、内灣の中央羽根田沖に至れば深さ僅かに十三四尋に過ぎず。海岸は概して遠淺なるを常とす。洲渚相連り、干潮の時は干潟を露すに至る。更に其の海岸の形勢を察するに、三浦半島の沿岸は其の西岸に比し一層複雑なる出入をなし、良灣に乏しからず。半島の南端劔崎を回れば、松輪小半島の一角雨崎より金田灣の岸は東南に面せる大灣を畫きて、其の北端千駄崎に至り、崎の崖頭一海里許の處には海獺嶋なる岩礁あり。金田灣の岸は概して沙濱にして漁村相連るも、其の背後には第三紀層より成れる丘陵地急に盡きて、三四十米の峭壁をなし、淡褐色をなせる累層は蒼波に映して、一帯水平線上に横はるを見るべし。千駄崎を回ればペルリ提督上陸の地を以て知ら

浦賀

れたる久里濱の沙濱あり。其内には一小潟湖あり。久里濱の北に隣りて浦賀港(第十九圖の乙)あり。海水細長く陸地に灣入し、良好なる小港を造り、市街其の岸に連る。

浦賀港を出て斷崖沙濱參差せる海岸に沿ひ東北に進めば、則ち觀音崎の岬角にして上に燈臺あり。崎を回り西方走水の村端に斗出する小岬を旗山鼻と云ふ。凡て此附近の地東京灣咽喉の要衝に當るを以て、海岸の丘陵には砲臺を築き守備を嚴にす。旗山鼻より一帯の沙濱長く西徼北に延びて一灣を造り、稱して大津浦と云ふ。灣外、海岸を距る二海里餘の處にある小島を猿島と云ひ、又砲臺の設あり。大津浦の西端田戸ヶ崎を越ゆれば再び沙濱にして、爰に横須賀の市街は横はれり。此市街の所在地よりは更に北方に向ひ、横須賀半嶋なる丘陵より成れる小半島は突出して、其の西に横はれる吾妻半島との間に横須賀灣なる小灣を包めり。是れ實に本邦第一の軍港にして鎮守府の在る所、灣口北に面し、灣内水深くして六七尋以上に及び、巨艦亦容易に其の岸に繋ぐを得べし。

横須賀灣

金澤灣

横須賀灣の西に隣り吾妻半島を隔て、更に一小灣あるもの之を長浦灣とす。横須賀灣に比すれば更に狭く、丘陵包圍せる光景は之れと相等し。灣内水雷團を設く。灣口の西に深浦の小港ありて北には即ち夏島あり。三浦半島の沿岸は要するに此附近に於て最も複雑にして、長浦の北に隣りて海水再び灣入するもの之を金澤灣(第二十圖)と云ふ。灣の南端より地籍既に神奈川縣に入り、即ち武藏國となる。本灣は之れを前者に比すれば其深サ極めて淺く、其の灣口は洲渚の横はるあり、細長き水路を以て海と通じ、要するに本灣は潟湖の性を具ふるものにして、其の周圍の地亦前者に於けるが如く、直に丘陵に接せず、若干の平地を剩し、爰に鹽田を設くるものあるを見る。其の灣形屈曲多少の變化を有し、丘陵の老松影を醸して、所謂金澤入勝の風光を説くものあるも、其の景は未だ必ずしも絶美の値あるものと謂ふべからず。

金澤灣以北は富岡の丘陵地直に海に臨みて、沙濱に亞ぐに絶壁を以てし、其の屹立せる岬角を富岡鼻と云ふ。此岬より北方本牧岬に至るの間は海岸深く彎回して、大弧線を畫き、爰に根岸灣を作り、外人は之を稱してミスシ

本牧鼻

ツビ一灣と云ふ。灣内淺くして小船を通ずるのみ。灣の南部は丘陵の麓に沙濱連り、梅花を以て有名なる杉田村は此處にあり。灣岸の中部は峭壁をなすも北部は又沙濱をなし、根岸の臺地之に急斜し、其の東端は所謂本牧鼻をなして海中に突出し、黄褐色をなせる第三紀層凝灰質砂岩泥板岩等の累層は削るが如く峭壁をなして屹立し、東京灣内に於ける航路の好目標となる。根岸灣の北部は一に屏風浦と稱し、其の沿岸は横濱住民の風光を愛で、散策するもの尠しとせず。

本牧鼻の北には平地を隔て、更に峭壁あり。横濱市の南方山手臺地の急に海に臨む所にして、其の南角を稱て十二天鼻と云ふ。海岸此岬角より西に走り、彎曲して東北に轉じ、鶴見川口に至るの間、灣口直徑約四海里、深入約二海里半の一灣を造り、其の盡頭に本邦第一の貿易港横濱港あり。海岸よりは二條の防波堤長く南北より延びて更に港を作り、長大なる棧橋亦其の中に突出して船舶の繫泊に便にし、内外數多の汽船は常に港内に碇泊す。港の沿岸には山手臺地の麓をなして半ば埋立地より成れる平地ありて、横濱市の人

横濱港

品川灣

家爰に楡比せり。市の北方には海水淺瀬をなして灣入し平沼を造り、神奈川臺の峭壁其の岸に聳ゆ。之より海岸に沿ふて北東に進むに従ひ、臺地と丘陵は次第に海岸を遠かり、水汀亦出入に乏しく、一面に平滑にして且つ遠淺をなし、六郷川口に到れば其の搬出せる土砂は次第に川口を埋めて數多の三角洲を洲造り、渚遠く灣中に突出し、其の盡頭を羽根田鼻と云ひ、燈臺を設く。(第二十圖の乙)羽根田鼻は遙かに其の東北七海里許の所に突出し來れる江戸川口の三角洲と相對して品川灣の灣口を造り、灣は之より深く西北に灣入して、其の盡頭には東京市街あり。灣内又は隅田川中川の二流來りて注ぐを以て、其の武藏平野の大部分を流れて齎し來れる土砂は次第に川口に推積して三角洲を造り、其舊きものは人工を加へて既に市街の一部となれる石川島月島等あり。又其の新らしき土砂は次第に灣を埋めて其の深サ極めて淺く、大部分は三尋以下に位し、干沙の時は著しく洲渚を露すに至る。(第二十二圖)されは大船は灣内深く進むを得ずして灣口に近く、即ち大森驛東方の沖凡そ三海里の處に碇泊するを常とす。唯此等洲渚の間に於ては上流河川より來る流水の影響を受け、

河流狀をなして比較的稍深き水路あり。稱して溇と云ひ、稍小形の船舶は之に沿ふて遠く東京市内に遡るを得べし。隅田川口鐵砲洲と稱する邊は、最も多數の商船を繋ぐ所にして帆檣林立せり。灣内には又五基の舊砲臺散在し、其の一に燈臺を設く。灣内概して淺く、未だ完全なる商港となすに足らざるを以て東京築港の議は既に當局者間に起り、港門を羽根田鼻の附近に設け、内港を舊砲臺と品川驛及び芝濱の間に築き、其の間は特に運河によりて航路を造るの計畫ありと云ふ。

品川灣の東端は又其の南端に於ける多摩川口と同じく、利根川の分流江戸川の口に造られたる三角洲長く海中に突出し、之より以東海岸線は北東より次第に東南に回り、遂に上總の盤洲鼻に至るの間は一大彎曲を畫て東京灣の東半を占むる大灣をなす。其の海岸平滑低坦にして、上總養老川口に生ぜる三角洲が突出せる外は些の出入なく、且つ海岸著るくし淺くして、殊に灣の北部船橋行徳等の沖に於ては、洲渚遠く連り、海岸より三海里の外に於て僅に一尋の深サを示すに過ぎず。灣内魚介の利少なからずして、沿岸には漁村

和連れり。盤洲鼻は小櫃川の口に横はれる三角洲にして、其の南には木更津灣あり。齊しく遠淺にして其の岸に木更津の港市あり。緩かに小舟を寄するに足る。木更津灣の南を擁するものは即ち富津の洲にして、富津の村落を戴き扁平にして永く尖れる沙濱より成れる岬角は、更に長く海中に延びて、低潮の時は海面より露出する沙嘴となり、其の盡頭に有名なる富津第一海堡あり。洲渚之より猶遠く延びて、其の深サ三尋有餘に過ぎず。而して其の末端には更に第三海堡のあるありて、崎端より爰に至る約三海里に及ぶ。其の長く海中に突出せるを以て觀音崎と相對し、砲臺相望み、東京灣の重鎮をなす。富津洲に至るまでは海岸一帯低平なるも、此の洲角を回て浦賀水道の岸に出づれば、海濱の出入複雑すると同時に、其の垂直的肢節も亦種々にして、或は沙濱、或は斷崖、後には高からざるも峻はしき丘陵の聳ゆるあれば、前には岩礁散亂し白浪之に激するありて、光景全く一變するを觀るなり。富津洲より南方は後に丘陵を負へる沙濱にして彎形をなし、湊村其の最内部にあり。湊村よりは此地方に發達せる第三紀の凝灰岩層好く露はれて、海岸は岷

々たる岩礁に富み、上總と安房の國境をなして海中に斗出せる明金岬亦此岩石より成り、鋸山の山脊延ひて絶壁をなし、海中に盡くるものなり。明金岬より更に南に進めば、本郷灣に次ぎて加治山の小港ありて、其の前にある小島を浮島と云ひ、加治山(第二十三圖の甲)より絶壁をなせる岬角を回れば不入斗灣ありて、岡本の小灣更に其の南にあり。岡本灣の南に突出し半島形をなせる岬を大房鼻と云ひ、峭壁をなして長く海中に屹立す。

大房鼻は遙かに浦賀水道の東南門戸に當れる洲崎と相對して、中に一灣を抱き、名けて館山灣と云ひ、一に鏡ヶ浦と稱す。灣内濶くして且つ深く、容易に大船を容るゝに足り、西風の時を除くの外は、實に良好の船舶所なり。灣岸沙濱の後には、狭からざる平地ありて田圃開け、館山北條那古等の名邑岸に沿ふて相連れり。

三 太平洋沿岸

關東の太平洋海岸は一種の特相を具へて、其の全線は美はしき對稱を畫け

館山灣

太平

るを觀るなり。即ち利根川の口に横はれる岩角犬吠崎を中心としては一方は西南に向ひ、一方は北西北に向ひて極めて長さ沙濱は些の出入なく、極めて大なる圓の弧を畫きて、前者は九十九里濱をなして大東崎に至り、後者は鹿島灘の岸をなして大洗崎に終り、兩者共に其の内陸には比較的低平なる臺地を扣ゆるのみなるも、大洗崎以北に至りては沙濱猶連らざるに非らずと雖も、海岸には直に丘陵の臨むありて、其の一部或は小岬をなして斗出し、又海岸の後陸には直に丘陵山嶽の起狀するあり。又大東崎以南も之と等しく丘陵直に海に逼り、海岸線の肢節發達して複雑なるの度は、前者に比して一層甚しきものあり。即ち中央平滑にして兩端亂曲せるものなり。今先づ房總半島の南端より序を追ひ此に進みて此海岸を觀察すべし。

房總半島の西南端をなせる洲崎は(第二十三圖の乙)丘陵の一角海に没する所にありて、海岸には低き峭壁を作り、且つ岸礁あり。岬を回れば沙濱長く連りて布良崎に至り、之より海岸線東に轉じ、半島の最南端をなせる野島崎に至るの間は、後に直に丘陵を負へる低平なる海岸なるも、水涯は總て危岩亂立す

野島崎

る所少なからずして、野島崎も亦此平地より更に海中に突出せる岩壁より成れる短かき岬にして、其の頭に聳ゆる直立百尺の大燈臺は、不動白色の光を放ち、太平洋より東京灣に向ひて進み來れる船舶には最も重要な目標となるものなり。(第二十四圖)

海の深サは房總半島の南部に於て著しく増加するを見るべく、野島崎の沖に於ては海岸を距る四海里にして、既に百尋の深さあるを見るべく、猶進んで八海里の處に及べば、深サは既に千尋以上を鍾測せるものあり。乃ち見る海底は海岸近くより急傾斜をなして大洋の眞深底に通まらんとするの勢を示しつゝあるを。

野島崎より海岸線は東北を指して彎曲し、内陸には丘陵起伏するも其の直に海に臨て峭壁を造るものなく、水汀は嶮礁相連り、白濱乙濱忽戸朝夷等の村落名邑斷絶海岸に沿ふて横はり、北朝夷は忽戸岬の北に隠れて小沙濱をなし、之に隣て其の北に更に松田の低地あり。小丘陵脈を隔て、西方館山灣岸の低地と連る。之より沙濱、岩角相交り、波太島の岬角を回れば前原灣あり。

勝浦

八幡崎

灣岸は即ち加茂川低原の末端にして、此凹窪地は更に延びて海底に及び、即ち百尋の同深線は著しるく屈曲して本灣内に彎入せるは頗る注目すべき現象なりとす。灣岸加茂川の口に沿ひ前原の名邑なり。前原灣の東には峭壁性の海岸によりて隔てられ、天津小湊の二小灣あり。小湊は一に内浦と云ひ、東に絶壁を回らし、海水深く灣入し、唯灣形小なりと岩礁あるの缺點あるも、亦一好錨地たるを失はず。此附近海岸に近く、岩礁甚多し。

小湊以東は上總に入れば丘陵一帯急に高く海岸より聳え、水汀亦岩角沙濱の小出入ありて、行川與津等を経て勝浦半島に至る。此の小半島は上總の南端に突出し、八幡崎なる懸崖より成れる岬角は、更に西南に延びて勝浦港を擁し、良好なる小碇泊所を作る。半島より更に東北に進めば、海岸は丘陵を負へる沙濱にして、其の端には岩和田崎突出して又小灣を造り、其の形勢勝浦灣とよく相似たるも、碇泊の利は前者に如かず。

岩和田崎よりは海岸線次第に北に偏し、北方八幡崎(勝浦半島の八幡崎とは異れり(第三十五圖))絶壁高く直に海濱に峙ち、其の壁面には第三紀の累層整然と

大東崎

してよく露出するを見る。畢竟此絶壁は波浪の水蝕作用によりて成りたるものなれば、崖脚は依然其の傾斜を續けて、猶深く海中に没せず、傾斜は汀線以下甚だ緩にして従て海の深さは沿岸一帯深からずして、海底は岩盤より成り、或は孤立せる岩礁をなし、或は水面に露出して小嶼をなすものあり。八幡崎の北には此の岩盤微に水中に没し、北に突出し稱して臺崎と云ひ、此地方は漁業の盛なる所なれば、其の上には所々魚櫓を設け、魚群の監視と漁船の進退を司る所となす。八幡崎の傍には小泊地あり、小濱と云ふ。

小濱以北は鹽田川の口に横はれる沙濱を隔て、更に峻崖より成る岬角あり。稱して大東崎と云ふ。(第二十六圖の乙) 是れ實に房總半島沿岸の光景に於ける二種の標式を境する結節點にして、崎より以南吾人が朧來りたる所は多く峭壁にして、其の間に間々沙濱を交へ、沿岸亦岩礁に富みしも、之より以北は全く之に反して、海岸毫も出入なく、微に陸地に向て入れる一大開灣の砂濱は滑かなる曲線を畫きて巧に圓弧を造り、其の圓の全形を想像すれば、其の半徑少くも四十海里に達するを見るべし。大東崎より東南犬吠崎の附近なる

九十九里濱

飯岡に至る此の一帶の美はしき沙濱を稱して九十九里濱と云ひ、其の延長實に五十六軒の長さに及ぶ。此の海岸線は其の左右の陸地と海底との間に著しき地形上の差異を作らずして、海底は緩傾斜をなして遠淺をなすと共に、陸地も亦水汀に沙丘の脈をなせる外は、全体に甚低平にして海岸を距る十軒に至らざれば低き臺地の麓に達せざるなり。其の海岸には沙丘好く發達し、一帶堤防の如く延亘するを以て、内地より流れ來れる水流は、海岸に至て之が爲めに堰き止められ、急に屈曲して前の流向と直角をなし、沙丘の内側に沿ふて流れ、遂に漸く口を求めて海に注ぐもの少なからず。其の最も著るしきは一の宮川作田川(境川)等にして、又濱の中央に流れ來れる栗山川の如きは、海岸に至りて右に折れ、木戸川は左に折れ、遂に二者相會して其の結節點より折れ漸く海に入るを得。其の二者の下流南北より來りて一直線をなすもの長サ五軒に及べり。又此沙丘の内側なる一宮川南白龜川等の口には小規模の潟湖を造り(第二十六圖の甲)又遙か内陸に於て臺地の麓にある鳥喰池の如きは舊き潟湖の跡にして、今此湖より流れ出づる小流は、未だ海岸に達せざる中に地

中に滲入して、其の跡を絶ち、所謂末無し川をなせり。

九十九里濱の東北端龍王崎以東は臺地の末端直に海に臨て峭壁をなすも、海の深サは依然として遠淺をなせり。此海岸に沿ふて更に東に進めば、下總の東端銚子の小半島は太平洋中に突出して、九十九里沖と鹿島灘とを分つ。此の半島は其の地構上の關係より見る時は、廣漠なる關東平野の邊陲に孤立せる一小嶼とも見らるべく、即ち房總半島の如き其の大部分を構造せる丘陵は第三紀層及び其以後の、岩石より成り、下總に入れば殆ど其の全部は第四紀層より成れる臺地と低原たるに係らず、此極端の小半島の基底をなして古生代の成層岩露れ、又新火山岩の小噴出をなせる所あり。即ち半島の西南角をなせる犬若崎の絶壁、並に其の附近に散在せる岩礁千騎岩を始め、少しく西方に隔りて海老島の如き、皆此等の古層より成り、半島の東南端長崎には更に其の上を新火山岩の蔽ふを見る。長崎の北に當り小沙濱を隔て、岩壁より成れる岬角突出し、半島の東極をなすもの之を犬吠崎と云ふ。(第二十七圖の中)本邦有名岬角にして、本州の東海岸に於ては此岬角と金帶山とを除ては、また著

犬吠崎

銚子
利根川

るしき岬角の稱すべきものなく、其の岩壁の頂上には、旋轉白色の一等燈臺を設け、航海者の爲めに重要な目標となれり。犬吠崎以北の海岸は嶮崖岩礁嵯峨として、白浪喧吼するの壯觀は南岸に譲らず。岩礁の中海鹿島なるあり。時に海鹿の來て群集することありと云ふ。

半島の東北角を目戸鼻と云ひ、之れより海岸西に轉して利根川の川口となり、其の沙濱に沿ふて銚子の港市あり。(第二十七圖の中)利根川は其の溉域廣く川幅亦大にして、交通の便利少なからざるに係らず、其の河口は岩礁多く、又沙嘴兩岸より相迫りて水底には所謂欄口堆を造り、水淺きが上に川幅俄に蹙まり爲めに大船を容るゝ能はず。港としての價値爲めに揚がらず、銚子の繁華をして意の如くならしめざるの憾あるなり。

利根川の下流は下總と常陸を境し、銚子の對岸波崎より西北に向ひ、次第に北に偏して一帶の沙濱長く連り、大洗岬に至るの間、凡そ七十軒の長さ些の出入なく、其の距離の大なる九十九里濱に勝れり。其の沙濱の後には沙丘の發達極めし著るしく、其の沙山と稱するもの特に高く、鹿島郡の南に峙てり。

大洗岬(第廿八圖の甲)は低き崖地に沿へる沙濱にして、岬に隣りて磯の濱祝町等の名邑あり。祝町と那珂川の川口を挟みて湊町あり、一小河口港をなすも、海底險惡暗礁あり。加之港域狭くして碇泊に便ならず。之れより更に北に向ひ、磯崎を経て久慈川の口に到るまでは、低平なる沙濱に過ぎざるも、久慈以北は第三紀層の山嶽近く海岸に逼り、沙濱の間往々小岩壁ありて、川尻崎萬戸鼻大津鼻等の名あり。肋川の地亦風景を以て著はる。(第廿八圖の乙)又之れに沿ふて岩礁の所々に散在するものあり。されど概して海岸線の形勢は單調にして、房總半島若しくは三浦半島の沿岸に比すべくもあらず。海の深サも海岸より次第に其の深を増し、急激の深淺變化あるを見ず。

常陸の北端に當り突出せる小岬を大津鼻と云ひ、其の北に隠れて平瀉港あり。(第廿八圖の丙)鹿取鼻初島山鼻の二岬によりて圍まれたる小港なれど、港の内外暗礁多く、縦かに小船を容るに足るのみ。

四 海流並に潮

海流及び潮

黒潮

關東地方並に豆南諸島の附近に於ては、本邦海流中の最も重要なものを目撃するを得べし。一は黒潮にして二は即ち親潮なり。黒潮は臺灣の東岸より沖繩列島の西を流れ、其の本流は大隅海峡を通過して本州南方の沖を過ぎ、通常一時間二乃至三海里の速度を以て進み、豆南諸島の間を過ぎ、八丈島の北方にては其の流殊に著るしく、平均一時間四海里の速度を有し、黒瀬川の名あり。其の他關東地方の沖合に於て從來驗測されたる所によれば、左の如きものあり。

	方	一日ノ速度
下總犬吠崎東	南	二〇海里
全	東	北 四度東
全	東	北六八度東
全	東北東	二〇海里
全	東北東	北七四度東
全	東北東	七三海里
常陸那珂港東	北四〇〇海里	北六八度東
常陸那珂港東	五〇海里	四四海里
犬吠崎近海より北北東の方向	北六八度東	二〇海里
北緯四十二度に至るまでは、		黒潮は二十四時

間に十八海里乃至二十一海里の速度を以て北行し、本州の東岸に接するに従ひ速度を減じ、金華山沖五十海里の所にありては、二十四時間に四乃至八海里となるなり。

此の海流は伊豆諸島を過ぎてよりは、其の走向稍、區々たるを免れずと雖も、猶概して東北東の方に流ること上に示すが如くして、次第に本州の海岸を離れて北東に向ひ、太平洋中に走るなり。此の潮流の走る所、海水濃藍、鹽分に富み、且つ其の熱帯地方より流れ來れるものたるを以て温度高く、夏季七月の頃には野島崎沖に於て、攝氏二十二度乃至二十四度を示し、犬吠崎沖に於ては二十一度乃至二十三度を示すと云ふ。

此の暖流の外更に又小笠原嶋の北方、黒潮本流との間に當り、其の本流の走向と反して東南より次第に西に向ひ、次て西南に轉して流るゝものあり。又遠く北方オホーツク海より流れ來れる寒流親潮の本流は、津輕海峡の東面より尙進んで本州の東岸に沿ふて進み、冬季には犬吠崎附近まで達することありと云ふ。此の海流は黒潮に比すれば其の速度甚小なり。

親潮

關東地方沿岸に於ける高潮時は隨處必ずしも一ならず。其朔望の當日に於ける時刻を示さば左の如し。

	高潮時	大潮升	小潮升
犬吠崎	五時六分	五呎四分ノ三	三呎二分ノ一
野島崎	五時二十一分	五呎四分ノ三	三呎二分ノ一
館山灣	五時二十三分	五呎	四呎五分ノ一
横濱港	五時四十五分	五呎	三呎四分ノ三
品川灣	五時五十分	七呎四分ノ一	四呎二分ノ一

第三章 地質

一 汎論

概説

關東地方が日本帝國を構成する地軀の如何なる部分に其の位置を

日本の地質構造

占むるやを知らんと欲せば、須く先づ日本帝國全陸の地質構造を知らざるべからず。今關東地方の地質を述ぶるに先だち、簡單に日本帝國全陸の地質構造を説き、以て關東地方の地質上の位置を知るの端緒とせん。

花彩群島の名を以て呼ばれたる日本群島は、概ね西南より東北の方向を取り、アジア大陸に向かひ、彎曲する三個の弓形より形成せらる。最北にあるは則ち千島列島にして、南にあるは琉球列島なり。而して其中間に位するを本州列島と爲し、別に最南に臺灣弧ありて太平洋に向へり。而して其の本州列島は、更に南緯北緯の二大弧より成り、此二大弧の相衝突する所は恰も本州の中央部に相當し、地勢最も高峻に、幅員最も廣き地域にして、駿河中斐武藏・信濃・越中・飛驒等之に屬し、ナウマン氏は此衝突部を大地溝帶 *Fossamngni* と稱し故原田氏及びビュース氏は之に反して山脈の對山 *Scharung* なりと云へり。此の二大弧の衝突部に當り、遠く南方太平洋中のマリアナ群島より起り、北々西の方向を取り、火山群島小笠原群島伊豆七島天城山箱根山富士山八ヶ岳立科山等を経て妙高山に連なる一大火山脈の横はるあり、之れを富士火山

富士火山脈

脈と稱す。(大地溝帶山脈對曲其の他富士火山脈等に關しては、尙ほ後卷に詳論するとあるべし。)又富士火山脈より以北の地を北日本と稱し、以南を南日本と稱す。

南日本及び北日本は其の地形地質共に大に其の趣を異にすと雖も、地質構造の點に於ては全く相似たる點なきに非ず。即ち其の太平洋に面する一帯の地方は規律整然たる水成岩より成り、地質學上最舊の時代より現今に至る迄の地層順次發育す。之れを本州列島の外帯と稱す。本州列島の日本海に面する地方は、地層の排列割合に不規則にして複雑を極め、新舊の地層相錯雜して現はれ、裂罅陷没等の現象至る所に見るを得べく、地球内部の熱灼せる岩漿は、此の裂隙に沿ふて迸出し、此の噴出物は相堆積して幾多の圓錐形を呈せる火山を形成す、此の一帯の地域を内帯と稱す。

以上内帯及び外帯の境界に當り、本州列島の長軸の方面に沿うて一の裂罅線あり、之れを中帯と稱し、幾多の火山之れに沿ふて噴起す。

本書に於て謂はゆる關東地方は、北日本に屬し、北緯山系の西南端を占め、

外帯
内帯
中帯

地質の類別

其の地層は其の外帯及び中帯に屬する地層より成るを知るに足るなり。但し伊豆七島及び小笠原群島は富士火山脈若くは之れに近き火山脈に屬するなり。以上述ぶる所により關東地方は地質構造上我が日本群島の如何なる部分を占むるやを明かにしたり。今其の類別を略記すべし。

地質の類別

關東平野の西、筑摩川の東に當り、西北西より東南東の走向を有する一聯の山塊あり。地學者は之れを關東山塊又は秩父山塊と稱し、南北兩帶の相接する對曲の東北翼の一部分を構成す。此の山塊は地學的に一個の獨立せる地域にして西南は富士八ヶ岳等の火山及び金峯山三國山の花崗岩塊により境せられ、東北は第三紀及び第四紀より成る關東平野に接す。中央に秩父大宮の盆地を含み、此の盆地よりして西北西に向ひ、謂はゆる山中地溝帶の縦谷帶狀を爲して走り、山塊を南北兩部に横斷す。此の他山塊の東南には丹澤の山塊あり。三浦半島の丘陵は相模川を隔て、其の南にあり。三浦半島と浦賀海峡を隔て、房總半島の邱陵あり。廣漠たる關東平野は其の北に横はる。其の北部に筑波入溝の諸山脈あり。

關東地方を構成する岩層中最古のものは謂はゆる三波川系にして、之れに次で古生層の下部を占むる謂はゆる御荷鉢系秩父系上中部及び小佛系あり。之れを貫くに蛇紋岩橄欖岩斑糲岩輝綠岩玢岩等の噴出岩を以てす。

三波川系は或は之れを晶質剝岩系と稱し、秩父地方に能く發達し、東京地方にて謂はゆる秩父青石と同種類の剝岩より成り、又此中には全く化石を缺き、實に關東山塊の基礎を形成するものなり。御荷鉢系は三波川系の上を被覆し、或は之れを秩父系下部と稱し、主として凝灰質の輝岩及び角閃岩より成り、時としては之れを下部の三波川系と區別する能はざる事あり。斑糲岩及び橄欖岩は之れを貫通す。秩父系上部は輝綠岩の噴灰が水底に沈積して成りし輝綠凝灰岩、深海底に沈澱せし石灰岩角岩等より成り、小佛系は硬沙岩及び粘板岩の如き淺海に成生せる岩石より成る。故に小佛系は其の成生の時代の點に於ては秩父上系と異ならざるべきも、たゞ其の成相を異にするものと云ふべし。

古生層の凹地に於て、不整合的に少區域に現出するは即ち中生層にして、

關東地方に於ては、侏羅系と白堊系のもののみ發育し、其の最下部に位する三疊系は全く之れを缺けるを見る。蓋し我が國地體の骨格は、古生代に於て其の大部成生せられ、中生代に於て海水の爲めに被はれたる所は、割合に狭少なりしが故なるべし。

ヨーロッパの中生代は、概して甚だ靜穩にして、地層の變位、火成岩の噴出は甚だ稀なりしも、我が國に於ては大に其の趣きを異にし、地層は割合に變位せる所多く、花崗岩斑禰岩橄欖岩石英斑岩閃綠岩輝綠岩玢岩等の諸種の噴出岩は之れを貫通し、往々にして接觸變質を與へ居れり。

時去り時來り地球發育史上の革命時代たる新生代となれば先づ第三紀來り。關東地方に於ける第三紀は其の發育せる面積亦甚だ廣大にして、重もに火山噴出物の海底に沈積せるものより成る、房總半島三浦半島等は是れなり。其の含有する所の化石には鹹水産のものあり、淡水産のものあり、又動物あり植物ありて其の種類甚だ多く、石炭層も亦諸所に發育す。諸種の火山岩は縱横に第三紀層を貫き、其の裂罅には往々にして人生有用の鑛脈を胚胎し、今日

我が國の富源を爲せり。

第三紀過ぎて第四紀となれば、第三紀に於て震天動地の威力を逞ふせし火山噴出の作用は依然として衰へず、白扇を倒に懸けたる如き富士形の火山は所々に形成せられ、第四紀古期の河流の爲めに運搬堆積せられたる礫層の上には、熔岩を流がし、灰沙を降らし、或は臺形を爲せるメサを形成し、或は好箇の牧場たる原野を形成し、第四紀新期の今日に及んでも其の作用は未だ全く休止せざるなり。

二 三波川系

三波川系とは、武藏上野の國境にある神流川の一支流たる三波川に沿うて標式的に發育するを以て、小藤博士の命名せるものにして、エドモンド、ナウマン氏の所謂品質剝岩系是れなり。略北西南東の走向を以て關東山塊の東北部に露出し、小藤博士の研究によれば其の層次は、下より列擧すれば次の如し。

三波川
層順

正式絹雲母剝岩

- 第一、正式絹雲母剝岩、其の上部には紅簾剝岩あり。
- 第二、點紋綠泥剝岩及び點紋石墨剝岩。
- 第三、綠簾絹雲母片麻岩。

正式絹雲母剝岩は灰白片狀の岩石にして、其の輝々たる片狀面には波狀の凸凹あり。帶黃色あるは綠簾石の存在による。劈開面の絹紙光澤あるは纖維狀の絹雲母の鱗片が平行に列排するに由るなり。鑛物成分は石英或は長石絹雲母方解石綠簾石黃鐵鑛及び金紅石なり。塊狀岩及び剝岩に最も普通の副成分たる燐灰石は之れを缺く。

點紋石墨剝岩

點紋石墨剝岩は主成分として長石絹雲母石墨赤鐵鑛石英及び綠泥石を有し副成分として電氣石柘榴石及び金紅石を有す。風化すれば粗粒褐色にして黒點を有する雲母剝岩の觀を有し、風化作用一層其の歩を進むれば滑石様の外觀を呈するに至る。此の黒點は即ち長石なり。

點紋綠泥剝岩

點紋綠泥剝岩は草綠色の片狀割合に完全ならざる岩石にして、片狀面は平坦なり。綠色の地に〇、五乃至二耗の無數の白點を有す。此の白點もまた長

石なるを知るを得べし。

以上二岩石の分布は甚だ廣くして、此の地方を旅行する人は何人と雖も直ちに之れを見るを得べきものなり。殊に綠泥剝岩の如きは俗に秩父青石と稱し、東京地方の庭石等に用ひらる。

綠簾絹雲母片麻岩

綠簾絹雲母片麻岩は其の分布前二者に比すれば遙に小にして重もに荒川の南部に限ぎり露出する者の如し。直接に整合的に石墨剝岩及び綠泥剝岩を覆ひ、時としては其の下部は石墨剝岩と互層することあり。

一般に下部は厚き板狀の多少石墨質のものより成り、上部に至るに従ひ薄き板狀のものとなるか如き傾向あり。下部の厚き板狀をなす灰白色の變種は容易に厚さ半厘以上の片に剝脱す。是れ其の間に灰綠色の柔軟なる滑石様の鱗片の薄皮を含むによるなり。此の薄皮は反射光線によりて見るときは輝々として光澤あり。

之れを要するに上部三波川系を構成する岩石の特性は其の容易に薄板に剝ぐること及び多量の絹雲母を有することにあり。旅客若し節を秩父地方に曳

けは、其の路傍に露出する岩石の風化面が多少分解し、遂に粗き銀白色の鱗片となるを發見すべく、其の一種の奇景は忘れんと欲して忘るゝ能はざるものあり。

以上三波川系は思ふに關東山塊の最下部を構成するものにして之れを四國三河遠江等の地方に徴するに、彼等は墨雲母剝岩黒雲母片麻岩系の上に不整合的に横たはり、輝岩角閃岩の累層を以て不整合的に被覆せらるゝ者の如し。秩父地方に於ける一大背斜軸は、北七十度西の方向を以て東南寄居附近の末野よりして西北小畑に至り、此の背斜軸に沿ふて下部三波川系の好露出あり。三波川系の岩石の特性は、全く黒雲母及び白雲母を缺如すると同時に、多量の絹雲母を含有し、又電氣石及び紅籐石の存在することなり。要するに種々の點に於て此の岩層は通常の品質剝岩の特性を缺如す。然らば則ち此の岩層の成因は果して如何。想ふに彼等は元來は種々異様の岩石が一種の働力變質を受け、以て今日の有様を呈するに至れるものゝ如し。即ち正式絹雲母剝岩は粗粒の硬沙岩より變成し、綠籐絹雲母片麻岩は其の細

三波川系岩石の特性

三波川系岩石の成因

粒のものより變成したるものゝ如く、綠泥剝岩は一種或は多種の鹽基性噴出岩の凝灰岩より來りしものゝ如く、石墨絹雲母剝岩は炭質頁岩より來りしものゝ如し。(以上三波川系の岩石論は小藤博士著の秩父の品質剝岩系に就てなる論文による)

されば小藤博士に従へば、三波川系は純粹の始原代の岩石に非ずして古生代の岩石の變質したる者の如きも、故原田博士は三波川系中にヨーロッパの始原代上部の岩石に固有なる千枚岩を多く伴隨する等の事實よりして、之れを始原代上部の者と做せり。

三 古生大統

以上三波川系を被覆し、其の西南に現はるゝものは純粹の古生層にして、其の願布の區域及び厚さに於て遙に前者より大に、關東山塊即ち秩父山塊の大部分は之れによりて構成せらるゝと云ふも差支なき位なり。

關東山塊を構成する古生層は之れを大別して秩父系及び小佛系となすこと

古生大統

を得べく、更に秩父系を分ちて上中下の三部と爲すを得べし。而して此の謂はゆる秩父系と小佛系とは、八王子より西北西の方向に引ける一線によりて區別するを得べし。

下部秩父系

下部秩父系

上野甘樂郡に一山あり、御荷鉾山と云ふ。此の地方に發達する岩石は、帶青綠色の片理を有せる剝け易きものにして、之れを構成する鑛物は重みに輝石若くは角閃石或は其の變成物なるを以て、此の岩石を輝岩或は角閃岩と稱し、此の類の岩石の發育せる一帯を稱して御荷鉾系と云ふ。此の御荷鉾系は即ち下部秩父系にして關東山塊の外、多賀山脈の南部及び東部に露出し、後者に於ては往々にして石灰岩を挿む。多賀山脈の南部に於ける石灰岩は花崗岩の接觸變質を受け、細粒結晶質となり、色は重みに雪白色なるも、時としては綠色或は黝色を帶ぶ。謂はゆる常陸白寒水と稱するものは是れなり。

輝岩は暗綠色を常とするも又灰綠色のものも少なからず。片理多少明かにして、細粒乃至緻密なり。石灰岩を介在するの外往々にして石英岩と互層を爲す。

之れを薄片となし、顯微鏡下に照らすに、純粹のものは重みに輝石より成る。大概小形となりて存在し、片々に破壊せられたるもの多し。劈開線は多少著しく發達し、之れに沿ふて藍閃石綠簾石綠泥石等の如き新鑛物の發成することあり。或は時としては、全く藍閃石若くは他の角閃石と綠簾石との集合に外ならざることあり。

關東山塊の東部に笠山あり。是れ農商務省地質調査所出版前橋圖幅の所謂笠山層なる名の由りて來る所にして、此の山岳も亦輝岩より構成せられ、謂はゆる笠山層も亦御荷鉾系に外ならざるなり。

中部及上部秩父系

中部及上部秩父系

下部秩父系を整合的に被覆し輝綠凝灰岩硬砂岩粘板岩硅岩角岩ラデオリア板岩石灰岩等より或る岩層を中部及び上部秩父層と稱す。

輝綠凝灰岩

輝綠凝灰岩は往々にして其の間に輝綠岩の岩床を夾み、又多少の石灰岩を含有するを常とす。石理及び構造に於て甚だしく變化に富み、細粒にして多少片狀を呈するものあり、粗粒にして塊狀なるものあり。色の如きも綠色乃至

硅岩

至暗赤色にして、石灰岩を多く含む部分は白色を呈し、時として此等の諸色
を雜へ、三河にて五色石の名を以て呼ばるゝものあり。石灰岩は脈状を爲し
て挿入せらるゝものと李子状を爲して挿入せらるゝものとの二種あり。長石
の如きは新鮮なるものは殆んど稀にして、多く高陵土に化し、輝石も亦多く
綠泥石若くは藍閃石に化す。其の他礦物成分として綠簾石方解石褐鐵鑛及び
黃鐵鑛等あり。

硅岩は一に之れを石英岩と稱し、石英粒の集合にして、色は赤色綠色等を
呈するものあるも一定せず。屢々皺皮を爲し、又往々ラヂオラリアの遺骸を
含む。

アデノール板
岩

アデノール板岩とは緻密若くは薄板状の硅質岩にして、灰綠乃至黃綠色を
呈す。緻密にして塊状のものは介殼状の斷口を有し、薄板状のものは片々に
割れ易くして斷口多片状なり。割合に熔融し易く、主として石英及び曹長石
の細粒集合にして、其の他綠簾石光線石綠泥石榑チタン褐鐵鑛雲母鐵鑛雲母
等を含む。

ラヂオラリア
板岩

一般にアデノール板岩は輝綠岩の接觸作用を受けて生ずるものと、接觸作
用に直接の關係なくして生ずるものとの二様あるが、秩父層に於ては後者を
多しとす。時としては下部に近き中部に於てラヂオラリア板岩と相伴ひて出
て、時としては中部の中央に於て硅岩と相伴ひ、中部の上部に近き所及び上
部の下部に近き所に出づ。

ラヂオラリア板岩は褐赤色の緻密なる板状硅質の岩石にして上部及び中部
秩父層固有の岩石なり。殊に上部秩父層に於ては常に之れを發見す。アデノ
ール板岩と共に種々の層位に出づ。

石蓮蟲石灰岩

石蓮蟲石灰岩は秩父系中一定の層位に露はるゝ岩石にして従つて重要なも
のなり。色は白色乃至灰色にして、石理は緻密なるを常とするも、甚だしく
壓力を受けたるものは變質して晶質を呈するものあり。石蓮蟲及び珊瑚の化
石を含むも、何れも保存不良にして其の何種なるやを鑑識すべからず。常に
下部輝綠凝灰岩と伴隨するを以て、此の岩石あれば即ち其の岩層は下部のも
のたるを知るに足るなり。

硬砂岩

硬砂岩は即ちグレイワッケにして暗灰色なるを常とし、主として石英長石粘板岩等の破片の集合より成る碎屑岩なり。細粒乃至中粒を常とするも時としては石灰岩片及び角岩片を含み、礫岩的の構造を有することあり。次ぎに述ぶる粘板岩と互層して出づ。

粘板岩

粘板岩は粘土の凝固したるものにして、北上山塊を構成するものよりは多少の化石を發見するも、關東地方のものには全く化石を缺如す。

角岩

角岩は硅岩と大差なきも、彼は即ち粒狀の石英より成り、此れは即ち潜晶質の石英より成る。されば肉眼にては全く此の二つを區別する能はざること少からず。時としては又兩者漸次に移化することあり。上部及び上部に近き中部秩父系を成す。

紡錘蟲石灰岩

紡錘蟲石灰岩は有孔蟲に屬する紡錘蟲フスマシムシシワゲリナを含み層位亦一定し、秩父系の最上位を占むるを以て、石炭期及び其の後期のものとして、層位確定上及び時代鑑定上極めて要用なる岩層なり。謂はゆる山中地溝帯の南及び北に各帯を爲して現はる。南帯は五日市の西北に位する日原ヒノハラに起り、贊川を經

小佛層

て新羽に連貫す。北帯は三溪村字三山の西北に位する毘沙門山に起り叶山カナヤマを経て西北の方向を取り多野郡内に入る。北帯の叶山及び和田及び南帯の日原及び橋立には各石灰洞窟あり。又此石灰岩は探掘して石灰を製造する所多し。一般に秩父系は褶曲断層等地層の變位を受くること甚だ多く、殊に仙元山脈以南のものは岩層の錯雜、以北のものより甚だしく、中に就き青梅附近に於て断層褶曲最も甚だしとす。五日市の北三内より南方大久野に至る断層線は断層線中の大なるものにして、小断層の一目瞭然たるは青梅の南西多摩川に架せる萬年橋の兩側にあるものなり。

小佛層

武蔵相模の國境を爲す小佛峠に標式的に發育する淺海の沈積物たる小佛層は、秩父層に能く發育する輝綠凝灰岩及び石灰岩を缺如し、主として粘板岩及び硬砂岩より成り、其の他硅岩硅質板岩礫岩等あり。北方の秩父層より成る仙元山脈とは一大断層を以て其の境界を區劃せられ、東南は第三紀層を以て被覆せらる。

粘板岩は有機質に富む結果として常に黒灰色或は淡黒色なり。時としては

無燧炭様の光澤を帯ぶることあり。接觸變質を受けたる所は珪質のホルンフェルスとなり、壓力變質を受けたる所は千枚岩様のものとなる。曾て保存不全なる海藻の化石を發見せし外、未だ化石を發見せず。

硬砂岩は秩父系のもとの外觀内構に於て大差なし。

小佛峠附近に發育する小佛層の層向は略北西より南東に亘り、傾斜は北東にして、小佛山脈の主軸に沿ふて一個の背斜層を爲し、其の兩側に幾多の向斜層及び背斜層を爲せり。八溝の鷲の子山脈も亦佛頂山より連續する小佛層より構成せられ、花崗岩及び石英閃綠岩其の裂罅に沿ひ迸出せり。

四 中生層

關東山塊に發育する中生層は、中生層中我が國に於て最も廣く分布する白堊系及び侏羅系に屬するものにして、山系の中央を北西より南東に走り、地質學者の所謂山中地溝帯と稱するものは是れなり。此の他武州五日市附近に小區域を爲して現はるゝものあり。

中生層

山中地溝帯

山中地溝帯とは秩父三山川の溪谷を謂ひ、其の廣袤東西の長さは殆んど四十軒に達するも、南北は僅に二軒内外に過ぎず。東は秩父郡三山村字田ノ頭より起り、殆んど一直線を爲して志賀坂峠十石峠の二峻坂を經、西の方信濃大日向に達せり。即ち中生代に於ては、此の地溝帯は、兩側の古生紀の山の間に、現今ノルウェー、グリーンランド等の海岸に於て見る如き峽灣フィヨルドの觀を爲し、海水の深く灣入せしを知るに足るべし。

山中地溝帯を構成する岩石は重みに砂岩及び粘板岩にして、時に礫岩を交ゆ。砂岩は概して堅硬にして灰色を帯び、粘板岩は緻密にして黒色或は暗灰色を呈し、風化せる所は褐色を呈し、能く細片に碎く。礫岩は古生層の各成層岩の礫より成る。層向は略地形に従ひ東南東より西北西に走り、北東或は南西に傾き、幾多の褶曲及び斷層を爲せり。而して此の地溝帯の大部分は白堊層より成り、侏羅層は僅かに上野神ヶ原附近に小露出をなすのみ。

山中地溝帯よりは化石を出だす所多きが、就中上州南甘樂郡神ヶ原村字ウヅト、澤同村字瀬林同村字八幡澤武州秩父部河原澤村字ゴト、澤等は其の重も

山中地溝帯の化石

秩父白堊系の
層順

なる産地なり。化石は重もに葉鰓類、腹足類、頭足類、棘刺動物等の介殼にして、たゞウトー澤より蘇鐵科、八幡澤より雙子葉層の植物化石を發見せしのみ。

武州五日市の北、柚山に現はるゝ中生層は、砂岩、泥板岩、石灰岩より成り、北五十度西の層向を有し、六十度の角度を以て北東に傾斜す。石灰岩には鱈状を呈せる鱈状石灰岩及びシダリス、珊瑚、海綿等の化石を含む化石石灰岩の二種ありて、共に扁桃状を爲して砂岩、泥板岩の間に介在す。

其の他柚山の北西南澤と稱する所には、海綿の化石を産する石灰岩の露出あり。五日市の南辨天山の南腹にも亦石灰岩及び砂岩の累層ありて、孰れも其の層向、傾斜共に柚山の其れに同じく、同一の中生層に屬す。

是れより先き柚山の石灰岩より出だすシダリスの如きは、ヨーロッパ侏羅紀の化石に符合するを以て、始めは此等の中生層は侏羅紀に屬するものならんと認められしも、其の後層位上の關係よりして、下部白堊系に屬するものと爲すに至れり。

原田大塚兩博士の研究によれば秩父白堊系の層順は、之れを下より列擧す。

新生大統

地史上革命の
時代

新生代初期の
變動

れば次の如し。

- 一、三角介砂岩
- 暗褐色乃至綠灰色を帯び、細粒乃至粗粒なり。
- 二、暗色泥板岩、砂岩及び礫岩
- アンモン介を含む。
- 三、暗綠色泥板岩及び砂岩の厚層
- 化石を含まず。

五 新生大統

新生元の初期は、地球發育史に於ける一大革命の時代なり。海陸の境界が略、現今の形狀を呈するに至りしも此の時代なり。幾多の大山脈が褶曲隆起したるも亦此の時代なり。而して氣候帶の區別判然となるに至りしも亦此の時代なり。而して又舊時代の動植物が多く絶滅し、新時代の動植物が多く現出するに至りしも亦實に此の時代に外ならざるなり。要するに新生代の初期に

於ては、海陸の分布地球表面の高低凸凹氣候帶動植物の有様等一般に現代に接近類似するに至れり。是れ豈に地球發育史に於ける一大革命の時期にあらずして何ぞや。

我が日本群島の骨格は、已に古生代に於て其の概略を形つくりしと雖も、此の新生代の初めに於て大なる構造上の變化を來たせしのみならず、其の毛髮皮肉の如きは全く新生代に於て發育したり。新生代の初期に於ては北日本の大部分は全く蒼波の下に没して、たゞ關東阿武隈北上の諸山塊が、稍大なる島嶼を形成するに過ぎざりしが、當時の海底沈積物は、次第に加はる横壓力の作用により、隆起して此等山塊の附近に新たに陸地を造り、其の幾分は猶其の後に起れる變動によりて、或は局部陥没し個々の地塊をなして存ずるものあり、房總半島・銚子半島の如し。當時の大變動により本邦に新たに陸地の隆起せし所少なからずして、北日本の西半の大部分も此際に成り、中央の大山脈も亦此の時に生じたるなり。而して此等の大變動は孰れの方面より孰れの方角に向ひ來りしかと云ふに、想ふに西より東に向ひ來りしもの、如く、

第三系

其の結果として幾多の構造線は南北の方向に成形せられたるもの、如し。

夫れ地殻の大變動は、地殻に弱點を生ぜしむるものなり。我が日本群島が新生元に入りてより以上の大變動を起こすや、地球内部の熱灼せる岩漿は其の弱點に沿ふて地上に迸出し、幾多の火山脈を形成するに至れり。南北兩日本の境界に沿ひ、南北兩日本の山脈の走向と、殆んど直角を爲して羅列せる所謂富士火山脈を初めとし、北日本の中帯に沿ひ排列せる那須火山脈及び内帯の烏海火山脈、南日本の東端に於て殆んど南北の走向を有する乗鞍火山脈、日本海の沿岸に平行する白山火山脈等の如き是れなり。其の他九州の阿蘇火山脈及び霧島火山脈の如き、北海道の千島火山脈の如き、孰れも日本群島の地質構造と密接離るべからざるの關係あるものなり。

第三系 第三紀層を構成する岩石は、古期の岩石に比し概して柔軟粗鬆なるを常とし、砂礫粘土を始めとし砂岩礫岩泥板岩石灰岩石炭等あり。又凝灰岩及び層灰岩は此の系の大部分を占め、砂岩泥板岩の如きも多少の凝灰質を帯びざるもの殆んど稀なり。以て如何に當時火山活動の作用が活潑なりし

やを推測するに足るべし。

古期の地層より出だす所の化石は割合に稀なるに反し、第三系の地層中より出だす所の化石は割合に饒多なるも、其の精細なる研究は未だ十分ならずして、地層の類別時代の對照等は、歐米諸國に於けるもの、如く精細なる能はず。たゞ第三紀の最舊時代に屬する始新統は、小笠原島に於て之れを發見するに過ぎず。徳永博士に従がへばジッパ始新統の標準化石たる貨幣石モナエタマシは小笠原群島の一なる母島の西南部の凝灰岩中より多量に出づと。

中新統は之れを始新統に比するに其の區域稍大なりと云はざるべからず。先づ武州五日市の盆地に厚き泥板岩の層ありて、植物化石介殼化石等を出だし、泥灰岩を介在す。層向は南北にして東或は西に傾斜す。是れ恐くは中新統に屬するものなり。

秩父盆地はブラウンス氏が最新統と爲せし者にて、横山博士は其の東京近郊の最新層と岩質に於て非常の懸隔あると。東京近郊の最新層は水平的に排列するも、秩父盆地の地層は褶曲斷層等變動を請け居ること。ブラジヨスト

始新統

中新統

マ・コンコセレの如き東京近郊に曾て見ざる絶滅種を含むのみならず、又肉桂セクオイヤの如き本邦中新層に多々産出する植物を含有することにより寧ろ中新統と爲したる方最も眞に近からんかと云へり。其の層順を下より列擧すれば、礫岩砂岩及び泥板岩にして、化石を産すること多く、其の種類二三を除くの外能く東京近郊のものに類似す。層向は重もに北東にして、西部に於ては南北となる。

秩父盆地の第三紀を距る餘り遠からざる上野中小坂附近には、オルピトイデスレピドシクレナ亞屬を含む石灰岩あり。元來オルピトイデスはヨーロッパにては白堊上期より第三紀中新統の間に産するものなれども、其の最も能く發達せるは始新世にあるを以て中小坂の石灰岩を介む累層も亦始新統に屬する者と爲し、が、近比ジッパの中新統より之れを出だすの事實を發見したりしかば、今は中小坂の之れを含む第三紀層も中新統となすの穩當なるを知るに至れり。

下野鹽原には中新統及び最新統の兩統發達す。中新統は粗粒の流紋岩質凝

灰岩にして、時に泥土或は砂礫を交ゆ。層向は概ね北東—南西にして、小断層小裂罅甚だ多く、傾斜は一定せず。金原理學士に従へば最下部にプレクシア質層灰岩あり、其の上に斑緑白色凝灰岩あり、其の上に板状凝灰質砂岩細粒質白色凝灰岩斑緑白色凝灰岩凝灰質泥板岩黝色凝灰質砂岩綠色凝灰質砂岩青灰色凝灰岩ありて、種々の介殼化石を産す。

以上中新統を被覆するに木葉化石に富む最新統の層あり。主として黝色又は褐色の層灰岩より成り、變動を受けたること少なく、層向南十度西にして、傾斜は八度乃至十五度なり。鹽原七不思議の一に數へらるゝ木の葉石は、此の帯より出づる木葉化石に外ならざるなり。

最新統

最新統は關東平野第四期古層の下部に多く發達し、其の他房總半島三浦半島等の丘陵を構成するもの亦た多く之れに屬す。東京及び横濱四近の第三紀層は、ブラウンス氏先づ之を研究し、此の地方には介殼化石の數凡て八十七種ありて、其の中十八種は日本近海に於ては已に絶滅せるものなりと。(東京近傍地質編参照)其の後徳永博士は、王子品川より百八十種を檢出し、此れ等

は今日よりも寒き季候に適するものなりとし、又其の絶種と認むべきものは八種に過ぎずと云へり。介殼化石の重なる産地は東京附近王子・神奈川・横濱等にして、田端停車場の堀り割りに於ては、介殼層の上より象骨を出だせり。三浦半島は重みに粗粒砂岩凝灰岩より成り、其の間に少許の有孔蟲を含む石灰岩を介在し、層向は大凡そ東西にして四條の背斜軸あり。閃綠岩及び蛇紋岩亦數ヶ處に迸出す。逗子麻生浦賀横須賀絹張山等より蛟齒の化石を出だし、又介類腕足類を出だす所多し。小断層亦處々に現はれ、殊とに鎌倉極樂寺横須賀造船所等に露はるゝものは判然之れを見るを得べし。又彼の相模江ノ島の岩窟は断層に沿ひ海水の浸蝕作用を逞ふせしものに外ならず。

房總半島は亦凝灰岩凝灰角礫岩浮石角礫岩凝灰質砂岩等の火山碎屑岩より成り、たゞ房州伊豫ヶ嶽富山及び房總の國界を爲す花立峠に普通の礫岩砂岩及び泥板岩等の累層の露出せるを見るのみ。層向は北東より南西若くは北西より南東にして概ね緩傾斜を爲せども、多くの褶曲を爲し、殆ど東西の軸を有する數多の向斜及背斜あり。東京附近にして盛に建築石材として使用する

銚子層

房州石は、此の累層中の凝灰角礫岩にして、鋸山附近に多くの石切場あり。銚子半島東部及び峯岡山脈附近の第三紀層は礫岩砂岩泥板岩及び石灰岩より成り、層向は峯岡山脈の地勢に従ひ概ね東西にして、其の傾斜は北方に急斜するか、或は直立なり。伊豫ヶ岳富山も此の累層によりて構造せらる。此の累層中の砂岩は細微均齊の石英粒より成り、硅質に富むを以て銚子にては之れを採掘し、礪石となし銚子砥の名を以て廣く之れを販賣するを以て、巨智部博士は此の累層を銚子層と呼べり。

房總半島よりは化石を出だす所少からず。上總國島澤及び永井作よりは腹足類、葉鰓類等の化石を出だし、鋸山附近の凝灰角礫岩中よりは鮫齒の化石を出だす。又房州館山の南沼村及び上總金谷には第三紀の珊瑚礁あり。殊に前者は現今の海邊を距ること三十五米、海面を抜くこと二十米の處にありて、此の地方の漸次隆起せしこと、及び當時の氣候の今日より遙かに溫暖なりしを知るに足るべし。

大山附近の第三紀層は、凝灰角礫岩凝灰礫岩等の累層より成り、岩石

概ね堅硬にして、綠色のもの多きも、暗灰色又青灰色のもの少からず。往々其の間に層狀の富士岩を挿入し、地層錯雜して層向必ずしも一定せずと雖も、概して北東より南西に亘り、四十度乃至五十度の角度を以て北西或は南東に斜下す。化石を埋藏せざるを以て、其の詳細の年代は之れを知るべからざるも、其の附近の化石を産する地層との關係よりして之れを推定すれば、其の一部は第三紀の新时期に屬し、他の一部は古期に屬する者の如し。

酒匂川の上流地方を構成する第三紀は、凝灰岩少く、重もに礫岩砂岩泥板岩の累層より成るが、此の中の泥板岩は往々にして同心的に剝け、其の狀牡丹花に類するを以て俚俗之れを牡丹石と云ふ。其の他常陸國香取郡夏目村附近にて俗に鬼石と稱するは、第三紀に屬する花崗岩或は片麻岩の碎片より成れる砂岩にして、峭壁或は田畝の中より出て、其の形狀の怪異なるを以て此の名あり。又海上郡飯岡附近にて飯岡石と稱するは、其の砂嘴に堆積する第三紀の細粒凝灰質砂岩の轉石なり。

多賀山脈の東に露出する第三紀層は海濱成相にして礫岩砂岩泥板岩及び凝

灰岩より成り、層向は殆ど南北にして東に緩斜す。砂岩中には木葉化石及介殼化石を産す。又名古層の櫻石と稱するものは凝灰岩中に埋藏せらるゝ硅化木なり。又水戸附近及び助川附近よりは齧齒化石を産し、最新統に屬する者の如し。

久慈川溪谷に發育する第三紀層は多賀山脈東岸のものと相連なるも、之れを構成する岩石は多少相異なるを免れず。下部に瑪瑙類を出だす礫岩の厚層あり、凝灰質砂岩泥板岩の累層之れを被ひ、中に石英の薄層を介在す。其の上部は植物化石を含む泥板岩なり。富士岩其の裂罅に沿うて迸出し、男體山長福寺の峻嶽を構成す。

第三紀層は又那珂川の横谷に發達す。岩石は凝灰質砂岩及び頁岩にして、層向は大凡そ東西、南に緩斜す。累中には往々富士岩を夾む、之れ大平山より迸發せるものなるべし。

御坂層

御坂層 甲斐御坂峠に標式的に發達せる謂る御坂層は泥板岩、砂岩、礫岩質の凝灰岩より成り、往々其の中に層狀を呈せる閃綠岩、輝綠岩、玢岩等の謂はゆ

る古期噴出岩を挿む。此の内よりは未だ化石を發見せざるも、何となく古き外觀を呈するとの事實よりして、之れを中生代のものとせられしが、御坂峠の南河口湖邊のオルビトイデス及びリトタムニオンを含む石灰岩を夾める第三期層と、其の北部に能く發育する御坂層とは、其の層位に於て、及び其の岩質に於て著しき差異なきの事實よりして、今は之れを第三紀中に編入するに至れり。

丹澤山、四圍子山、尊佛山等は層狀輝綠玢岩及び凝灰岩より成る御坂層より構成せられ、層向は大約北々東より南々西或は南東に亘り、北西或は北東に傾斜す。

第四紀層

第四紀層 第三紀層成生後河海の沿岸に沈積せる地層を第四紀層と稱し、關東平野上總の西北部、下總の大部、常陸の南部即ち那須野原、習志野、原小金原、女化原、十文字野、志津原等の高臺若くは丘陵の地域は之れより成る。

第四系に新古の區別あり、關東平野の高臺の地を構成するものは即ち第四紀古層にして、其の低卑の地を構成するものは第四紀新層なり。東京にて謂

第四紀古層

はゆる山の手とは前者に屬し、謂はゆる下町とは後者に屬す。

第四紀古層は隨所多少其の成層の有様を異にすることありと雖も、其の主なるものを擧ぐれば、最上部に壩層の層あり、是れ俗に赤土或は野土と稱するものにして褐色無層理なり。其の間に厚薄不定の浮石層を介在す。之れに次で砂礫の層ありて、時としては其の上に粘土の層あることあり。而して常に第三紀層を被覆し、地層は水平に横はるを常とす。

第四紀古層の最上部を形成する壩層は粘土と砂との混合物にして重もに火山噴出物の分解せるものより成る。是れ一部は火山噴出物の壩層質に分解せんとしてあるものによりて之れを知るを得べく、一部は壩層中の細砂中には火山岩の主成分たる斜長石斜方輝石等の微晶あるにより之を知るを得べし。此くの如く地表にある壩層層は凝灰質壩層なるを以て輕浮粗鬆にして、晴天にして風強き日は萬丈の紅塵遠く天空を掩ひ、雨天の日には即ち泥濘脚を没するに至るなり。砂礫粘土は第三紀以前の岩石が水の崩壊運搬の作用により、多少の火山噴出物を混して沈積せしものなり。即ち礫は硬砂岩・珪岩・ラヂ

礫の有無

オラリア板岩閃綠岩等より成り、時としては其の厚さ十米以上に達し、東京附近にて山砂利と稱し、道路修築の用に供するもの是れなり。而して此の礫層中よりは、草木の假像を爲す泥質菱鐵鏽を出だすことあり、又木理を存する漂木を出だすことあり。又礫層中には往々にして其の中に泥鐵鏽層を挟むことあり。

然れども此の第四紀古層の下部に礫あるは東京附近、那須野原等に限きるものにして、下總平野に廣く發育する第四紀古層に於ては凝灰質壩層砂利を夾雜せる凝灰質砂粘土及び厚薄不定の泥鐵鏽若くは砂層より成り、石質概ね軟弱にして礫と稱すべき程のものなく、謂はゆる石無し之國の特相を現はせり。是れ其の礫を生すへき堅硬なる岩石の其の附近に存在せざるが故なり。之れに反して那須野原の如きは礫層の厚さ四丈或は五丈に達するに拘はらず、上部壩層の厚さは薄き所は壹尺に過ぎず、那須野原の荒蕪不毛の地たるは全く此の壩層の薄きと砂礫層の甚だしく厚ければなり。

第四紀古層の砂礫中には往々に波濤狀を呈し、謂はゆる偽層を爲すものあり。

偽層

第四紀新層

り。又青梅の南東に於ては多摩川に沿ひ、粘土若くは砂礫層間に、其の質極めて不良の褐炭を介在するものあり。

第四紀新層は分ちて二類となすことを得べし。一は古代の諸種の岩石水蝕風化の兩作用により、崩壊削磨せられたるもの、流水の爲めに運搬せられ、溪谷の底地、若くは河流の沿岸に沈積せるものにして、一は風波の作用により海濱に堆積せる砂層、若くは海底隆起して陸地となるに至れるもの是なり。利根川沿岸の低地相模川酒匂川多摩川等の洪涵地は前者に屬し、九十九里沿岸の平地東京灣沿岸及び利根川下流の平地常陸鹿島郡の大半等は後者に屬す。されは岩石は粘土砂礫等にして隨所一定せず。

六 噴出岩

噴出岩

水成岩に對しては之れを火成岩と云ひ、成層岩に對しては之れを塊状岩と云ひ、沈澱岩に對しては之れを噴出岩と云ふも、孰れも地球内部にありて熱灼せる岩漿が、地殻の弱點に沿ひ、或は地球表面に流出して火山を形ち造り、

或は地下の多少深き所に於て凝結して謂はゆる深成岩となり、或は地殻の裂隙を充填して岩脈を構成したるものを總稱せる異名同物たるに過ぎざるなり。故に噴出岩を分ちて深成岩及び火山岩の二つとなすを得べく、深成岩中に酸性の花崗岩石英閃綠岩あり。中性の閃綠岩飛白岩斑瀾岩輝綠岩あり。堊基性の蛇紋岩橄欖岩あり。火山岩に於ては流紋岩は酸性富士岩は中性玄武岩は堊基性なり。脈岩は其の岩質に於て、其の現出の状態に於て、深成岩及び火山岩の中間に位す。

(イ) 深成岩

深成岩

花崗岩

花崗岩

花崗岩 完品質粒狀の岩石にして、主として石英正長石雲母より成り、時としては角閃石又は輝石を含み、通常少量の斜長石を含有す。含有礦物の種類により次の變種あり。

- (一) 正式花崗岩或は複雲母花崗岩。石英正長石及び黒雲母・白雲母を有す。
- (二) 黒雲母花崗岩。石英正長石及び黒雲母を有す。

花崗斑岩

ペグマタイト

文象花崗岩

(三) 角閃花崗岩。石英正長石及角閃石より成る。等なり。而して通常黒雲母花崗岩を最も普通とす。

花崗岩は正長石雲母角閃石先づ結晶し、石英は單に其の間隙を充たすに過ぎざるを普通の石理となすも、時としては正長石は特に大品を爲し、斑狀不理を呈し、謂はゆる花崗斑岩となることあり。又花崗岩は往々にして脈狀を爲し、長石石英の大粒相集合し、雲母板狀をなして其の間に挟まることあり。之れをペグマタイト(鬼御影)と稱し、品窠に富み、數々種々の鑛物の美品を産することあり。ペグマタイトの一種にして石英と長石と相抱合し、其の横斷面は恰もヘブリユエ文字を排列せるが如き有様を呈するものを文象花崗岩と云ふ。

花崗岩の噴出せる地域は甚だ廣く關東地方に於ては多賀山脈の山骨を構成し、筑波山の基礎を爲し、南豊凶山より北佛頂山に至る迄南北に長く迸發せるもの等其の重なるものなり。

多賀山脈の山骨を構成する花崗岩は御荷鉾系成生期より、中部秩父系成生

期に至る迄の間に於て迸發し、横壓力の爲に石理稍々片狀を呈するに至れり。之れに接觸する輝岩は著しく品質を呈し、輝石減して角閃石増加し、加之電氣石董青石オットレライトの如き接觸鑛物を生じ、石灰岩は品質粗粒となり、又柘榴石を散點す。筑波山豊凶山等に露出する花崗岩は何れも古生代以後の迸發に係り、古生層に接觸變質を與へしこと少なからず。筑波山東南の古生層の如く、又加波山の北麓、愛宕山の附近等最も其の著しきものなり。又吾國山の北部に露出する石灰岩の如きは多くは品質に變ぜり。八溝鷲の子山脈中に露出する花崗岩は迸發の時期多賀山脈のものより稍、後代に屬するが如し。上野國足尾の南なる渡良瀬川に沿うたる澤入村には花崗岩粘板岩と接觸し、粘板岩は爲めに白色の斑紋を呈するに至れるものあり。此の白色の斑紋は即ち董青石の一種にして、其の横斷面六角形を爲し、櫻花の如き外觀を呈するを以て里人之れを櫻石と稱し、故菊池博士は其の鑛物學上の性質普通の董青石と稍、異なるを以つて之れに櫻石 *Ceristite* なる名稱を與へたり。其の他花崗岩は下野日光田代山上野國藤原村等に露出し、其の迸發年代は中生元に屬する

閃綠岩

者の如し。
花崗岩は石質堅牢美麗なるを以て建築石材として需用多きものなり。筑波加波山中には多くの採掘所ありて、建築材の外、挽磨墓碑等を製す。此の岩石は火熱に遇へば破碎するの憂あるも、常陸産のものには耐火質のものあり。
閃綠岩 主として角閃石・斜長石より成る完品質粒状の岩石にして、角閃石は一部輝石により、又一部雲母により代はらるゝことあり。又石英を含むれことありて、然るときは之を石英閃綠岩と云ふ。されは石英閃綠岩は往々にして花崗岩と區別すへからざることあり。頒布の區域は花崗岩より狭く上野の小川村戸倉村下野の三依村常陸の筑波山甲斐相摸兩國の境界等に露出するものを重なるものとす。

飛白岩
(斑糲岩)

飛白岩(斑糲岩) 異剝石・斜長石を主成分とし、橄欖石・角閃石・斜方輝石・黒雲母を副成分とする完品質の岩石なり。異剝石若し角閃石に變ずることあれば之れを飛白閃綠岩と云ふ。安房峰岡山脈の東部に於ては飛白岩は閃綠岩と相伴ひ露出し、西々北より東々南の方向を取り、貝渚村に至りて海に盡く。

輝綠岩

蛇紋岩亦之れと相伴ふて出づ。此の三岩は密接の關係あるものにして飛白岩より閃綠岩に變し、閃綠岩より蛇紋岩に變すること屢々あり。

輝綠岩

斜長石及輝石を主成分とし、磁鐵礦・チタン鐵礦及燐灰石等を副成分とす。而して輝石は往々にして角閃石・綠泥石・綠簾石に變し、斜長石は方解石に變ず。石理は粗粒状・細粒状又は緻密の者あり。秩父系御坂層の凝灰岩中に層状を爲して現出す。顯微鏡下に於て輝石は歪形を爲して斜長石の間を填充するを其の特性とし、此組織を輝綠岩的組織或はオフィテツグ組織と稱す。

橄欖岩

橄欖岩

長石を含有せず、主として橄欖石より成り、其の他鐵苦土・硅酸鹽類に屬する一二の礦物・鐵礦等を含む。従つて二三の變種あり。蛇紋岩に化すること甚だ多し。又輝岩と密接の關係あり。多賀山脈に於ける橄欖岩の迸出は特に輝岩と密接の關係あるもの、如く、多くは岩脈を爲して輝岩の累層を貫通し稀に扁豆状を爲して該層中に介在す。其の蛇紋化せるものは黒色の磁鐵礦及びクロム鐵礦相集合して宛も竹葉の如き斑紋を呈し、蛇紋石・陽起石・滑石及び綠泥石の集合より成れる帶綠白色の石質中に散在せり。俗に謂はゆる

斑石

蛇紋岩

蛇灰岩

火山岩

石英斑岩

玢岩

斑石と稱するものは是れにして、其の紋理の形状如何により大笹小笹・紅葉・牡丹霜降及び鼈甲等の區別あり。此れ等は裝飾石材として使用せらる。

蛇紋岩 斑糲岩・輝綠岩・橄欖岩等と相伴ひ出づるものにして、此れ等の岩石の變質せらるものなり。蛇灰岩は蛇紋岩の碎片の大理石により膠結せられたるものにして秩父郡大淵に出で、裝飾石として用ゐらる。蛇紋岩は前記橄欖岩・飛白岩の出づる所には大概之れを産す

(口) 火山岩

石英斑岩 石英・長石・黒雲母の斑品を緻品質の石基中に散點する斑狀の岩石にして、化學成分に於ては花崗岩と等しく、たゞ其の石理を異にす。岩脈を爲して諸所に現出するも、大塊を爲して出づるは日光附近にして、一方に於ては深成岩たる花崗岩に漸移し、一方に於ては火山岩たる流紋岩に漸化す。
玢岩 (小紋岩・輝綠岩或は閃綠岩に相當する舊火山岩にして、斜長石・角閃石・輝石の斑品を緻密の石基中に散點する斑狀の岩石なり。輝石・角閃石に比し

輝綠玢岩

角閃玢岩

流紋岩

多きときは之れを輝綠玢岩と稱し、角閃石・輝石に比して多きときは之れを閃綠玢岩と云ふ。丹澤山・尊佛山等の御坂層中に層狀を爲して現はるものは第三紀の噴出に掛り、百生層中生層には岩脈を爲して出づ。

流紋岩(石英粗面岩)

其の化學成分に於て、其の鑛物成分に於て、而して時としては其の外観内構に於て、石英斑岩と全く同じきものなり。たゞ彼れは重もに第三紀次前に於て噴出し、之れは重もに第三紀以後に於て噴出したるの差違あるのみ。石理種々にして、或は斑狀なるものあり、或は緻密なるものあり、而して或は著しく流狀を呈するものあり。又全軀玻璃質なるものあり。柱狀節理往々にして能く發達す。

流紋岩は第三紀に於て盛に噴出し、或は熔岩流を爲して山岳を形成し、或は岩脈となりて地層の裂隙を充たし、或は盛に灰砂を降らして凝灰岩の厚層を形成す。高原火山地方、日光火山地方の白根外輪山・温泉岳・鬼怒沼山は流紋岩より成り、伊豆新島式根島及び神津島には浮石質及び黒曜石質の流紋岩ありて、新島にては建築石材として之れを採掘し、上州北甘樂郡にて磐戸石と

富士岩

して礎石或は碑石の類に供するもの亦一種の流紋岩なり。而して又足尾銅山の山岳を構成するものは又流紋岩なり。

富士岩(安山岩) 新火山岩中其の頒布の區域廣大なる點に於て、其の噴出の分量多大なる點に於て未だ曾て富士岩に如くものあらざるなり。斜長石と鐵苦土硅酸鹽類の一二とを主成分とする斑狀の岩石にして、鐵苦土硅酸鹽類の種類如何によりて次ぎの種類あり。

(一) **輝石富士岩** 富士岩中殊に其の頒布大なるものにして、輝石は單斜晶系に屬する普通の輝石のみを含有するものあれども、多くは更に斜方晶系に屬する紫蘇輝石を共に含有す。此くの如く單斜斜方の兩種の輝石を含有する富士岩を特に複輝石富士岩と云ひ、箱根日光那須高原荒船等の火山は主として此の複輝石富士岩及び其の集塊岩より成り、大山附近にては又岩床と爲し、第三紀凝灰岩中にあり。又巨智部博士に従へば銚子半島の北部及び東南部には頑火富士岩ありて、其の噴出口は恐くは愛宕山なるべしと云ふ。又其の鐵苦土硅酸鹽類として古銅石を含有するものを古銅富士岩と云ふ。輝石富

輝石富士岩

角閃富士岩

士岩は建築石材として使用せらるゝこと少からず、相模六箇村にて小松堅石と稱する者の如き即ち是れにして、根府川石と稱するものは石理緻密にして板狀を呈するものを云ふなり。

(二) **角閃富士岩** 富士岩の鐵若土硅酸鹽類が角閃石なるときは、之れを角閃富士岩と云ふ。其の更らに輝石を含有するものを閃輝富士岩と云ひ石英を含むものを英閃富士岩と云ふ。榛名火山中の相馬山は英閃輝富士岩より成り、榛名富士及びニツケ嶽は角閃富士岩より成り、赤城火山の中央火口丘地藏嶽及び寄生火山は閃輝富士岩に屬す。

橄欖富士岩

(三) **橄欖輝石富士岩** 輝石富士岩中には大抵副成分として橄欖石を含有するが、其の量特に多きときは、之れを橄欖輝石富士岩と云ふ。日光男體山の下部、箱根火山中の明星山足柄峠明神山島ヶ岳等に其の熔岩流あり。

黑雲母富士岩

(四) **黑雲母富士岩** 富士岩の鐵苦土硅酸鹽類として黑雲母を含むものを黑雲母富士岩と稱するが、本邦には其の噴出少なく、特に關東地方に於ては其の噴出所を知らず。

石英富士岩

(五) 石英富士岩 普通の富士岩は石英を含有せざるを常とするが、其の酸性なるものは、動もすれば硅酸を遊離し、謂はゆる石英富士岩を爲すに至るものあり。然るときは岩石自ら流紋岩に近似す。頒布割合に狭く、上州砥澤村及び上小坂村に其の露出ありて、御嶽砥と稱し、砥石として之れを採掘す。

變朽富士岩

(六) 變朽富士岩(粒狀安山岩) 暗綠色緻密の岩石にして或は脈を爲し、或は熔岩流をなして現出す。之れを薄片となし、顯微鏡下に照らすに、石基は多く玻璃質を失ひ微晶質粒状となり、輝石は變して纖維狀のウラル石となり、且つ後成物として綠泥石綠簾石方解石等を含む。是れ普通の輝石富士岩が噴氣孔或は温泉等の作用を受け變化したるものなり。荒船火山地方、碓氷峠等に稍々廣く露出し、相州矢倉嶽の山骨を形成し、大山の凝灰岩中に岩床を爲して挿入す。

無人岩

(七) 無人岩 小笠原群島の一名より來りしものにして、同地の玻璃質富士岩中には種々奇形なる形状を爲す輝石を含むが、其の中に長石甚だ少なく、

玄武岩

火山岩噴出の順序

古銅石橄欖石及び異剝石に似たる輝石を含有するものあり、是れ未だ曾て他所に見ざる所の富士岩なるを以て無人岩なる別名を與へたり。

玄武岩、鑛物成分に於ては輝石富士岩と大差なく、たゞ橄欖石を含むこと數々彼れに比して多量なることあると、化學成分の鹽基性なるとの差あるのみ。而して我が國に産するは皆斜長石玄武岩に屬す。

火山岩噴出の順序

火山岩の噴出は自ら一定の順序あるもの、如く、

榛名火山に於ては初めに輝石富士岩噴出し、次で英閃富士岩出て、之れに次いで角閃富士岩出てたり。赤城火山に於ては初め複輝石富士岩に屬する集塊岩及び熔岩を噴出し、閃輝富士岩之れに次いで出て火口丘及び寄生火山を形成せり。日光火山に於ては初期の噴出に係るものは複輝石富士岩にして、之れに次いで橄欖輝石富士岩出てたり。箱根火山に於ては最も酸性なる紫蘇輝石富士岩最初に出て、複輝石富士岩之れに次ぎ輝石富士岩又之れに次ぎ、橄欖輝石富士岩最も後に噴出せり。

要するに熔岩噴出の順序は、大體に於いて相同じく、初めは複輝石富士岩

にて、橄欖輝石富士岩多少之れに後れて出て、次に閃輝富士岩なり。而して若し流紋岩の熔岩を伴ふときは、流紋岩もつとも先きに迸發したるを常とす。

豆南諸島と富士火山脈

豆南諸島と富士火山脈

豆南諸島は地形の上よりして、之れを圓錐形を爲せる島と、臺形を爲せる島との二種に區別するを得ると同時に、地質の上よりして亦、之れを流紋岩より形成せらるものと、富士岩より形成せらるゝものとの二種に分つを得べし。北々西の方の方向に羅列する新島式根島及び神津島は前者に屬し、其の東方に一列を爲す大島利島鶉渡根島三宅島御藏島八丈島等は後者に屬す。

福地理學士に従へば新島の流紋岩には頑火流紋岩輝石流紋岩輝閃流紋岩角閃流紋岩輝雲流紋岩雲母流紋岩の六種ありて、孰れも石英の斑晶に富み石英は甚だしく玻璃質にして、浮石様のものより黒曜石様のものに至る。熔岩流は九種あり。其の他流紋岩の灰砂の堆積したるもの及び富士岩灰砂層あり。式根島及び神津島亦新島と同様の岩石より成る。

利島は黝色緻密なる橄欖富士岩より成り、鶉渡根島亦同様の岩石より成る。其の他三宅島御藏島八丈島等皆悉く富士岩類より成る。其の噴出の時代は流紋岩類富士岩類より古きが如く、前者は恐くは第三期の終りに噴出したるもの、如く、後者は第四紀に至りて噴出したるもの、如し。福地理學士は流紋岩より成り、臺形を成す所の島を新島列島と呼び、富士岩より成り、圓錐形を呈する列島を富士帶列島と呼べり。此の謂はゆる富士帶列島は前記八丈島より八丈小島青ヶ島ベヨネス島スミス岩島トモヤ嶺島トモヤロサリオ島等を経て火山列島硫黄島列島に至る。

新島列島及び富士帶列島の外更に一帶あり。富士岩の岩床凝灰岩及び石灰岩等より成り、石灰中には始新統特有の化石スムリテスを含み、即ち始新統の火山たる小笠原列島是れなり。小笠原列島は前二者より時代最も古きを以て従つて褶曲斷層等多く、地盤の構造錯雜を極め、水蝕作用亦極めて著し。されは從來豆南諸島は富士火山脈に屬するとして簡單に説き去られたるものも、之れを精査すれば自ら三火山脈に區別すべきことを發見するなり。一は

大島・八丈島・三宅島等の重もに富士岩類より成り圓錐形を爲し、謂はゆる富士火山脈に屬するものにして、一は流紋岩類より成り臺形を爲す新島式根島神津島謂はゆる新島帯に屬するもの、一は始新統の化石を其の間に夾む小笠原列島是れなり。

七 温泉

温泉は必ずしも火山地方に限きらざるも、地下等温線の上騰せる火山地方に多く存することは固よりの事なり。今關東地方に於ける重なる温泉を火山地方により類別し、其の概要を記述すべし。

箱根火山地方 箱根地方温泉の饒多なる、箱根七湯の名は往昔より既に人口に膾炙せり。先づ山麓より高きに從ひて、これを記せんに、湯本温泉は透明なる單純泉にして、兩火口瀬の會點なる早川の南岸層灰岩中に湧出し、それより西北八町、塔の澤温泉なり。同じく早川の南岸に位し、層灰岩及び岩脈の接觸部より湧出し、泉質は鹽類泉なり。それより宮下の東南早川の河

温泉

箱根火山地方

邊層灰岩より湧出する堂ヶ島温泉單純泉を経て、外輪山の切所淺間山の北麓にする宮下温泉鹽類泉より、底倉、木賀の二温泉に達す。鹽類泉にして共に早雲地獄より流出せる集塊質の泥流中より湧出し、一は其の通路に固形分を沈澱して謂はゆる蛇骨石を爲し、一は早川の南端なる巨大の岩脈の間隙に沿ひて出づるが爲め、温泉の沈澱物を岩脈中の氣孔に残す。木賀より右に登れば芦の湯温泉あり。七湯中最高の地に位し、泉源は駒ヶ嶽の東南麓宇空藏嶽の東方平地にあり。透明の硫黄泉にして、爆裂の稍々舊期に屬せる硫黄山及び湯の花澤硫氣噴孔附近に湧出し、竹樋を以てこれを導く。その硫氣の盛なる、其の地に近ければ、著るしく人の鼻を衝き來るは、この種の温泉の常態なり。湯の花澤温泉は芦の湯を距ること西北五六町の溪間にあり。泉質芦の湯と同じく硫黄質單純泉なれど其の泉固形分に富めるを以て、これを沈澱乾燥せしめて盛に湯の花を製せり。木賀温泉より左折すれば、數町にして小湧谷温泉あり。小湧谷噴孔に湧出す。されど其の量少きが爲め、一部流水を引いて噴氣中を通過せしめ、竹筒を以てこれを數丁の東なる浴舎に導く。酸性泉

赤城火山
地方

にして温度又高し。これより一里半、有名なる早雲地獄あり。上、下仙石温泉、強羅温泉共に酸性泉にして皆泉源をこれに仰ぎ、竈を設けて遠くこれを浴槽に導く。されど泉源の温度高きか爲め、猶攝氏四十八度内外の温度を保てり。姥子温泉は鹽類泉にして、大湧谷の西方岩窟の間より出づ。母岩は湯の花澤と同じく神山下部の集塊熔岩なり。

赤城火山地方

火山地方には其の活動の名残として、硫氣洞或は噴汽洞を存し、又温泉等を湧出せしむるを例と爲れど、赤城火山にはこれ等の遺跡更に無く、近代まで少量ながらも不純なる硫黄を産せし地獄谷すら、全く其の跡を絶つに至れり。唯、東南麓に湯の澤鑛泉、梨木澤鑛泉の二あり。一は荒山腰より發する溪流の岸にありて、集塊熔岩の裂罅より湧出し、一は深澤川の溪間、字榎下と稱する處にありて、其の母岩前者に同じ。而して泉質は共に炭酸泉なり。

榛名火山
地方

榛名火山地方

榛名火山二ツ嶽の麓に、當年噴火の餘勢を残したる噴汽孔あり。今、此の上に室を設け、これに微量の水蒸汽の浮石層を通して進

白根火山
地方

出するものを集め、以て人の游浴に供し、これを蒸湯といふ。これより北七八町を下りて、伊香保温泉あり。湯元と稱する溪谷の集塊岩と浮石層との間より湧出し、泉源大凡八ヶ所あり。潺々滴々相集り、木樋を通して、伊香保町に至り、瀧の如く浴室に落つ。浴樓は山に凭り、崖に枕らし、屬々相重り、甚た四邊の眺望を恣にす。下流は又集りて六箇の水車を回轉し、更に山溪を経て、遠近の田圃を潤す。泉質は炭酸泉にして、透明無臭、微かに茶褐色を帯ひ、且少しく鹹味を有せり。其の茶褐色なるは温泉中に含水酸化鐵を含むこと多きが故にして、里人はこれを用ひて、手拭及び白木綿等を染色し、伊香保染と稱して販賣せり。

白根火山地方

白根火山は上信兩國の境に跨れるを以て、其の温泉の分布亦た甚だ廣し。今、上野國に屬するものを舉れば、澤渡温泉は群馬郡中の條町より草津に通する沿道にある鹽類泉にして、輝石富士岩より湧出し、四万温泉は新湯山口湯日向見湯等數町を隔て、四万川の沿岸に散在し、御坂層より湧出す。而して泉質は澤渡に同じ。その他、同泉にして同郡にある者、

湯島花敷川中法師嶺新卷等の諸温泉なり。硫黄泉は吾妻川の南岸、山腹に聳立せる輝石富士岩より湧出せる川原湯温泉を第一とし、生須川の東岸山麓に湧出せる應徳温泉母岩同上之れに次ぎ、其の他、松の湯湯湯方座不動澤の諸泉あり。されどこの火山區域中、最も有名にして、且最も峻烈なるは、同郡草津村に湧出せる草津温泉に如くものなし。泉質は酸性泉にして、該地の四近隨處に湧出し、地質は火山岩層及び輝石富士岩なり。地は海面を抜くこと一千百六十四米の高さにありて、熱度は攝氏四十五度乃至七十度を有し、國中第一の温泉なり。

日光火山
地方

日光火山地方

日光火山に於ける諸温泉の地位は多く西北深山の中にありて、稍人寰に近きものは湯本温泉あるのみ。湯本温泉は白根山の西麓字湯平にある硫黄泉にして、泉源八あり。最も高温なるを荒湯と稱し、一坪半の井戸を造り、其の中に温泉充溢し、沸々として音を發せり。母岩は岩層温泉餘土に掩はれて明かならざるも、多くは石英斑岩なるか如し。殊に泉質硫化水素に富みたるを以て、温泉場に近くや、硫氣著るしく人を襲ひ、鼻を蔽

はざるを得ざらしむ。これより金田峠を踰へ、西澤嶺山の傍を掠めて、栗山一帯の地に入れば、温泉各所に湧出し、其の量亦甚た多し。川俣温泉は川俣村を距ると一里、鬼怒川の清溪に臨み、花崗岩の裂罅より湧出す。泉源三所あれとも孰れも無色透明硫化水素臭を帯ひ、鹽類泉硫黄泉に屬す。殊に奇とすへきは、これより二里餘を隔てたる湯澤にして、その溪流は悉く温泉と稱すへく、或は河岸に滯留して池を爲し、或は岸壁の裂隙より湧出して小瀑を爲し、俚俗吹口と稱する處に至れば、流紋石の斜面なる裂隙より温泉湧噴し、中には堆積せる沈澱物の圓錐形をつくるありて、その頂點なる小孔より温泉沸々として噴騰せり。其の圓錐の數三四、その最も大なるものも高さ廿六糎、底徑十糎を有せり。されどこの圓錐形は永久不變の者にはあらず、漸く堆積して漸く高く、地方人の言ふ所に従へば最高三分の二米に達したることありと。而してこれ等長大なるものも、一度大雨に逢へば、河水と共に流れ去るを例とす。此の噴泉は硫黄質にして其の味頗る鹹苦に、圓錐を構成せるものは、重に硫酸石灰にして、色白く質粗なり。其の他、附近に同質の温泉幾條

鹽原火山
地方

となく流出して小瀑を成し、其の流口には同質の沈渣物無數に垂下せるを認む。地、深山窮谷の中にあるを以て、人多くこれを知らざれとも、斯の如く湧量夥多なるは蓋し稀なり。川俣温泉より鬼怒川を溯ること猶三里餘、日光澤温泉あり。鹽類硫黄泉にして、流紋岩より湧出し、泉量また甚た多し。

鹽原火山地方 鹽原火山の北麓、箒川の溪谷中に有名なる鹽原温泉あり。其の涌口の多き、總計四十三ヶ所に及へり。これ、此地方地下の等熱線が火山作用の爲めに地表に近けるによるは勿論なれども箒川の溪谷が地層の裂罅斷層と殆ど相直交せるは、其の直接原因なり。この多數の湧泉中弱アルカリ性の鹽類泉を大網鹽の湯畑下須卷門前古町の六と爲し、炭酸泉を福渡梶原の二と爲し、その他硫黄泉なる鹽釜温泉、酸性泉なる新湯温泉この温泉のみ遠く離れて、新湯爆裂火口内にありなり。而して大網温泉畑下温泉須卷温泉門前温泉福渡温泉は共に下部第三紀斑緑白色凝灰岩中より湧出し、鹽の湯温泉は流紋岩々脈の裂罅中より湧出し、古町温泉は上部第三紀層中より湧出す。新湯温泉は舊、火山泥中より湧出したれど、今は格の湯を除くの外、其の湧

那須火山
地方

出全く止みしを以て、水を噴汽孔中に導入し、之れを温めて以て浴用に供せり。また鬼怒川沿岸に川治藤原瀧の三温泉あり。前二者は共に弱アルカリ性の鹽類泉にして、川治は第三紀層の角稜質凝灰岩中より湧出し、藤原は流紋岩及び英閃小紋岩の裂罅より湧出す。瀧温泉は弱アルカリ性の硫黄泉なり。その他、高原火山の東南面に、寺山及び赤瀧の鑛泉あり。共に冷泉にして泉質未だ詳かならず。

那須火山地方 那須火山を分ちて古期火山岩地、新期火山岩地と爲し、前者の區域に湧出する温泉は鹽類泉若くは單純泉にして、硫化水素炭酸其の他の瓦斯を含有すること少く、温度亦甚た高からず。之れに反し後者則ち火熱の未だ衰へざる地域に湧出する温泉は、多量の硫酸硝酸并びに鹽酸を含有し、特に碳酸硫化水素等の瓦斯に溶解せる酸性泉硫黄泉又たは鹽類泉を多しとす。而して有名なる那須八湯は後者に屬し、其の配布は東北西南に一直線を爲し、那須火山派と相平行せり。今、これを叙説すれば、湯本温泉は酸性泉にして集塊質泥流より湧出し、其の泉量の多き、實に八湯中の第一に位

す。辨天・大丸・旭北・三斗・小屋板室の諸泉は孰れも皆鹽類泉にて、湧出母岩は皆前記湯本温泉に同けれど板室温泉のみは複輝石富士岩を以てその母岩と爲せり。其の他、硫黄泉なる高雄温泉あり。猶此の地は温泉場の外に、湧出せる箇所甚だ多く、大丸温泉より旭温泉に至る間の大丸澤の如きは、殆んど鑛泉の溪流と稱するも可なり。新期火山岩地にも亦温泉少なからず。甲子・二岐・白川湯本・野仲湯の上等の諸温泉あり。甲子温泉は鹽類泉にして花崗岩より湧出し、二岐・白川の兩温泉は第三紀泥板岩より湧出し、野仲温泉は單純泉にして、其の湧出母岩前者に同し。湯の上温泉は、弱鹽類泉なる切湯鹽類泉なる館湯、單純泉なる猿湯に分れ、皆共に第三紀層中より湧出せり。されどこの新期火山岩地に屬する諸温泉は岩代・磐城の地にあるを以て、奥羽の部に於て、更に之を説くことあるべし。

第四章 氣象

氣象の概況

凡そ一地方の氣象を詳らかにせんと欲せば、先づ其の地球上に於ける位置・地勢・水陸の配布如何等を究めざるべからず。既に詳述せるが如く、關東の地たるや、概ね北緯三十五度乃至三十七度の間に其の位置を占め、温帶の中央部に位せるを以て、單に緯度の點より觀察するも、既に最良の氣候帶に屬するを知る。而して北西部は、巍峨たる峰巒自然に障壁をなし、南東部一帯は、渺茫たる太平洋に面し、其の間に展開せる廣漠の平原地方あるを以て、其の風土も、アジア大陸の酷烈なる氣候の影響を蒙むること少なく、加ふるに、南方より流れ來れる黒潮は、絶えず沿岸を潤ほして、多少氣候を調和するあり、風雨寒暖宜しきを得て、所謂海洋的性質を帯ぶるの風土たり。然れども、兩毛及び武藏の北西部の如き山岳地方は、氣温低く、降雨寡少にして、武總常等に跨がれる平原地方は、氣温高く、降雨亦比較的夥多なる等、其の間に著るしき懸隔存するは、言を俟たずとす。今逐次項を分ちて、其の概況を述べべし。

氣温 氣温は、一月二月最も低く、四月より著るしく上昇し、七月より

八月に至て最高に達す。八月各地の月平均は、概ね二十五度以上にある。十月よりは、急劇の遞降を呈するを常とす。而して年平均同温線配布の模様を見るに、四國を横過せる十五度の同温線は、伊豆半島の中部より、房總の間に亘り、十三度の同温線は、兩毛より水戸附近に亘り、東京は正に十四度の同温線内にありて、各線皆北東に向て彎曲せり。然り而して、世界同緯度の地に於ける公定温度(ド・ウ氏算定)との比較如何を見るに、暖期に於ては、殆んど偏差を見るなしと雖も、寒期に於ては、稍、低きに失し、東京は負六度、内地に入るに從て、其の偏差愈甚だしく、宇都宮に到れば、既に負八度以上に達せり。是れ敢て關東地方のみに限れる現象にはあらず、偏差の多少こそあれ、本邦到る所この傾向あらざるはなし。又最高温度の年平均は、各地概ね十八・九度にして、最低温度の年平均は、沿海地方に十乃至十一度、内地地方に七乃至九度を測り、最高低の較差も、内地に行くに從て多しとす。最近までに測られたる絶對温度は、最高東京三十六度六(明治十九年七月十四日)最低宇都宮氷點下十一度八(二十六年一月三十日)に及び、(足尾は土地甚だ高きを

以て例外とす)其の較差實に四十八度四に達せり、亦尠しとせず。而して最高温度の三十度以上に昇りたる一個年間の平均日數は、東京三十一日、銚子二十四日、宇都宮二十三日を數へ、之れに反して、最低温度の氷點下に降りたる日數は、宇都宮九十六日、東京七十二日、銚子二十二日を數ふるを見れば、夏期に於ける炎暑の度は、各地大抵一樣なりと雖も、冬期に於ては、各地寒冷の度に著るしき懸隔を生じ、沿海の地は、内陸よりも寒威凛烈の日數かに少なく、一月平均温度の如き、安房布良は六度五なるに、宇都宮は零度六の低温なるを見る。

尙ほ本地方氣温の状態として顯著なるは、冬春の候、晝夜温度の差多大なるにあり。是れ該期は、常に晴明の日多く、大氣乾燥せるが故に、夜間の輻射熱甚だしく、氣温の平衡を保つ能はざるに由るなり。爰に温度表を掲げて参照に資す。

(注意) 温度は攝氏に據り、負と記したるものは、零度以下なるを示す。

平均温度表

氣壓

地名	月次												最高日	最低日			
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月			年		
横須賀	四六	四九	四七	四八	四七	四六	四七	四七	四六	四六	四六	四六	四六	三六	二七	三六	二八
横濱	三九	四一	四〇	四一	四一	四〇	四一	四一	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	三五	二七	三五	二八
東京	二七	三〇	二八	二九	二九	二八	二九	二九	二八	二八	二八	二八	二八	二六	一九	二六	一九
布良	六五	六八	六八	六八	六八	六八	六八	六八	六八	六八	六八	六八	六八	六六	五九	六六	五九
銚子	五〇	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五〇	四三	五〇	四三
水戸	二二	二五	二四	二五	二五	二四	二五	二五	二四	二四	二四	二四	二四	二二	一五	二二	一五
熊谷	二二	二五	二四	二五	二五	二四	二五	二五	二四	二四	二四	二四	二四	二二	一五	二二	一五
前橋	二二	二五	二四	二五	二五	二四	二五	二五	二四	二四	二四	二四	二四	二二	一五	二二	一五
足尾	二二	二五	二四	二五	二五	二四	二五	二五	二四	二四	二四	二四	二四	二二	一五	二二	一五
宇都宮	〇六	〇九	〇七	〇八	〇八	〇七	〇八	〇八	〇七	〇七	〇七	〇七	〇七	〇五	〇四	〇五	〇四

氣壓 氣壓の年平均は、概ね七百六十耗より七百六十一耗までの間にありて、七百六十耗五に當れる同壓線は、西部に彎曲せる弧を書きて、伊豆沖より東京附近を通過し、北方に亘れり。其の配布の状態を四季に別ちて述べ

暴風雨

んに、冬期に於ては、其の示度平均七百六十二耗乃至七百六十三耗にして、西方に向つて高まり、其の傾度稍甚だしく。春期に於ては、七百六十一耗にして、同壓線は著しく西方に向て彎曲す。夏期に於ては、示度頗る低く、七百五十七耗五或は六を示し、其の配置全然春冬と異なり、東部に進むに従つて高壓を呈す。秋期に移れば、七百六十二耗にして、其の配置は春期と相似たり。一年を通じて其の示度の最も高きは十一月にあり、爾後漸次遞減して、十二月一月の交稍低度を示し、二月に至て再び高まり。其の後急に遞減して、六七月頃最低に達し、九月に至て急昇を始むるを以て、年内二回の高低を顯はすと常とするもの、如し。

本邦近海に於て、低氣壓の襲來する最も頻繁なるは、夏秋の交にして、其の最も普通なる颶風は、フィリピン群島に發生し、其の進路拋物線を書きて、本邦に逼るを常とすと雖も、此の他往々東經百四十度以東の洋上に發生するものありて、小笠原島附近より、北方の進路を取り、突然本州の南岸に上陸し、非常の暴風雨を齎らし、狂猛を逞しうすることあり。去る明治三十五年

九月二十八日、本地方を荒らしたるもの、如きは、此の適例にして、其の進路に當れる所、渺茫たる大洋、島嶼なきに非ざるも、未だ測候所の設置なく、且つ全く通信の便を缺けるを以て、此の種の低氣壓の襲來は豫知すること頗る難しと云ふ。低氣壓中心部位の本地方を通過する時の平均進行速度は、一時間凡そ二百四十軒なりとす。又相豆の海岸は暴風の侵來と同時に、満潮に際會するときは、波浪の漲溢を來すこと著るしく、劇波怒濤沿岸を洗ひ、恰も地震に原山せる海嘯と同一の光景を呈することあり。此の適例も亦前述三十五年九月二十八日、小田原附近に起こり、悲惨を極めたるは、今尙ほ人の記憶に存する所とす。次に氣壓の表を掲ぐ。

平均氣壓表

地名	月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
横濱	七六三、五	七六二、三	七六二、三	七六二、三	七六二、三	七五九、四	七五八、〇	七五八、〇	七六〇、四	七六二、七	七六二、七	七六二、九	七六三、八	七六三、〇
横須賀	七六二、三	七六二、三	七六二、三	七六二、三	七六二、三	七五九、四	七五八、〇	七五八、〇	七六〇、四	七六二、七	七六二、七	七六二、九	七六三、八	七六三、〇

(注意) 氣壓は^{ミレトール}を以て示し、海面及び重力の更正を施せり。

風向 風力

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
東京	七六二、三	七六二、六	七六二、〇	七六一、七	七五九、一	七五七、四	七五七、四	七五八、〇	七五九、九	七六二、六	七六二、〇	七六二、一	七六〇、七
布良	七六一、二	七六一、一	七六一、一	七六一、八	七五八、二	七五七、七	七五七、二	七五八、六	七五九、七	七六二、三	七六二、二	七六一、八	七六〇、三
銚子	七六一、八	七六一、〇	七六一、二	七六一、五	九五九、二	七五七、四	七五七、三	七五八、〇	七五九、八	七六二、三	七六二、二	七六一、三	七六〇、六
水戸	七六三、四	七六一、二	七六一、八	七六一、三	七五八、四	七五七、六	七五七、六	七五八、五	七六〇、二	七六二、七	七六二、八	七六一、六	七六一、〇
熊谷	七六三、七	七六一、五	七六一、九	七六一、二	七五八、二	七五七、五	七五七、四	七五八、三	七六〇、三	七六二、九	七六四、一	七六三、〇	七六一、〇
前橋	七六三、八	七六一、六	七六一、〇	七六一、二	七五八、三	七五七、五	七五七、四	七五八、三	七六〇、三	七六二、九	七六四、二	七六三、一	七六一、〇
足尾	七六三、〇	七六一、四	七六一、三	七六一、〇	七六〇、〇	七五九、六	七五九、七	七六〇、七	七六二、〇	七六三、八	七六四、五	七六三、八	七六一、九
宇都宮	七六一、八	七六一、三	七六一、四	七六一、八	七五九、一	七五七、七	七五七、七	七五八、〇	七六〇、一	七六二、七	七六三、五	七六二、五	七六一、七

最高 東京 七七八、四 廿七年三月十四日

最低 東京 七三〇、一 十三年十月四日

●風向及び●風力 ●氣壓の配布前陳するが如きを以て、其の風向も季節に依て甚だ異なり、冬期は北若しくは北西の風吹き、春秋の二期は、稍、東に偏し、夏期に移れば、風位全く轉じて、南の風卓越して吹く。之れを一年に通ずれば、沿海地方は、北風最多を占め、内陸に入るに従て、北西風の卓越するを見る。又平原地方は、四方開闊、山岳の風力を阻碍するなきを以て、風

は自由に其の威を振り、砂塵を天に漲らし、所謂紅塵萬丈の都會を現出せしめ、雨脚を斜めに瀉いて、行人の袂を沾ふはしむ。殊に本地方は、冬期彼の嵐と稱する寒風吹き荒むこと多く、所に依り、筑波嵐赤城嵐等の名あり。筑波嵐は、山頂にて冷却されたる空氣の、氣壓低き沿海地方に向て吹き下ろす所の所謂ボラ風にして。又赤城嵐はフーン風の性質を帯び、其の温度比較的高しと雖も、風力強きと、乾燥甚だしきとに由りて、蒸發を促がすこと多し。概して風力は、春期に強く、冬期これに次ぎ、夏秋の交は、暴風時期なるにも拘はらず、平均すれば却て弱く、又内陸よりも、沿海地方に著るしく強きは、本邦各地と其の揆を一にし、安房布良の如き岬角地方は、風力最も強く、横濱銚子横須賀前橋等之れに次ぎ、下野地方の如きは頗る弱くして、宇都宮足尾等の平均風速度は、銚子横濱の半ばにも及ばずとす。左に風向及び風速度の表を載す。

(注意) 風向観測回数は百分率に依りて算し、風速度は一秒間米を以て示す。

風向観測回数表

地名	方位	平均風速度表												
		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	
横須賀	北	三〇	二二	四	五	八	二	一	三	九	三	三	三	三
横濱	東北	七	五	九	四	五	六	二	三	九	三	三	三	三
東京	東	三	八	六	三	七	七	五	四	二	一	三	九	三
布良	東南	五	〇	八	三	三	七	四	二	一	三	九	三	三
銚子	東南	五	〇	八	三	三	七	四	二	一	三	九	三	三
銚子	西南	九	八	六	三	七	七	五	四	二	一	三	九	三
銚子	西	八	八	六	三	七	七	五	四	二	一	三	九	三
銚子	西北	八	八	六	三	七	七	五	四	二	一	三	九	三
銚子	静	七	七	五	四	二	一	三	九	三	三	三	三	三
銚子	静	七	七	五	四	二	一	三	九	三	三	三	三	三
宇都宮	北	八	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
足尾	東北	一〇	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
前橋	東	二	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
熊谷	東南	九	二	一	四	六	七	八	三	三	三	三	三	三
水戸	東南	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
水戸	西南	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
水戸	西	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
水戸	西北	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
水戸	静	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
水戸	静	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

地名	方位	平均風速度表												
		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	
横須賀	北	三九	四三	四三	四〇	四一	三八	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九
横濱	東北	五三	五九	五九	五七	五六	四九	五三	五七	五四	四九	五四	五四	五四
東京	東	三三	三六	三六	三三	三三	三四	三四	三三	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
布良	東南	八一	八一	九〇	七七	八〇	七〇	七三	七二	七四	七六	九二	七七	七〇
銚子	東南	五三	五九	五九	五七	五六	四九	五三	五七	五四	四九	五四	五四	五四
銚子	西南	三〇	三五	三五	三三	三三	三四	三四	三三	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
銚子	西	三〇	三五	三五	三三	三三	三四	三四	三三	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
銚子	西北	三〇	三五	三五	三三	三三	三四	三四	三三	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
銚子	静	三〇	三五	三五	三三	三三	三四	三四	三三	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
銚子	静	三〇	三五	三五	三三	三三	三四	三四	三三	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
宇都宮	北	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
宇都宮	東北	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
宇都宮	東	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
宇都宮	東南	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
宇都宮	西南	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
宇都宮	西	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
宇都宮	西北	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
宇都宮	静	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
宇都宮	静	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九

雨雪

熊谷	前橋	足尾	宇都宮
四、六	六、五	二、九	一、六
四、九	六、八	三、三	二、九
五、〇	七、四	三、三	二、一
四、一	五、九	三、一	二、一
三、四	五、三	一、八	三、〇
二、八	三、八	三、四	一、八
二、五	三、三	一、八	一、六
二、三	三、二	一、七	一、六
二、四	三、七	一、九	一、六
二、七	四、八	一、九	一、五
三、二	五、六	一、九	一、三
四、〇	六、二	二、七	一、七
三、五	五、二	三、〇	一、七
四、五、三	四、三、七	二、七、〇	三、三、二
九月二十三日	九月二十三日	九月二十三日	九月二十三日
九月二十八日	九月二十八日	九月二十八日	九月二十八日
九月三十日	九月三十日	九月三十日	九月三十日

雨雪 降水量も、又沿岸地方に夥多にして、内陸に入るに従て尠なし。之れを一年に通ずれば、概して夏期に多く、秋春之れに次ぎ、冬期に最も寡し。即ち十二月、一月の頃最も少量にして、暖期に移るに及び、漸く其の量を増し、六月の梅雨期に至る。其の最も多量なるは、九月にありて、年内多寡の差稍著るしきものあり。殊に冬期に在ては、晴朗の天氣永續すると多く、寒風颯々稍を鳴らせども、碧空一點の浮雲を見ざるの日多きは、表日本殊に關東地方の特性なりとす。是れ大陸の氣流、日本海を一掃し、對馬暖流の濕氣を齎らして來り、本州中央に連亘せる峻嶺巔峰に衝突し、其の含有せる水蒸氣を悉く此の處に遊離して乾燥し、所謂雨無風となりて南下するを以てなり。されば本地方は此の原因に伴ふ特殊の現象尠ならず。就中彼の赤城原

の如きは、些の濕氣をも含有するなく、其の吹き荒むや、風下に當れる地方の乾燥を來すと甚だしく、其の區域武藏深谷附近に及び、平原一帶の地、降水を見ざること往々月餘に亘るとあり。冬期信越地方を發して、上京する旅客、中央分水嶺を越ゆるに當り、背後に密雲の疊々たるを見、前面に碧空の霽々たるを望みて、其の表裏天氣の隔絶せるに驚かざるはなしといふ。故に平原地方は、互寒膚を劈くの候と雖も、降雪頗る稀れにして、其の多き年も、四五回を出づることなく。積雪の深さも、僅かに四五寸に止まるを常とす。然れども、暖期に移るや、全く冬期の状態に反し、南風常に水蒸氣を齎らし、降雨の頻繁なる、敢て他地方に譲らず。梅雨季節の如きは、其の雨量西南地方の如く多からずと雖も、霖雨蕭條連日に亘り、時に河水の漲溢を來すことあり。又夏期に際し、秩父甘樂碓氷榛名等、平野の盡頭山岳に達する地方は、正午より午後に移りて、漸次積雲の絮狀をなして集積するを見、蒸熱堪え難きの時、積雲は見る々々積亂雲に變じ、驟雨沛然として降り、爽快を覺えしむると、日々時を定めて至る。是れ南風關東の平野を一掃して北上し、連峰

雨雪日数

霜

の爲めに遮ぎられ、其の齎らせる水分を此處に凝結して、俄かに雨滴となるに由る。斯く雷雨の發現を見ることは、本地方至る所尠ならずとす。

本地方に於ける雨雪の平均日数は、一年間概ね百三十日乃至百六十日まで間にあり。即ち一年の三分の一以上は、多少降雨雪ある日と見做すを得べく、其の歩みは、降水量とは多少の差違あり。

霜 霜は北部に多く、南部に移るに従て薄らぐを見る。其の季節は、各地頗る區々に涉ると雖も、概ね十一月中旬頃初霜を見。平地は三月、山地は四月に至りて終霜を告ぐ。前陳するが如く、房總の沿岸は、冬期と雖も寒氣甚だしからざるを以て、其の極南部に方れる安房布良地方の、終歲結霜を見ることなきが如きは、我版圖内琉球と臺灣とを除くの外、他に多く比儔を見ざる顯著の現象なりとす。又春期高氣壓擴充するときは、晩霜の處あるを以て、中央氣象臺及び各測候所は、殊に此期を警戒し、降霜豫報を發して、桑田茶園の霜害を防ぐに備ふ。

爰に雨雪に關する表及び霜雪季節を記載す。

(注意) 雨雪量は耗を以て測り、平均總量を擧ぐ、又一日中の總量一耗の十分の一に満たざるものは、雨雪日數に算入せず。

降水量表

地名	月次												一年(總量)	一日中最多	同上日	
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月				
横須賀	七五九	九二四	一三三〇	一六一六	一五五〇	一五三三	一八八九	一三九五	一七四七	一八七三	一四一八	一六八七	一八一六	三〇九〇	二一八	七月廿八日
横濱	八七二	一六四八	一八三三	一四〇七	一六四二	一五三四	一〇五八	一三〇七	一五四三	一〇三三	六八〇	一六五〇	一五八五	一五八五	三十一	六月五日
東京	五四四	七七一	一〇九七	一八二五	一六五二	一七三三	一七二〇	一七〇六	一七九七	一〇四五	一四一四	一四七〇	一六三三	一六三三	十一	九月廿一日
布良	九七三	一三二五	一八三三	一五二五	一六二二	一四七四	一七二五	一八一六	一七七三	一三〇七	一九五九	一六九九	一五九〇	一五九〇	三十一	六月廿一日
銚子	八四八	九〇六	一四一三	一六七五	一八一三	一三三三	七四五	一八五〇	一三二四	一四六二	一六七〇	一五六〇	一五九〇	一五九〇	三十	九月廿一日
水戸	六五四	六五六	一〇七六	一七〇七	一四八〇	一四九四	一四一八	一六三三	一五八四	一三〇五	一五八二	一五三三	一四四六	一四四六	三十	七月廿一日
熊谷	四四九	四九九	五四六	一〇六三	九八八	一四八八	一四八六	一三五一	一三五七	一三五七	七八六	一四〇一	一三五九	一三五九	三十	十月廿一日
前橋	三四九	三五二	三七六	八二四	九〇一	一六三九	一五四四	一〇一三	一四三六	一四三六	六八〇	一四二四	一四二七	一四二七	三十	九月廿一日
足尾	五〇八	四七二	九七七	一〇二二	一七六六	一四五六	一六三三	一三三三	一五三三	一五三三	七五九	一四九三	一四九三	一四九三	三十	八月廿一日
宇都宮	三七〇	五九六	九四七	一三三三	一三六六	一八七三	一三〇三	一四三三	一三五八	一三五八	九三五	一四六〇	一四六〇	一四六〇	三十	八月十七日

雨雪の平均日数

地名	月次											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
横須賀	七九	七四	一三三	一四一	一三三	一三一	一三〇	九五	一四六	一三六	一〇三	六六
横濱	一三〇	八七	一三五	一五七	一三三	一四二	一二五	一〇〇	一八〇	一〇三	一〇〇	七五
東京	七〇	九三	一三四	一四八	一三六	一四六	一四一	一二六	一六〇	一三三	一〇〇	六五
布良	一三〇	一一三	一八〇	一六〇	一三七	一一〇	一三〇	一六七	一六七	一一三	一三七	一三〇
銚子	九八	一〇七	一五、一	一四八	一三一	一三三	一一九	八、八	一四三	一一六	一一三	九
水戸	九三	八三	一四五	一四七	一三三	一五〇	一三七	一三五	一七、七	一一五	一一〇	八〇
熊谷	六二	六七	一〇三	一四〇	一一五	一五七	一六七	一四五	一七、二	八七	七五	六五
前橋	七二	六二	一〇〇	一四二	一三五	一六〇	一九三	一八五	一九、七	九〇	七七	四五
足尾	一一、五	九五	一〇五	一五五	一四五	一四五	一六五	一九五	一九〇	七五	九五	九五
宇都宮	六二	七六	一一八	一三九	一四五	一六二	一九、二	一七七	一六六	一三八	九四	五四

霜雪の季節

地名	雪						霜					
	初	均	最	早	平	終	初	均	最	早	平	終
横須賀	一月一日	二月十五	三月十七	三月十七	三月十七	三月十七	十一月二十	十一月二十	十一月二十	十一月二十	十一月二十	十一月二十
横濱	十二月二十二	二月十二	三月十七	三月十七	三月十七	三月十七	十一月二十九	十一月二十九	十一月二十九	十一月二十九	十一月二十九	十一月二十九
東京	十二月二十一	二月十一	三月十四	三月十四	三月十四	三月十四	十一月十九	十一月十九	十一月十九	十一月十九	十一月十九	十一月十九
布良	十二月二十五	二月十五	三月九	三月九	三月九	三月九	十一月二十二	十一月二十二	十一月二十二	十一月二十二	十一月二十二	十一月二十二
銚子	一月七日	二月十七	三月七	三月七	三月七	三月七	十一月二十二	十一月二十二	十一月二十二	十一月二十二	十一月二十二	十一月二十二
水戸	十二月二十五	二月二十五	三月二十一	三月二十一	三月二十一	三月二十一	十一月八	十一月八	十一月八	十一月八	十一月八	十一月八
熊谷	十二月九	二月九	三月十七	三月十七	三月十七	三月十七	十一月二	十一月二	十一月二	十一月二	十一月二	十一月二
前橋	十二月三	二月三	三月十八	三月十八	三月十八	三月十八	十一月十	十一月十	十一月十	十一月十	十一月十	十一月十
足尾	十一月三	二月三	三月十八	三月十八	三月十八	三月十八	十一月十	十一月十	十一月十	十一月十	十一月十	十一月十
宇都宮	十二月八	二月八	三月十九	三月十九	三月十九	三月十九	十一月十八	十一月十八	十一月十八	十一月十八	十一月十八	十一月十八

降霜なし

湿度

湿度

湿度は、他の地方と大差なきも、概して言へば、餘り大ならざる地方に属し、其の年平均は、七二より七八までの間にあり。季節に別つて見ると、冬期は小さくして、各地概ね七〇以下に降り、其の甚だしく乾燥するときは、一〇以下に至ることあり去る三十年二月十八日、熊谷に於て測りたる

五は實に本邦湿度の最少たり然れども、夏期に移れば稍大となり、八〇以上に達するを常とす。殊に銚子布良附近及び豆南諸島の如き、直接暖流に洗はるゝ地方は、濕氣強く、濃霧濛々海陸を覆ふこと屢々なりとす。左に湿度の表を擧ぐ。

(注意) 空氣の或溫度に於て含有し得る水蒸氣の絶對的分量を絶對湿度或は單に濕量と稱し、此の濕量と現在包含せる濕量との比を對比湿度或は單に湿度と稱す。

平均湿度表

地名	月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年	最小	同上月
横須賀		六六	六五	七二	七七	七九	八三	八六	八五	八四	七九	七五	七五	七七	一六	三月十日
横濱		六八	六六	七〇	七五	七四	八〇	八一	八〇	八二	七七	七五	七五	七五	二〇	三月九日
東京		六五	六五	六九	七六	七八	八三	八三	八三	八三	八〇	七五	七五	七五	八	三月九日
布良		六四	六一	七〇	七九	八二	八八	九〇	九〇	八四	七八	七五	七五	七二	三	三月十一日
銚子		六七	六六	七三	七九	八三	八六	九〇	八七	八四	七八	七五	七五	六九	二	三月十五日

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年	最小	同上月
水戸	六九	六八	七二	七七	七八	八三	八七	八六	八七	八三	八一	七三	七五	二七	三月五日
熊谷	六七	六四	六三	七三	七五	七九	八三	八四	八六	八〇	七六	六八	七五	五	三月十八日
前橋	六五	六三	六〇	六九	七三	七九	八三	八四	八五	八〇	七二	六四	七三	三	三月十日
足尾	六〇	六三	五八	七〇	六八	七八	八四	八一	八三	七六	七〇	六三	七二	八	三月十二日
宇都宮	七二	六九	七〇	七四	七六	八〇	八四	八五	八四	八〇	七八	七三	七五	七	三月十七日

豆南諸島

伊豆七島及び小笠原島

豆南諸島は、單に其の位置より見るときは、四

國九州と同緯度に在りと雖も、本邦の同緯線皆北東に向つて彎曲せるを以て、其の氣候夙かに溫暖、薩南諸島に髣髴たり。其の年平均溫度は、凡そ十六七度に及び、冬期と雖も、最低溫度の五度以下に降ること、甚だ稀れなりとす。風力は殊に強く、雨量の夥多なる、本邦多く其の比を見ざる所なれども、土壤疎鬆なるを以て、貯水に不便を告ぐ。又小笠原群島は、北緯二十六七度の間に基布し、亞熱帯に屬するを以て、判然たる四季の區別なく、氣候炎熱、生物亦大に本土と異なるを見る。されば夏期の如き、頗る暑熱を感ずるも、島嶼の常として、海風強く、夜間に至り、涼風一過よく炎暑を和らぐ。雪の

小笠原島

如きは、終歲之れを見ることなし。雨量等精密に觀測せられたるものなきも、驟雨は多きが如し。而して年平均温度は、概ね二十二三度にして。最低温度の十度以下に降ること、甚だ多からずとす。

關東氣象の概況以上説く所の如し。要するに本地方は、自然の形勢に依り、其の風土大陸的感化を受くる少なくして、海洋的の支配を受け、爲めによく寒暖風雨を調節せられ、實に溫和適順の樂土たりといふを憚からず。

第二編 人文

第一章 沿革

一 先史時代

先史時代日本の住民

吾人の祖先、大和民族か西方より起りて、漸次日本全土に蔓延せし以前、此の土地に居住したる民族は之れ考古學者か稱してコロボツクルと云ふ石器時代の民族にして、日本の全土(臺灣琉球を除く)に其の遺跡を存し、特に關東地方に於て多しとす。次て之れに代れる民族は今日北海道に僅に餘命を保てるアイヌ人の祖先なれども、史上に蝦夷と稱するものは、アイヌのみなりしか、果たコロボツクル或は他種族の分子をも含みたるかは明瞭ならず。アイヌを逐ふて之れに代はれる者は吾人の祖先にして、考古學者の所謂古墳は此の民族が或る時期の間に殘したる遺跡にして、考古學者は此の時期を呼んで佩玉時代と稱す、而して此れは寧ろ有史時代に屬すと雖も今便宜の爲め石器時代と併せて

石器時代

茲に畧説せん。

石器時代 石器時代人民とは、未だ金属の用法を知らず、石属の類を以て諸種の利器を製造し、日常之れを使用せしによりて起れる名稱なり。石器使用の時代は多くの民族が、其の發達上必ず経過すべき時期にして、文明の程度甚だ低きものなり、今日野蠻の民族にして未だ此の時期を脱せざるもの少からず。

海岸に遠き地方の畑の中、又は丘陵等より多くの貝殻を出すことあり。層々相重るあり、單に集りて塊状をなすものあり。これ等の貝殻と混して石にて作れる斧矢の根、又は素焼の土器其の破片獸骨魚骨木炭等の出つるとあり。是れ等は實に自然の堆積にあらずして石器時代人類が其の食物の殘餘たる獸骨貝殻等を棄たる掃溜なれば即がて人類住居の跡たることを知るべし。吾人は此かる遺跡を呼んで貝塚或は介塚と稱す。此れより出づる貝殻は今日其の地方に産するものと、多少其の種類を異にす。貝塚の面積は種々あり。僅に二三坪に過ぎざるものあり、又數町に渉るものあり。其の厚さにも種々あり、

貝塚或は介塚

貝塚分布の地形

僅に地面に散亂するに過ぎざるものあり、或は三間以上の厚さを有するものあり。下總東葛飾郡會谷村の貝塚の如きは其の層甚だ厚し。貝塚の廣狹厚薄は、其の地に住したる人の多少と、棲息の年月の長短に關して差異を生ずるものなるべし。

貝塚の存在する地層は大略一定せり。東京にて云へば上野公園又は本郷臺の如き洪積層の臺地と低地なる沖積層との境界の地に最も多く存す。貝塚は又必ずしも臺地に限らず低地にも亦存在することあり。東京道灌山の麓、中里村の貝塚の如き其の一なり。然れとも之れ甚だ稀なる例なりとす。此の如く高臺と低地との境界に、其の遺跡を發見するは大に理由あることにして、今日の低地は當時概ね海にして、臺地は陸地なれば人は此に住居して、海に漁り魚介を取りて生活したる故なるべし。

或地方に於ては少しも介殻を見ずして、他の貝塚に於て發見するものと同性質の土器石器のみを單獨に見出すことあり。その土中深く存在せるものはその地を遺物包含地と名づけ、比較的地面に近く存在せるものは土器塚と

遺物包含地及び土器塚

遺跡の地名

いふ。遺物包含地と土器塚とは關東に於て殊に發見せらるゝこと多し。即ち前者の例は武藏北足立郡大宮氷川神社境内及び甲武線國分寺驛附近等に見るべく、土器塚の例は東京府下目黒村駒場等に於て見らるべし。

遺跡分布地は地形のみに限らず、地名に因ても多少これを知ることを得べし。貝塚・貝殻畑・貝殻塚・貝殻坂等の名稱を有する地は、貝塚の存在するを示し、カハラケ塚の名ある處よりは土器を發見す。石神又は、シヤクジン等の地名は、石棒を神として祭れるより起りしものにして、其の近傍には遺跡を發見すること度々あり。今關東地方に於ける二三の例を擧げん。

下野下部賀那村飯田字瓦畑。 (土器、石斧)
 全 河内郡國本村大字野澤字石塚。 (石鏡、石斧、石錐、石匕、土偶土器等)
 常陸稻敷郡高田村權塚。 (貝塚)
 全 行方郡津知村字貝塚。 (貝塚)
 下總東葛飾郡國分村大字曾谷字イゴ塚。 (貝塚)
 全 千葉郡檜橋村字貝殻畑。 (貝塚)
 上總長生郡石神村。 (貝塚)

武藏北豐島郡下石神井村。 (土器、石斧、石棒)
 全 南多摩郡新井村石大明神祠。 (石棒)
 全 北足立郡安行村字猿貝。 (貝塚)
 全 大門村字貝殻坂。 (貝塚)
 全 全 白幡村字貝殻塚。 (貝塚)
 全 秩父郡日野村神ノ神。 (石棒)
 全 都築郡折本村字貝殻塚。 (貝塚)
 全 荏原郡上目黒村土器塚。 (貝塚)

各地に通し最も多きは貝塚なる地名なり。

關東諸國の遺跡

これ等の遺跡は殆ど日本全國に亘りて存在す。東京帝國大學理科大學人類學教室の調査に因るに、明治三十三年十二月までに發見せられたる全國遺跡の總數三千四百六十六ヶ所にして、その中關東八國に於て一千二百十六ヶ所を占む。實に全國總數の三分一強に當る。蓋し關東の地たる中央學府たる東京に接近せるを以て、便宜上割合に多く發見せられしものなるべしと雖も、またその實數の多きを知るべし。更に詳に諸國に就て之れを見れば次の如し。

上野國 二十ヶ所 下野國 八十六ヶ所 常陸國 百十五ヶ所
 下總國 百六十六ヶ所 上總國 十一ヶ所 安房國 十一ヶ所
 武藏國 六百八十三ヶ所相模國 八十九ヶ所

以上諸國の中相模に於ては三浦半島及び大住郡地方最も多く、武藏に於ては各地概ねこれありと雖も、橋樹郡比企郡大里郡及び南西南多摩郡の地方殊に著しく多し。常總の地にありては霞ヶ浦の周圍諸地方及び江戸川利根川鬼怒川蓋養川地方最も遺蹟に富む。是れいふまでもなく平野沃土最もその居住に適せるものありしが爲めならん。

關東に於て有名なる貝塚

遺物

風俗

關東各地方遺墟の中に於て、特に學術の研究に資して名高きものは常陸稻敷郡椎塚の貝塚東京西ヶ原の貝塚等の類なり。又武藏荏原郡大森の貝塚は今は微に其跡を止むに過ぎず雖も、明治十年の頃アメリカ人モールズ氏が初めて發見して之れを研究し、その中に人骨の斷片ありしより、我が石器時代に食人の風ありと論定し、その報告を海外に發表したるものにして、また我が邦人類學發達史の上に於て記憶すべきものの一なりとす。

是れ等の遺蹟よりは吾人は一體にその遺物として、石器に於ては石鏃石斧(打製)石棒石槍石匙等、土器に於ては土偶土版瓶壺諸種の容器、その他に於ては骨器角器牙器等を發見すべし。而して是れ等に因りて又現今の石器時代人民の風に鑑みて、吾人は畧々我が邦石器時代人民の風俗を推知し得べし。今多少の繁縟ありと雖も之を左に略説すべし。

彼れ等の風俗は彼れ等自ら作りて遺せし土偶、及び器具によりて畧々想像するを得べし。其の重なる點を擧ぐれば頭髮は男女によりて異り、男子は頭上に束ね、女子は頭上に渦卷を作り、或は頭上に五つの小髷を載せ、或は髮



を左右に等分して、全體をへの字形にしたるもの如し。アイヌの口碑に、コロボツクルの男子は裸躰なりしことを傳ふれとも、彼れ等に衣服ありしことは事實にして、其の品質は今日アイヌが用ゆる、アツシに類し、男女によりて異れとも、上衣たる寛かなる筒袖と、下裳たる股引の如き者との二つに分れたるに似たり。男子は重ものに遮光器を用ひ、女子は覆面を用ひたるが如し。又足には靴様の者を穿ち、頸には裝飾として玉類を掛け、耳飾及び口飾等もありしもの、如く、顔面及び手甲には入墨

住居

をなし、又顔面に彩色をなし裝飾とせるものあり。

彼れ等の住居は重もに堅穴なりし者の如く、往古は其の遺跡内地にもありしならんも、今日にては多く破壊煙滅して尋ねるによしなし。其の居住年代の比較的新しき北海道にありては、今猶存在するもの多し。其の大なるものは徑七八間、小なるものも三四間位あり。形は通常圓形若しくは方形なれども、稀に三日月形のものあり。穴の上には木枝を集めて屋根とし、欸冬の葉の類を以て之れを蔽ひたりと云ふ。

人種

石器時代人民は如何なる種族に屬すべきものなるかに就ては種々の説あり。之れを別つて、(一)日本人の祖先、(二)アイヌの祖先、(三)日本人若しくはアイヌの祖先にあらずとの三説と爲すべし。而して第三の非アイヌ説、即ち日本人アイヌ以外の人種なりとの説は、一般に勢力あるものなり。而して此れ等の人民は一種族なりしか、又た數種族なりしか、之れ今日に於て容易に知る能はずと雖も、北海道と本州の大部分に接息せしものは、種々の點に於て遺物の一致する所より見れば一種族たりしを知る。其の盛に本土に繁殖せし時代

人種移轉の方向

は、大凡今を距る三千年以前なりとは、多くの學者の唱ふる所なり。蓋し其の遺蹟なる貝塚が、現今の海岸線を遠く離れたる所に存在するもの多きこと、又其の遺物を被覆する土壤の可なりに厚きものあるとの事實、及び我國の歴史には、石器時代人民に關しては少しも之れを傳へず、又何等の口碑も、我國人の間に遺り居らざる點よりして之れを考ふれば、以上の推測も中らずと雖も遠からざるへし。

石器時代人民は、元來何れの地方より本土に侵入せしかは、之れを明言するに甚た困難なりと雖も、其の遺蹟の北海道にて比較的新しく、本土に於て甚た古きの觀ある事實よりして之れを考ふれば、彼れ等は最近の移轉に於て、南方より北方へ來りしことは疑なき者の如し。加之アイヌの口碑傳説によれば、一層此の説を確むるものあるが如し。アイヌが北海道に移りし時は、彼れ等と接觸せし事明にして、其の關係は恰も吾人の祖先かアイヌと接觸せしか如きものありしならん。其のコロボツルなる名稱も、アイヌが嘲弄的に命名せし所にして、落の葉の下の人の義なりといふ。蓋し其の家屋は欸冬の葉

を以て蔽ひしによるなり。他にトイチセクル(土の家の人の義)、トイチクル(土を焼く人の義)、チセコツチャクカモイ(お隣の人の義)等の稱々の名あれども、今は音調の唱へ易きに從ひ普通コロボツクルを以て之れを呼ぶ。初め彼等はアイヌと共に親密に交際せしも、やがて去りて北方に移れりとの口碑あり。

コロボツクルは北方に移りて如何なる運命に遭遇せしか、是れ亦容易に断定すへからざる問題なり。坪井理學博士は千島群島の東北より、北アメリカのアラスカに連れるアレウト列島、及び北アメリカの北端グリーンランドに現住し、自ら呼んでインヌートと稱するエスキモー種族を以て或はそれなるべしといへり。實に此の種族は「コロボツクル」と其の風俗等或點に於て類似するも、又た相違の點も少からず。容易に斷言すべからず。またコロボツクルとアイヌとは同一種族にして、アイヌはコロボツクルの苗裔なりとの説有力なる學者間に唱へらるるあり。今暫く疑を存す。

佩玉時代 古墳と云へは、其の範圍空漠として判然せされど、茲に説かんとするは内部より曲玉管玉切子玉等の出づる古墳を云ひ、其の年代は太古

コロボツクルの運命

佩玉時代

より奈良朝時代の以前に及び、今を距ること大概二千年前後のものを稱す。此の時代を假りに坪井理學博士の命名に從て佩玉時代と名け、其の以後の古墳と區別すべし。古墳より發見せらるる遺物によりて、史籍にて知る能はざる種々の事實を究むるを得るなり、然れども此れ等は凡て石器時代のものと異りて吾人祖先に關する事實なれば、人種上の事等に就ては暫く之れを云はず、たゞ風俗の今日のそれと、大に其の趣きを異にするものに就て、少しく之れを述ふへし。

佩玉時代に行はれたる古墳は、其の時代によりて多少の變化あれども、埋葬の位置によりて、(一)平地の下に葬るもの、(二)平地に葬るもの、(三)土を盛りて其の上に葬るもの、(四)丘陵の中腹に横穴を作りて葬るものとの四種に區別せらる。凡そ古今に通し萬國に亘り、民族の葬風に四つの方法あり。火葬風葬水葬土葬之れなり。而して佩玉時代のものは、土葬と風葬との中間物なりしが如し。遺骸に種々の副葬品を添えて葬り、其の上に土を盛る、其の形状圓形なるあり、橢圓形なるあり、瓢形なるあり、瓢形のものの中、前方後圓

古墳の種類

葬風
古墳の形状、
大小

のものを二子塚と稱し、銚子形をなすものを銚子塚と稱せり。其の大きさにも種々あり。直徑三四間位のものあり、又は幾十間に亘るものあり。芝公園丸山古墳は其の形多少變化せりと雖も、前方後圓の古墳にして、其の南北の長さ六十間に及ぶ。

一 跡に古墳の周圍には濠渠を周らし、又は堤を設くるものあり。古墳の大小は埋葬者の地位の尊卑によりて異り、其の建築に使用したる人夫の多少によりて大小を云ふ事あり。地方に現存する名稱たる千人塚仙人塚と云ふ如きも、千人の死骸を葬りたるにあらず、其の使役したる人夫の數を云ふなり。朝日さし夕日輝く木の下にうるし千杯朱千杯なる傳説に遺れる古謠は、人夫の歌ひしものなるべく、古墳の結構の宏壯偉觀を稱したるなり。又た建築材料によりて、(一)土のみにて作れるもの、(二)積石にて作れるもの、(三)土石混用のものとの三種を區別す。積石にて作れるものは歐洲にてケイルンと稱す。本邦には其の例少きも伊豆相模にて發見せらる。相模中郡比々多村には其の數三十七の多きに達せり。

古墳と地名との關係

地方によりて古墳所在地を呼ぶに、各特別の名を以てすることあり。二子塚平塚丸山百塚等の如し。之れを分類するに、(一)何塚と云ひて特別の塚の名を示す地名あり、(二)丸山築山と云ひて單に塚の意味を表する地名あり、(三)室洞と云ひて石砌に由つて名くる所あり、(四)百塚千塚と云ひて數に基きたる地名あり、(五)何塚山何塚越何塚原とて、塚の存在を表したる名を有する所あり。今二三の實例を擧げん。

武蔵橋樁郡高津村大字二子

(瓢形の塚より出づる名ならん)

全 荏原郡平塚村

(古墳あり)

全 比企郡大塚岡村大字大谷金塚(鏡發見さる)

下野河内郡大谷村大字大塚

全 安蘇郡犬伏大字鏡塚

武蔵東京市芝公園丸山

全 橋樁郡生田村飯室山

武蔵北埼玉郡埼玉村字百塚

全 入間郡本島村字千塚

相模愛甲郡金田八幡七ツ塚

武蔵大里郡大字曾山

下野下都賀郡箱森村字市若山

下總香取郡谷中村字越塚

(金環發見さる)

就中第一第二に屬するもの最も多きか如し。之れを以て古墳所在地の總てを律すへからすと雖も、又た地名と古墳との關係を知るに足るへし。

古墳内部及び
附近の發見物

古墳の内部及び其の附近よりは、概ね祭器等に用ひたる祝部イハヒと稱する土器及び内部に波紋あり且つ轆轤にて製したる痕跡ある朝鮮土器と稱するものを出す。祝部は古墳の内部外部より共に出つれとも、朝鮮土器は外部に限れり又赤褐色の土器にて埴輪と稱するものあり。埴輪には圓筒最も多きも、又武裝せる男子、垂髮結髮の女子の人形或は馬水鳥雞等の形、或は器具を模造せるものも尠なからず。是れ等は要するに古墳の周圍に建て、籬として土留めの用をなしたると全時に、また傍ら祭器に用ひたる者ならんと想像せらる。其の他古墳の内外より出つる素焼土器あり、口邊狭く腹部大なる壺形のものあり、之れ貯藏品を容れたるならん。茶椀形のものあり、皿形のものあり。之れ上代葉盤ハエと稱するものならん。鉢形釜形のものあり。之れ日常使用の器具ならん。

古墳内部の發
見物

古墳の土を除きて其の内部を檢すれば先づ石槨あり。其の内部には又多くば石棺を存す。石棺の内には遺骸を安置す。遺骸は一躰なることあり、又數躰なることあり、其の數躰なるは殉死者を合葬したるものならん。史に殉死

佩玉時代の風
俗

者は生きなから葬り、泣啼の聲晝夜絶えずと傳ふれとも、其の遺骸の整然亂れずして存在せるを見れば、蓋し殺して後合葬したるを知るべし。遺骸と共に副葬品あり、即ち曲玉管玉切子玉三輪玉瑠璃玉金環銀環及び兩刃の刀寶珠鏢槍の類又た枕下駄小刀等の石製模造品等なり。今日南洋及びアフリカの蠻民は、獸類の爪牙と鳥類の爪牙と連結して裝飾とす。アイヌも嘗て熊の爪を用ひたりと云ふ。之れによりて考ふれば、吾人の祖先も始めは此れ等の實物を以て裝飾とし武勇を誇りしが、後ち實物を用ゆるの風行はれず。模造品を以て之れに易ゆるに至りしならんか。

古墳の内外に存する種々の建設物副葬品等によりて、此の時代の風俗を想像するを得るなり。即ち頭髮は男女によりて異なるも、幼年の時は男女共に垂髮にして長きを喜びしが如し。女子は其の境遇即ち(一)宮女と通常のものによりて、(二)年齢の相違によりて、(三)結婚の時等によりて異なるも、大概今日の島田鬻銀杏返しに類する形に結へり。八丈島にては現今老若共に島田鬻を用ふ。之れ或は古代の遺風ならんか。男子は成長の後は多く冠り物即ち頭巾

横穴

笠の類を用ひしが如し。又甲冑を着し、刀劔を帶するものあり。衣服は男女共に筒袖にして、上衣と下裳とに分れ、下裳は袴の如き者を用ひ、女子は男子よりもその裾長し、男女共に左衽なるは最も注意すべき點なり。裝飾としては曲玉管玉の如き、今日の副葬品として發見せらるゝ者を糸にて連ね、ある間隔を置きて配置し、之れを頸部に纏ひたり。下裳の下部を結ひて小鈴を付く、之れを足結アキヒの小鈴と云ふ。歩行の際劉朗の音を發したるならん。耳環腕環を用ひ、又紅色の染料にて目より頬の邊を赤くし、或は之れを以て頬に筋を畫くの風あり。然れとも以上墳墓に備へし土偶より想像せるものなれば寧ろ平素の風に非ずして、却て喪中の風を移せるものなるや知るべからず。涅齒入墨をなすの風は今日に傳はれる所なり。

比較的柔軟なる岩石より成る丘陵の腹面に、往々にして横に穿ちたる一種の穴あり。其の構造は地方により、又は各の穴によりて異れとも、大なるは十疊敷、小なるは二三疊敷位のものあり。天井は圓くして境界なしに四方の壁面に連続す。而してその壁面に斧鑿の痕あるより見て、これ等は鐵器時代

吉見の百穴

人民が、或る一定の目的の爲め穿ちたる事を知る。是れ等を考古學上に於て稱して横穴といふ、關東にありては武藏比企郡西吉見の所謂百穴なるものあり。前年坪井博士の發掘に係るものにして、我が邦に於て最も有名なるものなり。現に發掘せられたる穴の總數は二百三十七にして、丘腹全面に規則正しく排列す。遠く之れを望めは恰も西洋風大建築の窓の列するが如く見ゆべし。(第三十圖)發掘の際には是れ等の穴の附近より植輪を出し、またその内部よりは祝部及び金環銀環を出せるものもあり、或は稀には遺骸の安置せられたるものもありたり。而して是れ等の穴の果して何の用に供せられしものなるやに就ては、吾人は其葬穴の跡ならんと信ずるものなれど、或は穴居の跡なりと云ひ、坪井博士は専ら後説を取り、會穴中遺骸の存するは後世穴居の跡を葬穴に利用せしものなりとせり。

以上説く所、地方沿革の記事としては、寧ろ他の方面に亘りて詳しきに失し。考古學上の説明を爲せるが如き傾ありと難も、始めて佩玉時代の如何なるものなるやを記せんが爲めには、斯くの如き冗長の筆蓋又已むを得ざるなり。

關東地方古墳
分布の狀態

さて貝塚の分布に由りて、石器時代人民の播殖の地方を推知し得べきが如く、また古墳横穴の分布に由りて、佩玉時代人民の播殖地方をトし得べし。要するに我が大和民族は初め近畿を中心として、是れより漸次他の地方に及びしこと史上記する所なれども、この事また古墳分布の數の上よりも之れを證し得べし。五畿内地方に續ては、關東地方は古墳の分布甚だ多くして決して彼れに劣らず。即ち明治三十三年二月までに世に知られたる全國の古墳横穴の總數は二千六百七十六箇所にして、この中關東八國に屬するもの六百五十箇所に及ぶ。實に全國總數の四分の一強にして、その實數決して少きにあらざるなり。是れまた前に記したると同じく、關東の地が中央學府に接近せる地にして、發見の便宜多きが爲なるべしと雖も、元と沃壤膏腴の地、夙に人民の居住に適せるものありしは言を待たず。今更に之れを諸國の數に就て見れば左の如し、

相模	廿五箇處	武藏	三百〇七箇處	安房	十箇處
上總	十七箇處	下總	八十二箇處	常陸	八十一箇處

上野 六十六箇處 下野 六十二箇處

武藏國に於てその數頗る多きは蓋し最も發見に便なる爲めなりと雖も、また豊稔の沃土最も棲息に利あり、夙に民衆播殖の中心たりしものありしならん。殊に多摩川沿岸の地に多しとす。常總にありては霞浦附近利根川の流域等亦多く發見されたる所なり。

數多なる古墳の中、有名なるものは東京芝公園丸山及び下野足利の古墳にして、共に最初より學術的研究の目的を以て坪井博士の手に發掘せられたるものなり。我邦の人類學研究はこの兩古墳に負ふもの少しとせず。

二 太古より寧樂朝時代に至る

上古 關東の地沃野茫々數十里に連り、利根の大河及び他の諸川縦横に流れ灌漑の便あり。地味最も膏腴豊壤なり。されは近畿地方先着の大和民族は、夙に神代よりこの地方に移住せしもの尠からざりしなるべし。武甕雷命は健御名方神を逐ふて、高志越より科野(信濃)に入り、之れを破り進て常陸に駐

丸山古墳及び
足利古墳

武甕雷尊

東國殖民

り、此の地方の開拓者となりぬ。後人これを鹿島社に祭り中臣齊部の兩氏之れに奉仕す。此くの如き事情あれば大和民族は割合に疾くより東國の事情を熟知したりしならん。されは神武天皇の時に、天宮命が阿波の齊部を率ゐ、沃壤を求めんとして、東國に至りし如きも素より偶然の事にあらざるへし。齊部の土着して拓殖に従事し麻穀を播殖す。その好く麻の生する處を總國と名け、穀木の好く生する地を結城と稱す。阿波齊部の來りて居住せし所は之れを阿波と云ふ今の安房。歳月を追ふに従つて、東國漸く田野開かれ産物生し、人集まりて部落をなし、人口亦次第に増して殷富なる殖民地を形成したりしが如し。爾後六百餘年間は史上に見ゆる事實なし。之れ邊疆の民、王化に服せざる者ありて、東方殖民地と中央政府との聯絡絶ゆるに至りし故ならんか。崇神天皇十年、四道將軍を派遣せし時、大彥命は命を奉して北陸に、其の子武渟川別は東海に赴き、國情を視察し、化外の民を逐ひ、遠く北に入り相津に會して還る。次て皇子豐城入彦命下りて東國に治す。此の時關東の地は概ね王化に浴するに至りしも、北境の蝦夷勇悍にして、動もすれば境を踰え

四道將軍派遣

蝦夷侵略

て侵入せんとす。景行天皇武内宿禰をして東國北陸に往きその地の民情地理を視察せしむ、宿禰還り奏して曰く、東夷の中日高見國あり、其の人勇悍總て蝦夷と云ふ、土地沃壤にして廣濶なり伐て取るへしと。然れとも此の時已に西國の熊襲反して強暴を極め帝の親征となり、次て日本武尊の西征となり、復東方を顧るの暇なかりしなり。されは蝦夷益跋扈し、關東諸國に闖入し、或は足柄を踰ゆるものあり、良民を害し、穀産を掠むること多し。

日本武尊東征

已にして熊襲服し西國平くに及んで、日本武尊初めて東征す。即ち四十年を以て、帝斧鉞を尊に授け、吉備武彥大伴武日をして之れに隨はしむ。尊先の伊勢神宮を拜し、娥倭姫に辭し、叢雲劍を拜受し、熱田を経て駿河の燒津に至り、賊の野火に圍まれしも躍つて之れを破り、直に足柄を踰ゆ。更に進んで相摸三浦に入り、走水より淡水門を渡り、海路葦浦を経て更に玉浦に渡り、蝦夷の境に入りて竹水門に上陸し、日高見國に至る。こゝに尊の通過の地理を考ふるに、走水は三浦郡浦賀町の北走水の地なるべく。葦浦は今の常陸と下總との境界にある銚子口。玉の浦は現今の常陸行方郡の北浦湖に濱せる或

る地點。竹水門は常陸多賀郡の伊師高萩の邊。日高見國は何處なるや詳ならざれども、今の磐城東海岸より仙台地方に至る一帶の地方ならんとの説、尤も信するに足るものゝ如し。上古北浦湖の北部より切斷して外海と通し、鹿島郡南部の地は一の島をなしたるものと思はる。故に日本武尊は走水より東京灣口を横り、上總富津の邊に上陸し更に房總半島を廻り外海に航し、銚子口を過ぎ北浦湖の北の切口より此の湖に入り、行方郡の或る地點に舶り、更に亦東海に出て、多賀郡より上陸し北進せられしものならんか。尊應て夷民を服し途を廻らして常陸に入り、新治筑波の地を過ぎ、再び足柄を踏えて甲斐酒折宮に駐り、更に科野より三野(美濃)に出て西歸の途に薨す。或はこの時尊、科野越の國々を鎮撫せんとして、甲斐より轉して武藏に入り、上野を経て碓氷峠を踰ゆといふ説、史に明記あれども信し難ければ取らず。五十三年、天皇自ら尊の東征の跡を見んとして、東國を巡狩し上總に至り、暫く安房浮島宮に駐輦して還幸せらる。歸後豊城入彦命の孫、彦狹島王を以て東方十五國の都督に拜す。王未だ任に赴くに及ばずして薨す。因て其の子御諸別王を

景行帝東巡

彦狹島王東方十五國の都督となる

近畿東國の交通

遣し代りて東國に鎮せしむ。茲に於て一たび絶えたる中央政府と、東方殖民地との聯絡は再び開始せられて、關東の地長く王化に浴するに至れり。この後歲月を経るに従つて關東の殖民漸く繁盛となり中央部との聯絡の要あり。又加ふるに一面には屢、北方蝦夷の反するありたれば之れか征討の必要上、王者統治の地たる畿内地方と、東國との往復は愈々頻繁となり、從て交通の便は益、開かれたるものあるが如し。蓋古代草昧の世にありては陸路は山岳水流の交通を妨くるものあれば、多くは之れを避けて海上の航路を取り、紀州洋遠州洋の怒濤を蹶つて旅行したる者もあるべけれども、猶安全なる陸上の通路を取るもの尠からざりし如し。孝元帝五十七年、東海道を開くとの説あれとも確ならず。四道將軍派遣以後に至りては多數の軍隊の通行ありたれば、初めて道路に幾分の整頓を來たしたるへけれども、爾も尙ほ不完全なりしは免れざりしなるへし。凡そ近畿地方より關東に入るには、東海東山兩道ありと雖も、東山道は山岳起伏して不便多く、東海道の比較的通行容易なるに若かず。故に東海道は他道に比して遙に早く開けたりしものならん。足柄以東

神武……神八井耳命……

武藏(小)子宿禰(安)房(長)狹國造

下總(印)波國造(常)陸(仲)國造

下總(日)下(部)連(安)部(猿)島(臣)

下野(奈)須(直)奈須國造

孝元……武內宿禰……(安)房(平)群(壬)生(朝)臣(上)總(宗)我(部)下(總)雀(部)

孝元……大彥命……(常)陸(茨)木國造(上)野(上)毛(野)國造(坂)本(朝)臣(上)毛(野)朝

崇神……豐城入彥命……(臣)檜(前)君(上)野(佐)位(朝)臣(壬)生(公)

饒速日命……(下)野(下)毛(野)國造(大)麻(績)部(下)毛(野)公

高皇彥靈尊……(下)總(物)部(匝)瑳(連)

天忍穗耳命……(常)陸(久)自(國)造(常)陸(志)太(連)

上野(大)伴(部)小(長)谷(部)西(黨)

相模(師)長(國)造(上)總(須)惠(國)造(馬)來(田)國造

常陸(茨)城(國)造(多)珂(國)造(石)城(直)石(城)國造

相模(相)武(國)造(武)藏(入)間(天)邪(志)國造

安房(阿)波(國)造(上)總(上)海(上)國造(菊)麻(國)造(伊)甚(國)造

下總(下)海(上)國造(常)陸(新)治(國)造(高)國造

(主として栗里先生雜著國造族類考に據る)

天忍日命……

大化改革

大化以後

上古よりして本邦貴賤の別甚し。臣連伴造國造其の他有姓

の良民は、賤民を奴婢として使役し、田宅山野を占有し、強を地方に稱す。

屯倉御子代等の私有の田園もまた世を逐ふて増加し、諸弊漸く甚しく革新の

要逼れり。是れか爲めに推古期以來朝廷常に全國の行政區劃及び中央政府の

組織に大改革を加へんと期するもの茲に歲あり。孝徳の朝大化元年八月に至

りて先づ東國を分つて八國とす。八國は蓋し相模武藏上總下總上野下野常陸

道奥なり。(河田縣民の既に據る)即ち之れに國司を任し、國務を管せしむ。此れ改革の第

一着手なり。翌年初めて戸籍法を大和六縣及び東國に施行し、次て御子代屯

倉及び臣連諸造等の部曲の私民田莊を廢し、盡く之れを國家の有とす。因て

田租庸調の法を定め、地方分權の積弊を破り、郡縣の制を取り、中央集權

東國を八國に分つ

國郡地名の用字

の端緒を開く。律令政治となすの大英断なり。この後天智天武・持統の朝を経て文武に至り、此の制漸く整頓す。この間國郡の界を更定し、國司は四年交替となし、郡司は世襲となす。

我が邦元來諸國の國名を記するに一定の法なし。木倭泉等の如き一字を以てするものあり、上毛野天邪志等の如き三字を以てするものありて區々たり。元明天皇和銅六年、畿内七道に、風土記を撰み奉るを命する時に於て始めて國郡郷里の名は好字を用ひしむることを命す。次て淳和天皇十年、郡郷山川等の號、諱に觸るゝ者あれば改易すべきを令す。延喜式にも郡里の名二字を用ひ、嘉名を取れとの規定あり。要するに大化以後に於て、地名の文字にも大變動を來したり。

國郡の廢合

大化改新已後國郡の廢合分置また甚多し。常陸はこの時新治筑波茨城那賀久慈多珂の六郡たり。次て全五年、那賀郡及び下總國海上郡を割て鹿島郡を置き、白雉四年、筑波茨城二郡を割て信太郡を置き、茨城那賀二郡を割て行方郡を置き、多珂郡を割て石城郡を置き、尋て新治郡を割て白壁郡(後の筑波郡)

を置き、筑波郡を割て河内郡を置き以て十二郡となす。養老二年、新に陸奥國の中、標葉行方宇太日理の諸郡を割て磐城國を建つるに當り多賀郡を割きて菊多郡と名つけ之れを磐城に隸す。この他の諸國に於ても何れも斯くの如き郡の分合行はれしなるべしと雖も、今總て之れを詳にする事難きを以て略して説かず。

上古已來上總下總は一國にして總國と云へり。其の上下二國に分れたるは果して何れの時代によりしやは詳にし難しと雖も、大化已後に於て已に二國たり。安房の國またもと上總國の一部たり。即ち養老二年五月、上總國の平群安房朝夷長狹の四郡を割て新に建てられたるなり。次て天平十二年、又之れを上總國に併せしが、天平寶字元年に至り再び分立せり。上野下野もまた往古一國にして毛野國と稱せしが、仁徳天皇の朝之れを分ちて上下二國となし上毛野下毛野と稱し次て上野下野と改めたり。

國郡には國郡司ありて、地方の政治を司り、民生を治め行政司法の權を握れると共に寧樂時代また諸國に國分寺の設あり。一國の祈願所として、民衆

國分僧尼寺

を之れに集會せしめ、僧尼を置きて教誨を司り、國司と相俟つて、以て民治の績を擧げんとせり。蓋その創設の時代に就ては古來異説多く、確定する能はざれども、天平以前より已にその設けありたる國ありしが如し。然れども規を設けて普く諸國に其の建設を命したるは天平十三年なり。其の全く完備せしは尙ほ遙に後にあるべし。要するに國分寺の設備は政教相俟つて民衆を治めんとしたるものなれば、その位置も地方政治の中心、即ち國府に接近して設けたるもの多きこと言を待たず。而して國府・國分寺の在りし地は、現今に於ても地名として存在するもの多し。今左に國府と國分僧寺との所在地を擧げて参考に供すべし。是れ當時、その國々の中心たるを表はすものなればなり。

國府と國分寺

國府所在地
 相模 中郡國府村大字國府本郷
 武蔵 北多摩郡府中町府中
 安房 安房郡國府村大字府中
 上總 市原郡市原村大字滿能邊

國分僧寺所在地
 高座郡海老名村大字國分
 北多摩郡國分寺村大字國分寺
 安房郡野村大字國分村
 市原郡市原村大字總社

諸國の一の宮

諸國一の宮の起原、亦何れの時代に濫觴するか詳ならず。或は崇神垂仁の頃より已に之れありとも云ふ。蓋し王代國司が、其の管内多くの神社に參拜すへきの煩を避けて、官社の内其の一を拜したるより起れる稱なり。今諸國一の宮の所在郡とその祭神とを擧ぐべし。また當時民衆集合の中心點と地方信仰心の歸傾とを知るに便あるべければなり。

地方	神社の名稱	祭神	郡名
相模	寒川神社	應神天皇	高座
武蔵	氷川神社	素戔彥男命	北足立
安房	安房神社	天太玉命	安房
上總	玉前神社	前玉命	長生

地方	神社の名稱	祭神	郡名
下總	香取神社	經津主命	香取
常陸	鹿嶋神社	武甕槌命	鹿嶋
上野	坂鋒神社	經津主命	北甘樂
下野	二荒山神社	豐城入彦命	上都賀

持統帝の時、軍防令完成し、諸國の壯丁四分の一を點して兵とし武事を習

東國の正丁邊
要衛戍の任に
當る

防人の歌

はしむ。次て大寶年間に至り、地方軍團の制備り各地壯丁三分の一を取つて兵となす。軍團の士は毎年番代して京師を衛らしむ。之れを衛士と云ふ。又別に邊境を成るものあり。之れを防人と云ふ。東國の正丁は勇悍にして事に堪ゆるを以て、多く防人に撰ばれて蝦夷の征討に従事し、亦太宰府の邊要衛戍の任に當る。交通不便の時遠く故郷を去つて兵役に服す。正に之れ當時にありては非常に苦痛なる一の義務なりしなり。當時人の東國人の勇悍なるを賞せし歌、又防人の離別を悲みし歌甚だ多し。今その一二を示して當時東國民人の氣風と防人の心情とを知るの料とすべし。

武藏國防人別を惜み夫妻贈答の歌。

おきていかば、妹はまがなし、もちてゆく
あつさの弓の、ゆづかにもかも。
おくれゐて、こひばくるしも、朝顔の、
君かゆみにも、ならましものを。

(萬葉集)

防人の別れを悲む心を痛む歌。

大君の、とほのみかと、不知火の、筑紫の國は、

大伴 家持

おさへの城ぞと、

聞こしおす、	四方の國には、	人さばに、	みちてはあれど、	鳥か鳴く、	吾妻をのこは、
いて向ひ、	かへり見せずて、	勇みたる、	猛き軍士を、	ねきたまひ、	まげのまに、
たちねの、	母が目離れて、	若草の、	妻をもまかず、	あらたまの、	月日よみつゝ、
あしか散る、	難波のみ津に、	大船に、	まがいしぬき、	期なきに、	かことへの、
夕潮に、	かぢひきをり、	あともひて、	漕ぎゆく君は、	波の間を、	いゆきさぐみ、
まさきくも、	早く至りて、	大王の、	みことのまにま、	ますらの、	こゝろをもちて、
ありめぐり、	今年をばらば、	つゝまはず、	飯りきませと、	いはひべを、	とこにすて、
白紗の、	袖折るかへし、	ねばたまの、	黒髪しきて、	長き毛を、	まぢかもこひん、
はしきつまらほ。					

反歌。

とりかななく、吾妻をとこのつまわかれ、
悲しくありけん年のななかみ。

(萬葉集)

奥羽との關係

關東の地、素より陸奥國と隣り、古より兩國の關係多し。元正天皇の朝、陸奥出羽の蝦夷王命に反き、その勢猖獗なるや、朝廷則東國の浮浪を以てその地に移住せしめ柵手と爲す。實にその鎮撫に當らしめし者なり。次に又命を阪東八國に傳へ、陸奥に事あれば國毎に二千以下の兵を發し、國司精悍の

朝鮮歸化人を
東國に移す

者一人押領してその救護に赴かんことを令す。陸奥の動搖につれて阪東亦多事なり。

孝謙天皇の朝、新羅我れに禮を失することあり。聖武天皇の時に至りて彼れ王子を遣して之れを謝せしと雖も、尙ほ貢を續けず。朝廷因て北陸山陰南海に課して戰艦を造り、美濃武藏の少年に新羅語を學はしめ、將に大に新羅を伐たんと企つ。この時また命を歸化の新羅人に下し、その歸國を欲するものには皆糧を給して之れを放還し、歸國を喜はざるものは盡く之れを武藏國に移す。武藏是れより新羅人多し。次て持統天皇の朝にはまた高麗の歸化人五十六人を常陸に置き、元正天皇の朝には靈龜二年を以て駿河中斐相模上總下總常陸下野七ヶ國に散在せる高麗人一千七百九十九人を武藏に移し高麗郡を建つ。これ等の舉蓋し一に民政上軍治上の便宜に出でたるものなりと雖も、亦以て當時東國地方の人口大に稀薄なりし事情を證するに足るべきなり。

三 平安朝時代

地方政治紊亂

常陸上野上總
親王任國とな
る

當時の諸國郡
名

平安朝の時代は我が朝廷の莊麗華美を極めたる世にして、文物典章の爛然たる盛觀ありし時なり。而してこれと同時に地方僻陬の地は一に國司權門の私に委せられて、最も暗黒を極めたりし時代なりといふへし。蓋地方官、中央政府の拘束を受くること漸く少きに乘して、益私曲を恣まにし、民財を掠め、官物を私し、放縱不法なり。或は國司印綬を帯ひて尙ほ國に就かず、遙任と稱して自ら京都に居りて遊晏に耽り、徒に料物を貪るもの亦漸く多し。淳和天皇の時、上總常陸上野の三國を以て親王の任國となし、其守を太守と稱せしめ勅任としたるが如き、その名即ち美なりと雖も、實は三國を以て公に遙任の國となしたるもの、その地方政治は益々擧るの期なからんとす。國郡の廢合は寧樂朝時代頗る頻繁なりと雖も、本朝に至りては漸く一定して暫く變更なし。今延喜式記する所に從て當時の關東諸國の郡名を示せば左の如し。

國名(和名抄) 郡名(延喜式)
相模 佐加三
足上、足下、餘綾、大住、
愛甲、高座、鎌倉、御油。

地方盜賊横行

武藏 平佐之 横見、其、都、築、大、多、里、男、金、在、原、豊、島、足、立、新、玉、入、高、比、企、

安房 阿八 朝、平、長、狭、

上總 不加三豆 市、原、海、立、昨、山、武、天、羽、

下總 不之毛豆 夷、濱、地、生、長、柄、山、邊、武、射、香、取、

常陸 比太知 行、新、鹿、那、河、多、茨、城、

上野 介加三豆 唯、水、利、根、勢、多、佐、位、新、山、田、

下野 介之毛豆 河、内、利、梁、安、那、須、寒、川、

已にして藤原氏勢を得て同族權を争ひ、徒に華美を競ひ遊惰に耽るに及ひて、紀綱愈廢弛し盜賊所在に起る。殊に東國のごとき中央政府に疎遠の地にありては上の威令殆んど行はれず、暗黒の狀、無政府なるに近し。仁明天皇

武家興隆の基

の朝には上總の俘囚凡子廻毛等亂を爲し、兵を以て鎮すと雖も動搖容易に止まず。次て清和天皇の時には武藏上總に檢非違使を置き非常を警衛せしめ、醍醐天皇の時には足柄碓氷に關を設けて盜賊の横行に備へしめしも、實は効なかりしが如し。要するに當時の東國の狀態は日に益々暗黒の裡に投せられつゝありたるものといふべきなり。而して斯くの如く朝家の權力漸く萎微するに従つて、獨り自らその勢力を地方に養ひ、正に他年の素養を形成したりしものは、實に源平の武人なり。而してその潜勢力の先づ公に發したるもの、之れを天慶の亂と爲す。天慶の亂は即ち武人將門の亂にして、武人貞盛の力に依て平きしものなり。

京都の上下、宴樂嬉安に慣るゝ久しく、亦他事を顧みず。此の時に際し一朝この變報あり、朝野爲めに色を失ふ。蓋藤原氏の天下の政權を執る歳あり。歴世外舅となり、尊貴天子に亞き、高位顯官皆其の族を以て占められたれば、族藤原にあらざるものは、假令皇胤と雖も立身の地を得るに難し。爲めに志を得ざる輩は、多く去て職を國司郡司に求め、地方へ赴くの習をなせり。而し

京師の貴紳東
國の地を求む
るもの多し

平將門の亂

て關東はその土地廣潤にして主宰少く家を立つるに便なり。故に京都の貴紳
 往々領地を茲に拓く。桓武帝の曾孫、高望王平氏を賜り上總の介に任せられ
 て、子孫東國に土着す。高望王四子あり、國香良兼良持良文といふ。國香常
 陸大掾たり。良兼上總介たり。良持鎮守府將軍たり。獨り良文任官せず、武
 藏村岡に居りて村岡五郎と稱す。今大里郡熊谷町の南荒川の對岸に吉岡村大
 字村岡あり、その地の茶臼塚は良文五代の孫忠通の墳墓なりとの傳説あり。
 良文住せし所の村岡も、恐らくはこの地なるべし。將門は良持の子なり、下
 總相馬郡に住して相馬小二郎と稱す。勇悍にして武藝に長す。嘗て京に上り
 關白藤原忠平に仕へて檢非違使たらんことを求めて能はず。望を京官に絶ち
 郷に歸る。是れより先き將門その叔父良兼と父良持の遺田を争ふて隙あり。
 已にして延長九年復良兼と争ふ。叔父國香、良兼を援けて將門を排す。この
 時常陸の人平眞樹あり、嘗て事を以て國香及び前大掾源護を怨む。茲に於て
 將門を語らひ、承平五年を以て共に兵を發して國香を殺す。叔父良正良兼兵
 を起して將門と戦ふ。七年十一月、朝廷官符を武藏安房上總常陸下野の諸國

に下して、國香の子貞盛良兼護等と共に、將門を追捕すへきを命す。然れと
 も諸國司皆將門の威勢に恐れ追討する能はず。貞盛良兼等と將門を攻むれど
 も克たず。貞盛京師に通る。將門續て自ら上京し、事私争にして、敢て朝家
 の命に背くの意あるにあらざるを辯し、冤を雪て歸國す。時に武藏足立郡司
 判官代武藏武芝全國權守興世王と入國違例の事を争ひ、興世王及び源經
 基と隙あり兵を構ふ。將門之れと和せしめんとし天慶元年兵を以て武藏に向
 ふ。經基以て己れを攻むと誤信し、驚き走りて京師に訴ふ。朝廷再び驚愕し
 先づ幣帛使を東海東山諸道に遣はして將門誅伏を祈る。將門因て常陸下野武
 藏上野下總五國の解文を取り、その異心なきを證しまた赦さる。
 已にして天慶二年十一月、常陸人藤原玄明、國司藤原維幾と争ひ將門に投
 す。將門之れを援けて維幾を敗り、その國の印鑑を奪ひ交替使を擒にす。茲
 に於て將門始めて意を決し實權を握りて緩急に備へんとするの志あり。時に
 興世王もまた新司百濟貞連と不和あり。爲めに來りて將門に投し之れに阪東
 諸國掠奪の事を勸む。將門即ち自ら新皇と稱し、王城を下總に建て、相馬の

將門の偽宮

内裏と名け、左右大臣を初め文武百官を任す。此れ素より皇位を望むの意あるにあらず。只兵勢を熾にして阪東諸國を威服せんとせしなり。朝廷、常陸信濃よりの急報に接して大に愕き、推問東國使を任し三關を固む。三年、藤原忠文征東大將軍として京師を發す。未だ到らざるに、三月、貞盛下野押領使藤原秀郷と共に、將門を攻め殺して首を京師に傳ふ。興世王等亦誅に伏す。將門が偽宮建設の地に就ては或は之れを猿嶋郡とし、或は之れを相馬郡とし、古來傳ふる所一ならず。從て後世諸説を存す。而して相馬郡といふ説を取るものはいまの北相馬郡守谷町(即ち古への相馬郡の内)を以て宛て、猿嶋郡といふ説を取るものはいまの猿島郡岩井町(即ち古への石井郷の内)を以て之れを宛つ。吾人また素より説ありと雖も今は暫く兩説を掲ぐ。又は偽宮の事單に計畫に止まりて實は成らずとするものあり。計畫ありて僅に二ヶ月にして誅に伏したるを見れば或は然らんか。此の時藤原純友又亂を南海に起し、庸調を横奪し、沿海の民屋を劫かす。已にして四年七月誅に伏す。世に將門純友東西相應して起り、京師を挾撃して皇位攝關を覬覦せしと傳ふれども、之れ全く後世捏造の説にして、實

武家益、勢力を得

平忠常の叛

に關係なきものなること先哲已に之れを説きて明かなり。この亂ありて武人何れもその功によりて、采地を得、民望を收めたり。秀郷は下野武藏の守に歴仕し、其の子千晴千常は佐藤氏を稱して其の名著る。貞盛鎮守府將軍たり。子孫驍勇のもの多し。之れ等の多くは皆後世東國の豪族となれり。多年潛勢力を養ひつゝありし武人は、茲に至りて俄に其の聲望を高め、威力を發揮するに至りたりといふべし。斯くして此の亂僅に鎮定せしと雖も、善後の良法を講せざりしを以て、地方凋衰を極め、國用缺乏して田園荒廢せり。天慶八年、諸國の貢品を勘定せしに、伊豆相模武藏上總下總常陸信濃上野下野の九國は凋弊最も甚たしかりしと云ふ。天慶の亂に次て武人の實力を世に表はしたるものは平忠常の反亂なり。後一條帝の長元々年六月、千葉介平忠常下總に謀反し安房國を攻めて其の國守を殺す。嘗て忠常が家臣常陸介平正度の家臣と共に出て獵し、其の獲物を争ひしことありしが遂に延て茲に至ると傳ふ。信ずべからず。要するに權力の争闘なり。報の京師に聞ゆるや、朝廷驚き二十一社に奉幣して騷擾の平定を

祈り、檢非違使判官平直方中原成道を遣して追討せしむ。年を経て功なし。由て二年十二月、成道の官を罷め京師に召還す。忠常勢益熾なり。安房守藤原光業恐れて印鑑を棄て、上洛す。此の時忠常の據有せし地は上總大椎城にして、次て下總大友に移ると云ふ。今共に其の地點を確言すべからず。三年九月、平直方勳功なきにより召還され、甲斐守源頼信を以て之れに代へ、坂東諸國司に命し共に追討に従はしむ。頼信忠常が不意に乘し急に撃つて之れを降す。實に四年四月なり。頼信忠常を携へ上京す。途上忠常疾に罹り美濃野上にて死す。即ち首を斬て之れを京師に傳へ、尋て之れを忠常の從者に給ふ。忠常の子常昌常近は其の罪を宥恕せらる。此の亂三週年にして始て平く、上總の耕田二万三千餘町ありしもの、此の亂に遭ひ耕作に堪ゆるもの僅に十八町となりしと傳ふ、人民疲弊の情察するに足るべし。

地方の政務派亂するに及んで、從來靜に潜勢力を養ひたりし武人は今やその勢を表はせり。而して此の時攝關家が之れを用ゐてその爪牙たらしめんと望めるに乘し、即ち之れに仕へ其の威望を藉りて更に己れの勢力の扶植に力

東國武人

坂東八平氏

めたり。源頼光は關白道長に仕へ、其の弟頼信は關白道兼の股肱となりしが如し。頼信の子頼義は小一條院に仕へ、平直方の女を娶りて父と共に下總に忠常の亂を撃ち、威信を東國に布く。直方は伊豆に在應して、子孫職を世襲す。後の北條氏は是れなり。平貞盛の姪維茂は陸奥に居り、餘五將軍と稱す。下野の豪族佐藤千晴と仇隙たり。平氏佐藤氏の二族共に關東に勢力あり。平貞盛の裔、また常陸大掾を世襲して、その國府近傍に居り大掾氏を稱す。平良文は武藏村岡より起り、其の裔相模兩總に瀰蔓し、三浦介上總介千葉介及び秩父氏を稱す。其の將門の領邑を襲領するものは相馬氏を稱す。後世の坂東八平氏(三浦、千葉、上總介、土肥、秩父、大庭、梶原、長尾)といふものは大抵其の裔なりとす。關白道兼の孫兼房、中原宗忠の子を養ひ僧として宗圓と云ふ。下野宇都宮の座主たり。子孫八田宇都宮氏を稱す。弓馬の家此れに至りて益顯る。是れより先き後冷泉帝の朝、陸奥の俘囚安倍氏亂をなす。源頼義坂東の兵を率ゐて之れを征し、數年にして漸く平く。之れを前九年役と云ふ。尋て堀河帝の朝、出羽の俘囚清原氏亂をなす、源義家之を撃ちて平く。之れを後三

年役と云ふ。此の如く源氏歴代東國の地方官として、民政に移め反亂を平け、東國武人の心を收攬す。其の子孫諸國に蔓延するもの多し。義家の孫義國は上野新田に居り、佐藤氏の食邑下野足利を取り、新田足利兩氏の祖となり、義光は甲斐守に任し、長子義業は常陸に居り、佐竹氏の祖となる。二子義清は甲斐にありて、逸見武田二氏を冒し、甲斐源氏の祖となる。源氏東國に勢力を扶植す。實に後ち頼朝をして業を爲さしめたる基礎をなせるものなり。

四 鎌倉幕府時代

平清盛身を武人に起し、風運に乗して勢力を占め、遂に藤氏を排し源氏を除き、暫く國柄を執りしと雖も、專横にして私曲多く、幾くならずして怨聲漸く四方に起る。治承四年四月、源頼政高倉宮以仁王に説きて平族討滅の舉を企つ。その子仲綱と共に令旨を奉し、源行家等をして之れを東國北國の源氏に傳へしむ。やがて事敗れて以仁王及び頼政宇治に敗死せしと雖も、是れより源氏諸國に起り、遂に平家滅亡の基を爲したり。

源頼朝は是れより先き平治の亂に流されて伊豆にあり。在應北條時政の家に寓し、暫く蟄伏して時機の到來を待ちたりしなり。治承四年四月廿七日、以仁王の令旨來るに及び、即ち時政と議して之れを奉して兵を擧ぐ。蓋關東の地は素より源家累代恩徳を布きたるの地なり。所在の豪族皆源氏に歸伏して平氏に慊焉たらさるもの多し。一旦機運熟せば源家の嫡流を奉して當年源氏の盛運を恢復せんこと彼れ等の期する所なりしなるべし。時政炯眼夙にこの勢を察し、而してこれ等の諸豪統帥の任に當るべきもの頼朝正にその人たるべきを知りて、遂に己れ平家恩顧の身ながら意を決して之れを援く。狡獪寧ろ惡むべしと雖も、頼朝をして克く大業を成さしめたるものは半ばこの人の功にあるべし。この時平兼隆伊豆の目代たり。頼朝八月十七日夜に乘し八十騎を以て兼隆の山本の第を襲ふて之れを殺す。之れ舉兵第一着なり。相模の人士肥實平伊豆の人工藤茂光來り屬す。頼朝即ち諸氏を従へ土肥氏の根據地たる相模土肥郷に赴き安達盛長をして八州の豪族を歴説せしむ。次に八月二十三日を以て三百餘騎を従へ、先づ相模を畧せんとして石橋山に陣す。平

頼朝の擧兵

家の將大庭景親伊東・澁谷の族と共に三千餘騎を率ゐて來り頼朝を圍む。三浦の黨頼朝に應し來援すと雖も、丸子川(酒匂川)出水して渡る能はず。景親之を機として兵を進む。衆寡敵せず頼朝大敗して僅に身を以て脱れ、土肥の杉山に匿る。景親搜索すること急なり。即ち遁れて箱根に潜み、又出て土肥に走る。此の時時政は甲斐源氏を糾合せんとせしも果さず、遂に伊豆岩浦より出て、海路安房に逃る。頼朝も亦た土肥實平岡崎義實以下主従七人、眞名鶴崎より海に航す。三浦氏と海上に會し共に安房獵嶋(加治山の北方龍嶋村は當時の獵嶋の地なりと云ふ)に至り、その地に上陸し直に檣を移して行々八州の諸族を招き上總を経て下總に進む。下總の千葉常胤武藏平氏の七黨下野の小山宇都宮諸族は千葉に、豊嶋清光葛西清重足立遠元等、及び上總の平廣常は隅田川に何れも兵を以て來り會す。茲に於て頼朝か兵大に振ふ。畠山重忠河越重頼江戸重長等また風を望んで降る。十月十五日、頼朝鎌倉に至り、父義朝の龜谷館を過り更に進て平軍を防んとして足柄を踰ゆ。この時弟義經、奥州より來りて黃瀬川に謁す。即ち共に進んで平維盛等を富士川に破りて之れを

御け、武田信義をして駿河を守らしめ、安田義定をして遠江を守らしめ、自ら鎌倉に還る。大庭景親來り降る、之を斬る。次て常陸未だ従はざるを以て兵を率ゐて之を征し、別將をして佐竹秀義を金砂城(常陸久慈郡金砂村大字上宮河内の西、金砂山にありしと云ふ)に圍ましめて之を降す。雖て復鎌倉に飯り大倉郷に館す。此時初めて侍所を置き和田義盛を以て別當となす。養和元年閏二月、頼朝の叔父志太義廣常陸に起り、下野の足利佐野常陸の佐竹諸族と平氏に應せしも、數月ならずして皆平き、關東八國悉く頼朝の命を奉す。是れより先き木曾義仲、信濃木曾莊に起る。甲斐の武田一條信濃の村上氏、佐久郡の諸族また起り、義仲に合して上野に入り、舊邑に據りて頼朝に應ず。茲に於て近江尾濃南海西海の諸族到る所同時に蜂起して、平家に抗し、海内騷擾を極む。

已にして義仲北陸を定め、壽永二年七月を以て近江に入り、直に京都に逼る。平宗盛天皇を奉し舉族西に奔る。義仲即ち京師に入る。義仲人となり野鄙にして兇暴濫に侵畧掠奪を行ふ。後白河法皇之れを厭ひ書を以て頼朝に囑

平家滅滅
天下の政權鎌倉に移る

す。因て頼朝弟範頼義經を遣り之れを撃たしむ。三年正月、義仲近江粟津原に戦死す。四年、範頼義經進んで平氏を討し之れを西海に殲滅す。
當時天下の政令は三に出つ。記録所の管する卿相の莊田の地と、攝家政所の管するその家領の地と、武家の管する武人の私地と、何れも獨立の支配を保ちて互に相納れず。従てその交渉複雑にして劃一する所なし。今や平氏亡ひて天下小康を得るに及び、頼朝即ち大江廣元の勸に従ひ、均く諸國に守護を置き莊園郷保に地頭を置く。而してそれ等の守護地頭には總て幕府の家人を以て任し、自ら之れを統率し總地頭となる。之れより諸國々司の權は鎌倉幕府任する所の守護の手に移り、領家本所の地、また全く地頭の司る所となり、政權全然鎌倉に歸す。

陸奥征討

平家滅亡の後、義經功を恃みて驕り遂に頼朝と不和を生し、陸奥に走りて鎮守府將軍藤原秀衡に頼る。已にして秀衡死して子泰衡嗣ぎ、頼朝の威を恐れ父の遺託に背きて義經を殺し降を乞ふ。頼朝之れを許さず。奥州征討の師を催す。蓋頼朝の意之れを機として邊隅の強族を滅さんとしたるなり。即ち

鎌倉天下政令の中心となる

文治五年七月を以て千葉常胤八田知家をして、常陸下野の兵を督して東道より、比企能員宇佐美實政をして、武藏上野の兵を督して北道より進ましめ、自ら麾下を率ゐて中道を撰ぶ。兵總て三十萬騎と稱す。師平泉に臨む、時に泰衡の臣河田次郎、其の主を殺して降る。

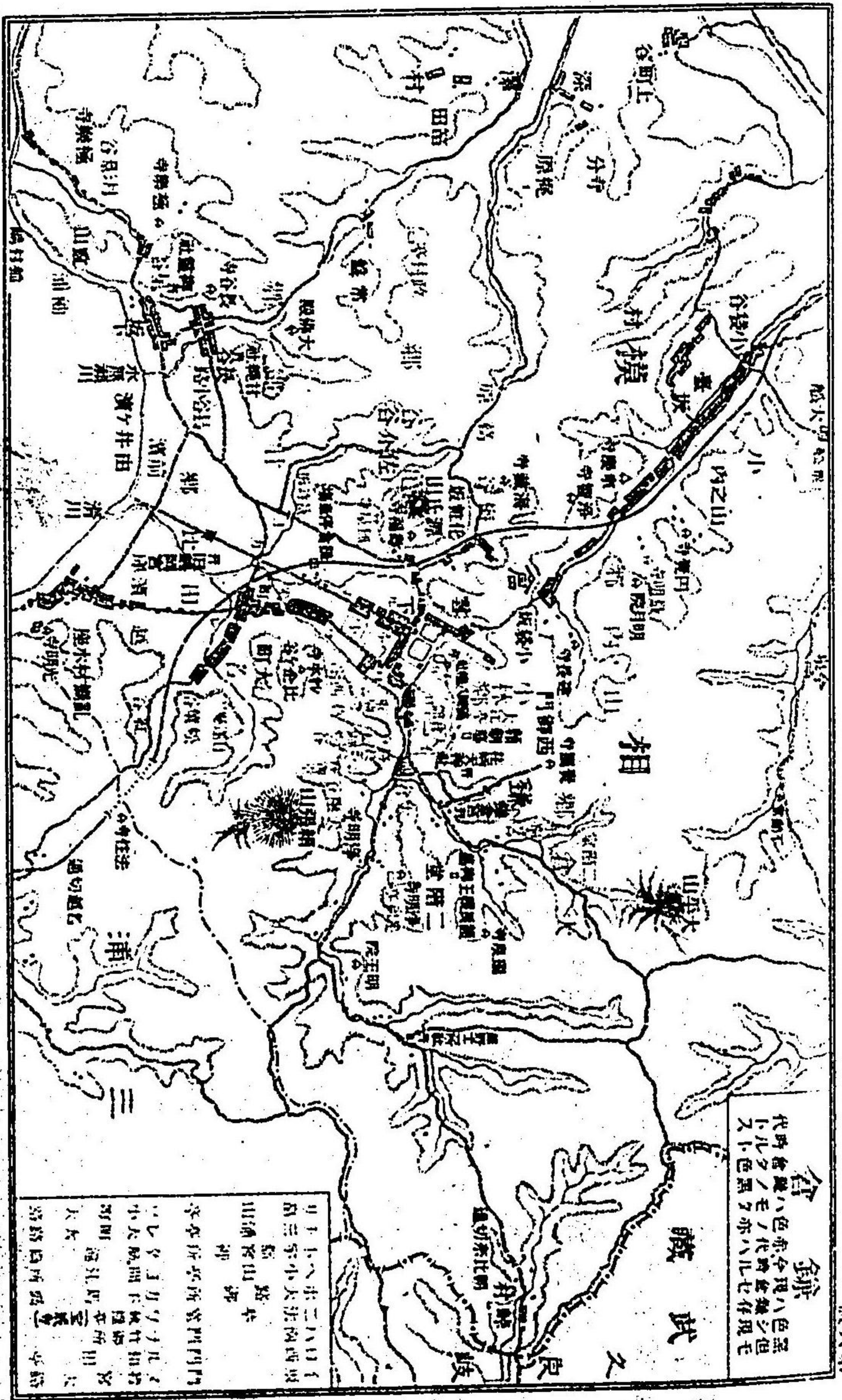
鎌倉の繁榮

こゝに於て奥羽全く平く。是れより先き西海諸族また已に歸伏す。因て建久元年を以て頼朝始めて京師に入觀し權大納言を拜し右大將に任す。やがて之れを辭し、請ふて六十六國總追捕使となり、次て征夷大將軍を拜す。頼朝即ち自ら關東十國を管し、これに據て天下追捕の權を掌る。この時從來の公文所を改めて政所となし、大江廣元を別當に任し、藤原行政を令となし、連署して政務を行はしむ。是れより先き已に軍政を行ふ所、侍所あり。司法を司る所、問註所あり。茲に至て武家幕府の組織畧完成す。而して鎌倉是より天下の府たり。頼朝身を伊豆の一流人に起し、以仁王の令旨を奉し、平氏追討の義旗を擧げ、一舉して平氏を西海に殲滅し、天下を統一し、兵馬の大權を握りて覇府を開き、居を鎌倉に奠む。初め漁戸農民の矮屋列なるに過ぎざ

りし鎌倉の地は、忽にして武人の邸宅と變し、市店周匝の域と化し、全國政令の發する中樞の府となり、やがて歌壇の雄將たる少年將軍をして、宮柱ふとしき立てて萬世に今を榮えむ鎌倉の里。(源實朝)と謳歌せしめたる繁榮の境とはなれり。

初め頼朝が覇業の地として特に鎌倉を撰ひたるは、千葉常胤の勸めに基きたること、吾妻鏡記する所にして、實にこの地が要害の優勝と、源家多年の因縁ありしによること言を待たず。今主として相模風土記記する所と、歴史地理所載阿部華村氏の考とを参照して、更に之れを説明すべし。蓋鎌倉の地たる、東北西の三方共に山を環らし、唯南の一面開けて洋々たる相模灘に面す。その規模大ならずと雖も、其地を圍みて所謂四境七口の險あり。築城の術未だ發達せず、概ね自然の地勢を利用して其の城地を下せし當時にありては、實に他に比倫なき好個要害の域と謂ふべし。四境とは東は六浦南は小坪西は稻村北は山内の四險をいふなり。七口とは名越切通朝夷名切通巨福呂坂龜谷坂假粧坂極樂寺坂大佛切通を云ふなり。三浦半嶋に對する小坪方面に通す

鎌倉府の理



鎌倉府の理
 鎌倉府の理
 鎌倉府の理
 鎌倉府の理

るものは名越切通なり。六浦即ち今日の金澤方面は僅かに朝夷名切通を以て通すべし。稻村の方面には極樂寺坂あり。山内方面には巨福路坂あり。四周堅固、當時の所謂山ふところにして、武人割據の地として、屈竟なる其の右に出づる地なしと云ふも不可なからんか。天下政令の中心としては其の域稍小なるか如きも、遠くは西に箱根足柄の天險を控へ、北には碓氷妙義の難を有し、加之利根、隅田、多摩、大井、天龍、富士、馬入等の諸大河ありて周圍を縦横に遮斷し、所謂山河の固め巍然たるものあり。據て以て東國を左右し天下に臨むに足るへし。これ等の險を以てその外廓となし、四境七口を以て其の城門なりとすれば、鎌倉の地決して規模小なりと云ふべからず。守るに易くして出づるに便なり。安じて以て處るに足るべきなり。頼朝の意また恐らくは茲に存せしならん。是れ鎌倉の奠府を地勢上より考察したる説明なり。

頼朝の祖、六孫王經基已後頼信、頼義等皆代々東國の國司として徳を地方に布き、數度の大亂を平けて武勇を輝し、士民を威服せり。加之源家の一族東國に蔓延するもの多く、嫡流の身を以て一呼すれば是れ等諸族の其の旗下に

東國豪族居住の地

雲集すへきは正に刻下にあるべし。而して鎌倉の地と源氏との關係に就ては特に當時の武人氣質より觀過し能はざる歴史上の深き因縁を有す。此の地初め平氏の有たりしが、貞盛の孫平直方の時に至り、源頼義其の女嫁たるに因り始めて此の地を讓與せられ、以後源家相傳の所領となる。この地鎮する所の鶴岡八幡宮は頼義が安倍貞任征討の時、戰捷祈願の爲め石清水より勸請して由比郷に建てたるもの、後ち義家修復を加へたり。(頼朝の時に至り、治承四年十月、小林郷に奉遷せしものなり。)又頼朝の父義朝はこの地龜谷に邸宅を有せり。以て源氏累代此の地と因縁深かりしを思ふべし。さればこそ千葉常胤が鎌倉を以て源氏の御躰跡として、この居住を頼朝に勸めたるなれ。是れ鎌倉奠府の理由を、歴史上より見たる説明なり。

頼朝の兵を擧ぐるや、其の旗下に雲集せし諸士は、凡そ源氏の一族なると、また他族なるとを問はず、其の多くは源氏累代恩顧のものにして、何れも永く地方に割據したりし豪族なり。蓋豪族の地方に居住するや概ね其の地名を取て苗字とすること當時の風習なり。而して其の地の大なるは郡名、小なる

は字として現存するもの往々にしてあり。今之れを抽出して諸士の苗字と對照すべし。因て以て當時の豪族勃興の地を下して得るとせんか、蓋又興味なしとせんや。

- | | | | |
|------------|-------------|----------|-----------------------------|
| 高山重忠 | 武藏大里郡高山村 | 狩野茂光 | 伊豆田(北狩野村、下狩野村、方郡、上狩野村、中狩野村) |
| 三浦義明 | 相模三浦郡 | 小山朝光 | 下野北都賀郡小山町 |
| 全義澄(義明の次子) | 全仲郡岡崎村 | 毛呂冠者季光 | 武藏入間郡毛呂村毛呂本郷 |
| 岡崎義實(義明の弟) | 下總千葉郡 | 岡部次郎忠綱 | 全大里郡岡部村 |
| 千葉常胤 | 相模足柄下郡土肥村 | 全六彌太忠澄 | 全比企郡中山村 |
| 土肥實平 | 全鎌倉郡深澤村大字梶原 | 比企藤四郎能員 | 全秩父郡 |
| 梶原景時 | 上野新田郡 | 秩父武者四郎行綱 | 全北埼玉郡南、北河原村 |
| 新田義重 | 下野足利郡 | 河原太郎高直 | 相模高座郡明治村大字大庭 |
| 足利義兼 | 武藏江戸 | 大庭景能 | 武藏大里郡久下村 |
| 江戸太郎重長 | 全入間郡川越町 | 久下次郎重光 | 全兒玉郡木庄町 |
| 河越太郎重頼 | 全北豐島郡豊島村 | 全權守直光 | 全兒玉郡丹庄村元阿保 |
| 豐島權守清光 | 下總結城郡 | 庄太郎家長 | 下野宇都宮市 |
| 結城七郎朝光 | 相模高座郡澁谷村 | 阿保五郎 | 武藏兒玉郡大澤村大字猪俣 |
| 澁谷重國 | 伊豆田方郡宇佐美村 | 宇都宮朝綱 | |
| 宇佐美平次實政 | | 猪俣平六則綱 | |

- 葛西三郎清重
- 足立右馬允遠元
- 熊谷次郎直實
- 勅使河原後三郎有直
- 水尾谷十郎
- 都築平太
- 愛甲季隆
- 四方田三郎
- 仙波二郎
- 玉井太郎
- 武藏南葛飾郡一部の稱
- 全北足立郡桶川町
- 全大里郡熊谷町
- 武藏見玉郡賀美村
- 大字勅使河原
- 全比企郡三保谷村
- 全都築郡
- 相模愛甲郡
- 武藏見玉郡北泉村四方町
- 全入間郡仙波村
- 全大里郡玉井村
- 横山小權守時廣
- 品川三郎
- 金子十郎家忠
- 吉見次郎頼綱
- 成田七郎助綱
- 忍三郎
- 那須余一宗高
- 別府太郎
- 奈其五郎
- 北條時政
- 全南多摩郡横山村
- 全荏原郡品川町
- 全入間郡東金子村金子村
- 武藏比企郡吉見村
- 全北埼玉郡成田村
- 企全 下忍村、忍町
- 下野那須郡
- 武藏大里郡別府村
- 企全 奈其村
- 伊豆田方郡西山村の内四日町の邊を北條と云ふ

頼家將軍 實朝將軍

正治元年正月、頼朝薨し、長子頼家代つて將軍となる、母政子其の質狂暴なるの故を以て政を聴かしめず、天下を中分して關西三十八國の地頭を弟實朝に傳へ、關東二十八國の地頭及び總守護を子一幡に傳へしむ。比企能員は一幡の外祖父たり。政權の分るゝを慮り、頼家に勸めて北條氏を除かんと圖る。已にして謀漏る。時政即ち一幡及び能員を殺し、次て頼家を廢して之れを伊豆修禪寺に置き、聽て弑してその弟實朝を立つ。政子性鷲悍、父時政と

天下の權北條氏に歸す

謀り、機に乗して功臣を殺し専ら自家の利を謀る。畠山重忠和田義盛等の功臣皆害を蒙り、北條氏獨り盛なり。承久元年正月、實朝右大將となり、拜賀の禮を鶴岡に行ふ。頼家の子、公曉機に乗して之れを弑す。源氏の統絶ゆ。茲に於て北條義時新たに九條家より頼經を迎立して將軍とす。是より後ち將軍は唯虛位に處り、北條氏世執權として天下政務の實權を掌握す。

三浦氏の叛

寶治四年、三浦義澄の孫泰村、北條氏の專權を惡み之れを覆さんと企て、遂に敗れ一族皆斃る。其の黨餘の上總にあるものまた滅ぶ。此の時頼經已に將軍を去り、その子頼嗣新に將軍たり。而して三浦氏舉兵のこと實に頼經に關す。北條氏即ち頼嗣の將軍職を止め、後嵯峨上皇の皇子、宗尊親王を請ふて征夷大將軍とす。是れより親王家鎌倉に將軍たり。朝臣上杉重房此の時隨行して鎌倉に來りて武家となる。山内犬懸扇谷の上杉は其の後なり。

北條氏末路に近づく

弘安の役已後諸國海防に疲弊して怨嗟の聲あり。執權北條高時立つに及んては北條氏の威信漸く地に墮ち、諸國漸く亂を想ふ。蓋し北條氏陪臣を以て

正中の變

永く政を行ひ、源氏の一門を抑ふる甚たしきを以て、その族の不平を抱くもの多し。尊氏の祖足利家時の如き已に早く北條氏を倒さんと企てたることあり。加之承久の亂に朝廷に與して所領を失ひたる輩は、所在に潛みて機に乗して起らんとす。北條氏の天下また危かな。而して今や高時昏愚にして其の器にあらず。幕府の訴訟は總て内管領長崎高資の掌る所となり、偏斷多くして怨聲沸起す。津輕の安藤氏亂をなして北奥先づ亂る。幕府の基礎は已に傾きたりといふへし。時に後醍醐天皇新に立ち、博識宏覽にして政跡に練達し、後三條帝以後の賢君と稱す。夙に王政恢復の震慮あり。今や鎌倉の政務日に亂るを見て機到れりとなし、幕府を倒さんことを企つ。日野俊基日野資朝等之れに與る。已にして事願れて資朝俊基等捕へらる。實に正中元年なり。之れを正中の變と云ふ。此くして討幕の企圖一度破れしと雖も、天皇の志愈々堅く、元弘元年に至りて再ひ之れを謀る。この時また事成るに先ちて敗れ、天皇笠置に遁れ、諸國勤王の士を徵す。楠木正成赤坂城に據りて應ず。高時、大佛高貞足利高氏等をして京都を護らしめ、金澤貞冬をして笠置の行在を犯

新田義貞の舉兵

さしむ。未だ至らざるに笠置陥り、天皇隠岐に遷幸す。山陽南海亦風動す。三年閏二月、天皇隠岐を遁れ、官軍の勢漸く隆なり。此の時足利高氏俄に志を翻して官軍に合し、六波羅探題府を陥る。北條仲時北條時益近江に去り自殺す。此の時新田義貞亦兵を上野に起して鎌倉に迫る。

新田義貞は義重の後にして、代々上野新田郡に居住す。今の強戸村寺井の近傍は即ちその遺址なるべし。元弘三年、東軍の西上するや、義貞も亦千早城寄手の内にあり。護良親王の令旨を得て始めて官軍に應じ、東歸して上野に勤王の兵を舉げ、鎌倉の虛を衝かんと期す。即ち一族里見山名大館堀口岩松桃井等已下の勇將を率ひ、先づ義旗を笠懸野(新田郡笠懸村附近)に舉げ、上野の守護長崎四郎左工門尉を敗り、進んで武藏に入る。武威遠近に振ふ。

五月十四日、高時之れを聞き其の弟左近將監道性を遣はし、武藏に向ひ山口の庄の山野に陣を取りて之れを防かしむ。翌日、分倍河原關戸に接戦し道性敗走す。鎌倉茲に於て大に騷擾す。即ち防禦の部署を定め、下道には金澤貞將、武藏路には赤橋守時、中道には大佛貞直向ひてその軍を防ぐ。千葉貞

鎌倉の滅亡

胤義貞に應じて下總に起り、貞將と武藏鶴見の邊に戦ひて之れを破る。貞將退く。その他守時は武藏千代塚に、貞直は葛原に防戦せしも何れも敗れて退く。想ふに道性か初め防戦したる關戸分倍河原地方(武藏南多摩郡多摩村)は、上野より鎌倉に通ずる當時の本道にして、その間を流るゝ多摩の川流は實に鎌倉の外濠とも稱すべきものなりき。現存せる關戸の墟址に登れば、武藏西北の山川の形勢、歴々として一眸の内に集る。之れより小野路本町田原町田(武藏南多摩郡)の邊に至り、鶴間(相模高座郡)瀬谷飯田原宿柄澤(相模鎌倉郡)等を経て鎌倉に入りしなるべし。今尙この通路に鎌倉街道の名の存する地あり。獨り此の戦のみならず、以後足利新田北條上杉の戦、皆此の地點に演せられたるを見ても、此の地が鎌倉の防禦上最も要害の地なりしは之れを知るに難からず。越て十八日、義貞捷に乘し鎌倉に逼る。その將大館宗氏は鎌倉の大手なる極樂寺坂に向ひ、前濱の在家に火を放つ。堀口貞満は巨福路坂に向ひ、義貞は自ら假粧坂に向ふ。赤橋守時長崎高重大佛貞直等鎌倉の諸將死を決して防戦し、宗氏を稻瀬川に斃せしも全軍遂に利あらず。二十一日、夜に乘し、寄手稻村崎より亂入す。鎌

倉戦塵の卷と變し、葛西谷に激戦あり。二十二日、高時東勝寺に入りて自殺し、一族數百人之れに殉す。治承四年、頼朝居を茲に奠めてより百五十年、幕府茲に滅ぶ。

五 南北朝の時代

新田義貞鎌倉を滅してより、政權の中心一たび關東を去りて京都に復す。茲に於て頼朝の奠府已來百五十年間、天下中樞の府として、殿閣門廡の壯宏、市街の殷賑京都を壓すと稱せられたる鎌倉の繁榮も一時荒廢を極めて訪ふ人をして、

舊里の昔を見すはもとよりの草原の原とや思ひなさましと、昔を忍はしむるが如き有様には變したり。

然りと雖も、鎌倉の地は關東の中心にして、又源家多年の根據の地なり。されは武家にして、若し大に志を爲さんと欲するものあらは、先づ其の基礎を此の地に立つるを便とす。而して實に之れを試みたるものは足利尊氏なり。

鎌倉の荒廢

足利氏基礎を鎌倉に立つ

足利氏は新田氏と共に源氏の冑裔にして、世々下野足利に居り、足利を以て氏と爲す、尊氏に至て著はる。初め義貞の鎌倉を攻むるや、先ちて尊氏西上して京都に在り。別に其臣細川和氏をして子千壽王丸を奉して鎌倉に到らしめ、義貞西上の後は鎌倉に在りて人心を收攬せしむ。蓋し深意の存する所に於て、他日の根據を此の地に作るの要意なり。

建武中興の業成るに及び、尊氏其の弟直義を乞ふて相模守となし、征夷大將軍成良親王を奉して鎌倉に鎮せしめ、應て已れ亦武藏常陸下總三國の守護に任す。已にして成良親王上野大守となり、直義執權となる。此の如くにして足利氏は遂に關東の要地を其の有に收め、以て基礎を鎌倉に立つるに至りたり。梅松論に曰く、

抑も、累代微慮を以て、關東を亡されし事は、武家を立らるましき御爲なり。然るに直義朝臣太守として、鎌倉に御座ありければ、東國の輩是に歸服して京都へは應せさりしかは、一統の御本意今に於て更に其益なし云々。以て足利氏が東國の人心を得たるを知るべきなり。

北條時行の亂

東國主權足利氏に歸す

此の時に當りて、北條氏の遺族失意の徒、諸國に嘯集して亂を起すもの多し。建武二年七月、高時の遺子時行亦兵を信濃に起して武藏に入り鎌倉に向ふ。直義兵を出して之れを女影原(今の高麗郡女影村附近)小手指原(今の入間郡小手指村大)及び府中に拒く、皆利あらず。更に自ら出澤(南多摩郡本町田村附近なるべしと)に出て、戰て復敗れ一族多く戰死す。直義遂に成良親王を奉し鎌倉を捨て、西に走る。時行即ち鎌倉に入る、世に之れを中先代の亂といふ。護良親王が二階堂谷の幽閉中に弑せられ給ひしも實に此の時に在り。尊氏、京都に於て此の敗報を得、自ら將として賊を討せんと請ふ。而して朝廷の未だ之れを許さざるに當りて縦に兵を率ゐて京都を發す、八月二日なり。已にして時行の軍と函根及び相摸川に戰て之れを破り、十八日を以て鎌倉に入り、先づ地を鶴岡八幡宮に獻し、尋て從軍將士の功あるものに恩賞を行ひて人心を得、更に武藏下總相摸上總の地にして前に新田氏一族の拜領したるものは悉く之れを沒收して新に給人を附せり。此の時朝廷使を發して之れを召還すれとも應せず、遂に謀反を決し、鎌倉將軍の舊邸に府を開きて政務を行ひ、自ら征夷大將軍關東管領と稱す。而して特に其の

族上杉憲房を以て任して上野守護となし、以て義貞の根據地を奪はしむ、爲す所敏捷驚くべし。地方豪族に於ては常陸の佐竹貞義主として之れに應ず。茲に於て東國の主權足利氏の掌中に落つ。

戦宮嶺竹の下の

朝廷即ち尊氏征討の議を決し、尊良親王を以て東國管領に任し、義貞等をして之れを補けしめて東國に下し、又鎮守府將軍陸奥守北畠顯家に命を傳へて、鎌倉の背後を衝かしむ。十一月東征の軍京都を發し、十二月相摸の國境に於て東軍と接戦す。即ち義貞は函嶺に於て直義と相持し、其の弟脇屋義助は尊良親王を奉して尊氏と竹の下に戦ふ。而して官軍大に敗れ義貞兄弟西走し、尊氏等其の後に尾して東海道を進む。是れより先き、北畠顯家父親房と共に國中の兵を集め、義良親王を奉して陸奥國を發したりと雖も、道路僻遠の故を以て期に及はず。其の軍相摸に入りし時は尊氏已に出て、西上の途に在り。因て直に之れを追ふて上洛す。東國の將士之れに従ふ者上野下野常陸に残りたる新田氏の一族、下野宇都宮氏の一族及び下總千葉氏族中の一類等あり、其の勢五万と稱す。是れより官軍に應ずる者或は武家に黨する者所在に起り

北畠顯家等關東を經て上洛す

官方及び武家

て、到る處沸亂す。其の官軍に應ずるものは官方と稱し、足利に黨するものは之れを武家方といふ。然れとも豆相以東にありては、要するに足利氏已に衆望を得、従つて武家方の勢盛にして官軍概ね振はず。此の時鎌倉には足利氏の族斯波家長陸奥より來りて留守し、千壽王丸を奉して關東に號令す、千壽王丸は即ち後の義詮なり。

南北朝

延元元年正月、尊氏京都に於て一たひ大敗して西國に走りしが、四月に至りて更に九州の精英を調へて大舉東上し、遂に京都に入りて禁闕を犯し、八月、光嚴上皇の皇弟豊仁親王を立て、天皇と爲す、光明天皇是なり。先帝後醍醐潜に遁れて吉野に幸し、行宮を其の地に營みて恢復を圖り勤王の士を徵す。是れより吉野を南朝と呼び京都を北朝と稱し兩朝分立す。諸國の豪族又或は彼に歸するものあり、或は此れに屬するものあり、到る處紛擾愈甚だし。關東は其の大部分の地足利氏の領土なるを以て、大勢は素より北朝に傾けり。即ち雄族の之れに應ずるもの、常陸に佐竹貞義(太田)大掾盛幹(府中今の石岡)あり、下野に那須氏あり、其の他江戸葛西三浦鎌倉及び坂東の八平氏の徒武藏

關東豪族の去就

兩黨の興廢

の七黨の輩亦多くは之れに歸す。下總の千葉貞胤(千葉)も初めは新田氏に屬せしが後には足利氏に黨せり。南朝に屬するものは纔に常陸に小田治久(小田城)關宗裕(關城)下妻政泰(下妻城)等あるのみにして數ふるに足らず。下野の小山氏と、宇都宮氏とは、時に足利に黨し、時に南朝に歸して向背恒ならず。是より先き、延元元年二月、尊氏の京都に敗れて西走するや、北畠顯家歸任して陸奥に在り。茲に於て尊氏後勢を恢復するの報を得て、延元二年再び西上を決し、八月陸奥を發して上野に出て、足利義詮等の軍と利根川に戰て之れを破る。此の時、楠木正家常陸(瓜連)那珂郡に在り、那珂通辰(那珂西)に在り)と連結して佐竹大掾兩氏と交戦し、以て顯家に應ず。其の他北條時行も南朝に降りて兵を伊豆に起し、新田義興は新田の一族を集め、上野の軍を以て顯家に武藏に會し、下野の宇都宮公綱亦起て之れに従ふ。十二月顯家武藏より進て鎌倉を攻む。義詮敗れて走り斯波家長等戰死し、南軍稍振ふ。已にして翌年正月、顯家鎌倉を出て、上洛するに及び、やかて鎌倉復北朝の手に歸し南軍勢再び微なり。

北畠親房常陸に流着す

延元三年八月、北畠親房東國の經營を期し、其の子顯信及び結城宗廣等と義良親王を奉して伊勢大湊を發す。而して偶海上颶風に會して船四散し、或は沈没し或は漂泊す。親房の船は海上に漂ふこと數日にして、常陸東條浦に着流す。東條浦は即ち今の霞浦にして、霞浦は當時尙ほ湖を爲さずして大海に通せしものなりといふ。

常陸に於ける親房の事蹟

常陸の官軍關宗裕小田治久下妻政泰等兵を率ゐて之れを迎ふ。親房即ち先づ阿波崎神宮寺二城に據り、次て小田城に移る。その地は筑波郡小田村の地にして今尙舊蹟歴然たり。親房即ち令を四方に發して官軍を募り、又結城宗廣の子親朝に下總陸奥の經畧を命す。翌年、尊氏高師冬等に命して關東に下りて親房等を討たしむ。興國元年、師冬來りて小田城を攻む。時に常陸に於て官軍に屬するもの、纔に小田城小田氏之に據る(關城)關氏居城(大寶城)下妻氏之に據る(眞壁城)眞壁氏居城(伊佐城)伊達行朝之に據る(等)の數城に過ぎず。互に相連結して敵に抗すと雖も、城小にして兵少なく勢敵すべからず。親房因て書を載してこれを親朝に送り援を乞ふ、親朝二心を抱きて來らす。翌二年親

房護良親王の御子興良親王を吉野より迎へて之れを小田城に奉す。此の時甫めて九歳なり。己にして師冬等復大に小田城に迫る。當時小田城中己に兵疲れて戦に堪へず。而して親朝の援尙ほ至らず、危機旦夕に迫る。やがて城主小田治久亦利に誘はれて異心を懷き、遂に賊兵を城中に導く。親房出て、關城に走り、關宗裕に據り、春日顯時は興良親王を奉して下妻政泰の大寶城に走る。師冬等即ち進て其の間に屯して兩城の連結を斷ち長岡持久之計を爲す。己にして兩城共に漸く糧盡きて困厄益甚だし、親房更に反覆手書を陸奥の親朝に送り、激勵切至、喩曉百端以てその來援を促す。世に關城書と傳ふるもの即ち是れにして一字一誠より成り、千載の後尙ほ懦夫を起たしむべしと稱せらる。而して親朝應せず遂に賊に降る。茲に於て南軍の形勢益盛り城遂に守るべからず。四年十一月兩城陥り關宗裕下妻政泰節に死し、親王奥州に走り、親房顯時吉野に歸る。親房常陸に在ること前後五年、重圍の裡に孤城を保ちて南朝の爲めに畫策し、大義を説き正閔を正して士氣を鼓舞し正義を啓發す。誠に南朝の柱石にして忠烈古今を曠ふせるものといふべきなり。其の

著職原抄二卷は蓋興國元年小田城中賊と相持するの間に於て、亂世、政事廢れ禮典荒まん事を慨して撰し奉りたるものなり。神皇正統紀亦籠城中の撰なり。

親房常陸を去りてまた大義を持するものなく、關東遂に全く北軍に歸す。此後南軍時に起るなきにあらずと雖も遂に再び振ふに至らず。

六 後鎌倉の時代

正平四年、足利基氏鎌倉管領に任せられてより、康正元年、成氏鎌倉を退くまで、百餘年間の東國は全く鎌倉公方の令下にありて京都の干涉を納れず、殆んど一個獨立の姿あり。故に此間の東國を記せんと欲せば勢鎌倉を中心とせざるべからざるなり。即ちこの一節専ら鎌倉權力の盛衰を主として之を記す。

尊氏始めより根據を東國に置き、主として鎌倉の占有に力め、己に義貞が鎌倉を陥るゝ時に於て其の子千壽王丸をして其地に臨みて將士の心を收攬せ

東國管領の始め

新田義宗義興の擧兵

しめたる事、前節記する所の如し。千壽王丸は即ち義詮なり。其後志を得るに及び、續て義詮を鎌倉に居らしめて東國を經營せしむ。關東十國の豪族此の時前後して其邸を鎌倉に置く、實に後鎌倉の基礎は斯くして成りしなり。

正平四年、尊氏の第二子基氏新に東國管領となりて鎌倉に下り、大藏谷の故邸を修めて之に館す、東國管領の初めなり。年甫めて十歳、尙ほ幼なるを以て上杉憲顯高師冬と共に執事として之れを補く。幾くもなくして直義尊氏と隙を生ずるに及び、憲顯走て直義に應し、師冬亦信濃に走りて死す。六年十二月、尊氏自ら鎌倉に入り直義を捕へて之れを毒殺す。此時新田氏の族義宗義興義治等起りて上野武藏を略し、直義の變に乗して鎌倉を窺ふ。尊氏自ら出て、之れを武藏野に邀ひ討て利あらず、基氏また鎌倉に防ぎて敗れ、武藏石濱に遁れ次て入間川に走る。義宗等進て鎌倉を收む。已にして尊氏兵を調へて來り攻め義宗等を破て鎌倉を復す。

明年尊氏京都に上るに及び、畠山國清を留めて關東の執事と爲し、基氏を補けしむ。十三年、義興再擧して越後より武藏に入る、基氏誘て之を武藏矢口

上杉氏執事の初め

京都鎌倉不和

小山氏の亂

渡に殺す。蓋し古の多摩川の流れば今の荏原郡矢口村新田神社の近傍を通せしものにして、此矢口渡の古蹟は即ち今の十騎社の邊なるべしといふ。新田氏之より遂に微なり。十四年、畠山國清八國の大兵を以て西上し、已にして東に歸て愈、驕慢、遂に其領國伊豆に據て基氏に反す。基氏親ら箱根に出て、之を討し、國清を三津金山城に破る。國清修禪寺に遁れ次て出て、降る。基氏此に於て上杉憲顯を信濃より召し、罪を宥して執事となし、尋て上野越後伊豆三國の守護を給し、鎌倉に在りて權を總べしむ、上杉氏執事の始めなり。

二十二年(北朝貞治二年)四月、基氏卒す、年二十八なり。其子氏滿嗣く、纒に六歳、上杉氏父子(憲顯憲能)執事を以て専ら政を行ふ。氏滿長するに及び年威信最も盛にして、南朝の殘黨新田の遺類を殲し、東國殆んど歸伏す、此に於て遂に兵を擧て京都の將軍を討し、自ら之に代らんと企つるに至る。時の執事上杉憲春諫死して其事僅に已みたりと雖も、是より京都鎌倉漸く相敵視するが如き狀あるに至れり。

天授六年、小山義政下野小山城に據て鎌倉に抗す。氏滿關東十二國の兵を

以て出でて、武藏府中に陣して之を討ち、兵を列ぬる事數年なり。弘和二年四月に及びて小山城遂に陥り、義政糟尾山に通れて自盡す。五月氏滿鎌倉に歸る。其の後應永三年義政の遺子若犬丸再び兵を擧げしも之れを古河に討して直に平く。この亂後また干戈を以て鎌倉に抗するものなく、東國暫く小康を得たり。

鎌倉府熾盛

鎌倉府の威權盛なりしは、蓋し氏滿の時代を以て最と爲す。氏滿奢侈を極め驕傲自ら居り、其居を御所と呼ばしめ、已れを公方と稱す。是より以後、世人亦鎌倉足利氏を鎌倉將軍と呼て怪まず、執事上杉氏を以て管領家と稱す。鎌倉府には執事に下評定引付問註所あり、其組織亦宛然たる幕府の態を備へたり。

上杉禪秀の亂

應永五年十一月、氏滿卒して子滿兼公方を襲ひ、應永十七年に至りて更に之れを其の子持氏に傳ふ。此頃上杉氏の權勢漸く盛んなり。而して持氏亦剛愎にして驕慢、時に執事家と衝突あり、二十二年、越幡某所領の事を以て持氏上杉氏憲を黜けて安房守憲基を以て之れに補することあるに及び、氏憲大

に持氏に啣む。氏憲時に薙髮して禪秀と號す。翌年、禪秀持氏の叔父滿隆に勸めて共に亂を起し遂かに持氏の邸を襲ふ。持氏小田原に走り箱根に遁れ、更に伊豆に入りて瀬名安樂寺に匿る、憲基また越後に走る。禪秀等即ち持氏の弟持仲を立て、鎌倉公方とす。此の時禪秀に黨するもの東八國に於て下總の千葉兼胤、上野の新田の一黨、武藏の丹黨一族并に荏原逆沼別府玉井瀬山張尾諸氏、伊豆の狩野一類、相摸の曾我中村土肥土屋常陸の名越一黨佐竹一類及び小田大掾行方小栗下野の那須宇都宮一族等にして、殆んど東國の雄族を盡せり。上杉氏の勢力の偉大なりしを知るべし。己にして事京都に聞ゆ。將軍義政今川範政をして持氏を援けて禪秀等を伐たしむ。二十四年正月、滿隆禪秀敗れて遂に鎌倉に自殺す。是れを稱して世に上杉禪秀の亂といふ。尋て持氏再び鎌倉に歸り、一たひ平和に復したりと雖も、是れより關東分裂して諸族の反目嫉視容易に除かず、遂に後年大亂の基とはなれり。

正長元年、前將軍義持薨す。是れより先き義持已に職を其子義量に傳へて退隱したりしと雖も、義量幾くならずして夭死して嗣なかりしを以て、義持

京都鎌倉反目

復暫く前將軍を以て政を聽きたり。其の時持氏尙に繼立を望み、曾て使を義持に送りて意を告げたる事あり。然れども義持素より持氏を好まず、故に死に臨みて遂に持氏を卻けて重臣に遺命する所あり。重臣等因て命を承けて義持の弟僧義圓を迎立す、即ち義教なり。持氏鎌倉に在りて之を聞て大に平かならず、兵を集めて京都に迫り、以て其の志を果さんとす。時に上杉憲實執事たり。最も才幹あり、主として持氏を諫めて之れを止め、又巧に京都鎌倉間に周旋して調停を圖り、以て幸に大事に至らずして已めしめたり。

關東の主權上杉氏に歸す

然れども、持氏はより漸く憲實を思みて、屢之れを殺さんと企つ。憲實因て上野白井城に通る、白井城は上杉氏の守護代長尾氏代々の居城なり。此に於て持氏即ち憲實の討伐を決し、兵を以て自ら出て、武藏府中に陣す。將軍義教聞て大に怒り、奏して持氏征討の論旨を請ひ、上杉持房を以て將となし、今川小笠原武田朝倉諸氏の兵を以て鎌倉を伐たしむ。憲實亦上野より武藏に出て、持氏に對す。憲實夙に衆望あり、故にその出るを聞くや關東の將士皆起てこれに應し、持氏に歸するものなし。持氏戰ふて利あらず、安樂寺

東國文學
足利學校と金澤文庫

に自殺す。永享十一年二月なり。此に於て憲實其の主に敵したる罪を謝し、責を引て職を弟清方に譲りて遁世す。人その高節を慕ふもの多し。或は曰く此の亂始めより皆憲實の企圖に出で持氏をして京都に隙あらしめしが如きも亦その煽動に基くと。蓋し憲實表面に平和を裝ひ恭順を主とすと雖も、實は亂を欲し是れに由て關東の政權を上杉氏に歸せしめんとする深謀ありしなり。而して果して此の亂を経て、關東の權力は遂に全く上杉氏に歸するに至れり。憲實は又文事に意あり。武藏金澤文庫の荒廢を興して書籍の散佚を拒き、又其所領上野に足利學校を建て、學領を寄附し、諸國より文書を徵し、子弟を集めて學に就かしむ。戰國亂離の世に當りて東國の文學克く亡ふるに至らざりしものは憲實の効なり。

武州金澤の學校は、北條九代の繁昌のむかし學問ありし舊跡なり。これをも今度彼文庫を再建して、種々書籍を入置、又上州は上杉が分國なりければ、足利は京都並鎌倉御名字の地にて他に異りと、かの足利の學校を建立して、種々の文書を異國より求め納めける。(中畧今度安房守(憲實)公方御名

字かけの地なればとて、學領を寄進して彌書籍を納め學徒を憐愍す。されは此頃諸國大に亂れ學道も絶たりしかば、此所日本一所の學校となる。是より猶以上杉安房守憲實を諸國の人もほめそやさいるはなし、西國北國よりも學徒悉く集る。(鎌倉大皇子)

金澤文庫は此後打續く兵亂に再ひ荒廢に歸し、幾多の書籍も爲めに皆散佚したりといふ。舊趾は之れを今の久良岐郡金澤村寺前稱名寺の境内に認め得べし。近年朝野の有志相謀りてその遺蹟を保存し、文庫を再築し、散佚の書籍の拾收に力め居れり。足利學校も亦此後衰微して素より當時の盛觀を保つ能はざりしと雖も、心ある僧侶の之れを管せしこととて金澤文庫の如き甚たしき衰頹に陥らず、徳川時代には特に學田の寄進さへあり、今に聖廟及び幾多の藏書を保存し、名蹟としてその名高し。

持氏亡ぶるとき、其の遺孤春王安王下野に遁れて日光山に匿れ、季子永壽王丸、信濃に走りて大井氏に據る。已にして、永享十二年正月、結城氏朝、春王安王を奉して結城に據り、恢復を圖りしが、上杉清方上杉持朝と共に來

結城の亂

りて之れを攻むるに及び、城遂に陥り、氏朝等戰死し、春王安王擒はれて交た垂井に斬らる。

成氏鎌倉の主となる

是に於て、鎌倉暫く主なく、上杉民政を行ふこと年あり。寶徳元年に至りて、清方等幕府に乞ふて永壽王丸を京都より迎へ立て、鎌倉の主となす。甫めて十三、鎌倉に入りて成氏と改む。已にして成氏長ずるに及びて、父持氏^以限滅の事情を知りて上杉氏を怨み、屢之れを除かんと圖り、享徳元年十二月、遂に執事憲忠を殺す。憲忠は清方の弟なり。上杉氏の宰臣長尾景仲即ち族上杉房定と圖りて憲忠の弟房顯を立て、主となし、事を京師に報し、自ら越後信濃上野武藏の兵を召し、武藏に出て、成氏に對持す。成氏亦兵を整へて鎌倉を發し、長尾の兵と武藏分倍河原(府中)及び立川原(今の立川附近)に接戰し、進んで下總古河に據る。此時今川範忠等、京都幕府の命を奉して東下し、成氏の不在に乗して鎌倉に亂入し、火を市中に放つ。公方御所の殿閣より谷七郷の神社佛閣將士の邸第に至るまで悉く燒亡して灰燼に歸し、元弘以來漸く整ふたる足利氏累代の財寶舊物皆亡ふ。實に康正元年六月十六日にして基氏府を開

鎌倉亡ぶ

てより五代百十三年なり。

是より成氏古河に據りて永く其の地に留まり、曾て京都を出づる時
いにしへの契たがへずさかえなば都をあふげ君が行末

と祝されたる餞別の辭も、空言と化して再び鎌倉に還る能はず。鎌倉は之れ
より廢墟となりて、復東國の中心たらず。八州の野は愈々鼎沸するに至りたり。

七 諸族割據攻伐の時代

上杉氏の勢力時代 成氏一たび鎌倉を出て、復還る能はず、下總古河
に城きて館し、永く其の地に留りて上杉氏と相持するに至れり。館址は今の
古河町の南字鴻の巢の地にあり、世に古城址と稱する所是れなり。是より世
成氏を呼て古河公方と稱す。東國の豪族千葉小山見佐竹小田結城宇都宮の
諸氏成氏に歸して古河に覲す、之れを關東八館と稱す。是より後古河は鎌倉
に代りて東國一部の中心たり。

上杉氏は初め兩家あり。一を山内家といひ、一を犬懸家といふ。山内家は

古河の地東國
一部の中心と
なる

上杉氏の諸家

江戸・岩付河
越の三城成る

澁川義鏡下向

能憲に出つ、伊豆上野を領して家大なり。此頃に及び幸臣に長尾景仲あり、
最も才略あり、上野白井城に居りて其の主房顯を奉す。犬懸家は朝房に出つ、
代々越後及び上總を有すと雖も、此の頃に至りて勢漸く微なり。以上を宗家
と爲す。其の他庶流に上杉持朝あり、其の邸を鎌倉扇谷に有するを以て扇谷
家といふ、領を武藏に保つ。初めは其の家小なりしと雖も、此頃家幸に太の
資清資長道灌父子出て、之れを補くるに及び、勢漸く盛になりて、宗家に比
肩し、遂に山内扇谷の二を以て兩上杉と稱せしむるに至れり。

長祿元年四月、扇谷の幸臣太田資長、武藏江戸城を築く。是れと前後して
資長の父資清、岩付城を築き、其の主上杉持朝、河越城を築く。三城の地は
何れも武藏の要樞なり。相連結して國內を横斷す。蓋し以て下總の成氏に對
する防備となせしなり。

此歳、幕府一族澁川義鏡を關東に下して、上杉氏を援けしむ。義鏡父祖の
舊領武藏蕨(今の)に城き、武藏相模及び兩總に令を傳へて成氏を討せしむ。然
れども東國の將士尙ほ多く成氏に心を寄せて義鏡に應ずるものなし。因て義

伊豆堀越御所

鏡諸將と議し、將軍の子弟を乞ふ。幕府即ち義政の弟政知を以て左馬頭に任じ關東管領と爲す、上杉政憲、補佐たり。翌二年、政知東下す。然るに此時鎌倉已に廢墟となりて居るべからざるを以て、伊豆堀越(今の北條)に館を設けて之れに居り、伊豆一國を知行す。政憲獨り箱根を越えて相模に出て、武藏相模上野に令を傳ふ。時人即ち政知を呼て堀越御所と稱す。關東此に於て兩公方あり、分争の勢益、判然す。

成氏と上杉の争

此時に當り山内の上杉房顯は出て、武藏五十子(豊多摩郡本庄町附近)に陣して成氏に對せり。兩軍武藏地方に於て屢、接戦せしと雖も、成氏恒に優勢なり。已にして、寛正四年八月、房顯の老臣長尾景仲上野白井の居城に歿し、尋て文正元年正月、房顯亦五十子陣中に歿して嗣なし。長尾扇谷計て越後上杉房定の子顯定を迎へて山内家を繼かしむ、而して是れより山内上杉家漸く衰微す。

此歲九月、扇谷の上杉持朝亦河越に死して上杉の軍氣沮喪し、成氏の勢益、振ふ。成氏此に於て文明三年三月を以て、千葉小山結城の諸族と共に大舉して函嶺を越へて伊豆に入り堀越に迫る。政知急を駿河に告げて兵を今川義忠

千葉氏

に乞ふ。已にして上杉顯定の兵成氏を三島に破る、成氏大敗して古河に歸る。長尾景信の兵これを追撃して遂に古河を陥る。成氏即ち走て千葉に遁れ千葉孝胤に頼る。千葉氏は下總の豪族なり。この時千葉城を本據として臼井佐倉多古小見川等の領邑を保ちて父祖已來威を印旛郡以東に振ふ。成氏の來るに及びて孝胤之を扶けて城中に奉す。安房の里見義實、上總の武田信興亦來りて之れを保護す。

安房上總の状況

安房は本と安西平郡勝山に據る神餘(安房郡神餘に據る)丸朝夷郡丸に在り東條(長狹郡東條に在り)の諸氏ありて、各其の領邑に據て割據せしが、嘉吉の頃、安西景春遂に神餘丸二氏を併す。此時會、里見義實流寓して本州に在り、神餘丸二氏の餘衆を撫して景春を降し、東條氏を滅し、城を白濱に營み、更に進んで此頃已に上總半國を併せたり。

上總は初め犬懸上杉氏の領國なりしが、漸く衰へて守護代武田氏勢を得て國を奪ひ、廳南真里谷西城に在りて國內を領せり、兩武田と稱す。古河の野田氏、關宿の築田氏、私市の佐々木氏、結城の結城氏及び下野烏山の那

東國雄族の分屬

須氏小山の小山氏等、亦何れも成氏の爲めに其の城に固守して降らず、上杉氏に抗す。翌年春成氏遂に古河を復して之れに入る。是より又兩上杉氏と五十子附近に對陣して歳を亘り、交戦概ね虚月なし。

今左に此の當時に於ける東國の分屬を示して關東の大勢を明かにすべし。古河公方に屬するもの。

②千葉氏。下總千葉城に在りて印幡以東を領し一族多し。

里見氏。安房白濱に城きて安房全國及び上總の南境を有す。

武田兩氏。上總眞里谷及び應南に在りて上總を領す。

結城氏。下總結城に在り。

築田氏。下總關宿に在り其の附近及び武藏足立郡を領す。

小田氏。常陸小田城に據る。

小山氏。下野小山に在り。

宇都宮氏。下野宇都宮に在り。

那須氏。下野烏山に居城し那須莊を領有す。

上杉氏に屬するもの。

堀越公方。伊豆堀越にあり伊豆國に號令す。

山内上杉氏。上野一圓を領し平井にあり、宰臣長尾氏白井に居城す。

扇ヶ谷上杉氏。武藏の大半を領有す本城を河越に營み宰臣太田氏江戸

城にあり。

三浦氏。相模三浦半島に據り新井城にあり。

大森氏。相模小田原にあり。

古河公方及び上杉氏何れにも干係少きもの。

佐竹氏。常陸太田に居城して常陸の北方を有す。

江戸氏。常陸の水戸にあり。

大塚^橋氏。常陸府中(石岡)に據る。

此の時、會上杉氏に長尾景春の亂起る。景春は山内上杉の重臣にして景信の子なり。父祖の勢を恃み、恒に驕慢にして其の主顯定に善からず。山内の家務職を望みて得ざるに及び、益、顯定を惡む。然れとも太田道灌武藏に在るの

長尾氏の亂

兩上杉の争

間は憚て未だ發せず。文明八年、今川氏に騷亂ありて道灌駿河に赴くに及び、其の不在に乗して遂に反旗を翻し、武藏鉢形城(今の大里郡)に據り、欸を古河の成氏に通し、兩上杉の五十子の陣を襲ひ、顯定定正を破る。武藏相模の族之に應ずるもの多く、一時勢を得たり。已にして景春又成氏と合して共に下總成田に陣す。道灌報を得て駿河より歸り、景春を成田に破る。次て軍を廻して鉢形城を攻めて之れを奪ひ、更に轉して千葉孝胤を國府臺に撃ち、進て臼井城(印幡郡)を拔く。十二年十二月、景春力盡きて遂に顯定に降り、成氏亦形勢の非なるを見て和を上杉氏に乞ふ。已にして十七年に及び、成氏及び上杉氏媾和成り、關東の擾亂一たび其の局を結ぶ。

古河公方の勢茲に屈し、山内上杉氏亦前日隆盛の態なし。堀越の公方は素より振はず。此の時獨り扇谷家の家名盛にして道灌の勢望月に昂れり。蓋し扇谷家は本と上杉庶流の微族より起り、道灌父子に由りて關東將士の人心を收攬して、宗家を壓するに至りたるなり。山内顯定之を妬みて道灌を其の主定正に讒す。定正之を信して遂に道灌を相模糟屋の第に誘殺す。糟屋は今の

北條早雲伊豆に起る

中郡秦野村の地なり。是れより扇谷家は復名臣なく東國將士の心を失ひて勢復振はず。顯定即ち乘して扇谷家を傾けんと企つ。定正成氏父子に結びて顯定に抗し屢交戦あり。就中最も激しき者を長享二年十一月武藏高見原の戦、正徳元年二月相模真卷原(今の子原)の戦を爲す。是より數年兩上杉の兵結て解けず、顯定は出て、綠野郡平井に城き、武藏の深谷(大里郡)鉢形(大里郡)兩城を占め、扇谷家は依然河越に在りて之れに對持し、關東再ひ戦亂の巷と化したり。

斯くの如く當時諸國戰鬪攻伐に日を送りて、また他を顧みるの暇なかりし時代として、到る所文藝の道の荒廢せるは素よりなれども、獨り關東の將士は上杉憲實の遺風を承けて文事に志すもの多く、爲めに戦亂の世に當りて尙ほ斯道の絶滅に至らざりしは、最も留意すべき事なり。太田道灌が詩人萬里を招きて江戸城に詩筵を張りたるが如き、長尾景仲が白井に聖堂を興し儒者を京都より迎へて講筵を開きしが如き、其の最なるものなり。其の他大森氏頼上杉定政の如き亦何れも文學あるの將たり。

北條氏の勃興 兩上杉氏、互に兵を構へて争鬪を事とし、復他を顧み

八丈島發見

早雲小田原城
を取る

ざるの時に當りて、身を微賤より起して先づ豆北に俯起し、遂に上杉氏に代りて東國の覇權を握るに至りしものは北條早雲なり。早雲初め伊勢長氏と稱す。駿河に流寓して今川氏に倚り、嘗て其の内訌を理して富士郡興國寺の城を興へられ之れに居る。此の時會、正徳三年四月、伊豆堀越公方政知薨して遺孤茶々丸幼弱なり。長氏之れに乘し、十月兵を以て堀越館を襲ひ、茶々丸を殺し伊豆一國を畧す。即ち韭山に城さ之れに居り、自ら北條早雲と稱す。是れ北條氏が他日關東八州に威を振ふに至りたる第一着歩なり。

此の頃伊豆の人朝比奈某、海に航して八丈島を發見し之れを早雲に致す。早雲島民を招撫し八丈島を伊豆國に附す。島民是れより三年一回其の作る所の絹を貢獻して例と爲す、世に八丈絹といふものは是れなり。

明應四年二月、早雲箱根より小田原城を襲ふて之れを取る。小田原は蓋し關東の咽喉に當る要地なり。早雲關東經畧を志して夙に此の地に望を嚆せしも、是れより先き城將大森氏頼此に據りて名將の譽高く、士民歸服し、俄かに手を下す能はず。故に荏苒偏にその機の到るを待てり。而して恰も前年八

山内顯定と結ぶ。已にして政氏又其の子高基及び義明と隙を生して父子干戈



北條早雲の像 (相模箱根早雲寺藏)

月氏頼卒するや、弟藤頼嗣きたりと雖も、暗愚にして其の器にあらず、早雲即ち之れに乘し、狩獵に托して箱根に出で之れを掠略したるなり。之れを北條氏が關東に威を施すに至りたる第二着歩とす。

此の時上杉定正已に歿して、扇谷家も漸く衰微し、古河公方成氏亦卒して子政氏嗣き、

相模三浦氏亡

を交ゆるに至り、所在愈亂れて八州の野益四分五裂するに至れり。而して是れ等の事皆早雲の苦策より出てたりと稱せらる。

永正十五年、早雲相模國に三浦義明を討て之れを新井城に滅す。(今三浦郡三崎城跡は其の遺蹟なり)三浦氏は相模の豪族なり。三浦半島に據り鎌倉大住兩郡に亘りて領地を有し、世々上杉氏に屬したるものなり。早雲遂に之れを亡ぼし、相模一

圓を併せ、更に進て武藏に向てその策を試みんとす。又一面には城を三崎に築きて安房の里見氏に備ふ。北條氏が東國經畧の宿望は此に於て既に半を成したるものといふべし。

是れより先き、永正四年越後上杉氏に内亂あり。家宰長尾爲景、其の主房能を弑し族定實を擁立して國內の實權を掌握す。山内の上杉顯定、上野より出て、之れを討て克たず、越後に戰死す。上杉氏は己に南、相模より北條氏に迫られ、東、下總に於ては古河公方と抗して已に武藏を犯され、而して今又北方長尾氏の抑壓を蒙る。殆と三面挾撃の窮地に陥りたるものにして、勢力範圍日に縮少せり。而して此の際に於て又上總に小弓御所の興隆あり。一

上總に小弓御所起る

方の勢力を爲して更に上杉氏の勢力範圍を蠶食せんとせり。

小弓御所は足利義明の稱なり。義明は古河公方政氏(成氏の子)の子にして高基の弟なり。初め高基と共に北條氏に誘はれて上杉氏を伐たんと圖り、之れが爲めに父政氏と兵を交へ利を失ふて陸奥に遁る。此の時永正十四年、上總の豪族、眞里谷氏(武田氏)等之れを陸奥より迎へ小弓に奉し、公方の舊業を恢復せんとす。世に小弓御所と稱す。今の下總小弓町の地は即ちその遺址なり。安房の里見義通(義實の孫)領國を擧げて之れに歸し、公方の名に由て北條氏に對す。亦一方の勢力たり。

北條氏綱江戸城を取る

永正十六年八月十六日、北條早雲伊豆韭山城に卒し、其の子氏綱嗣く。氏綱亦武略あり。父の偉業を繼ぎて東國經畧の宿望を成さんと期す。已に相模全國を定めて伊豆より出て、小田原を居城とし、遙に欸を古河公方高基に送りて後より上杉氏を制せしめ、以て武藏に向ふ。時に扇谷の上杉朝興江戸城にあり、兵を品川及び小杉に出して氏綱の軍を防ぐ。兩軍大に高繩原に接戦す。今の東京芝高輪の地之れなり。是より先き氏綱兼て扇谷の宰臣太田資高

北條氏武藏經

北條氏綱兩總
を威壓す

を招降す。此に於て資高後より朝興を討ち氏綱に應ず。朝興城を出て、河越に走り、氏綱遂に江戸城を取る、實に大永四年正月なり。氏綱即ち部將遠山丹波守を以て資高と共に江戸城に守たらしむ。

山内の上杉憲房、上野平井に在りて朝興の敗報を得、出て、武藏入間郡に入り氏綱と鉢形城に相持す。尋て憲房平井に病歿し憲廣嗣ぐ。憲廣又武藏に小澤城を築き、朝興藏城を築く、皆氏綱に對する防備なり。此の時里見實堯兵船數百を以て海上安房を出て氏綱の虛に乗して鎌倉に上陸し、鶴岡を破却して氏綱の後を衝く。氏綱困りて之れを討ち大に之れを破る。實堯國に歸る、大永六年十二月也。是れより氏綱武藏に於て上杉氏と戦ふと數年、大永六年九月、小澤の戦を始め、享祿三年正月には吾名蜆坂の戦あり。同四月には復小澤原の戦あり。次て天文六年、氏綱松山城を攻め、七年二月、葛西城を取る。北條氏の勢日を追ふて漸く盛なり。

此の時房總、里見氏に内亂あり。實堯の子義堯、欸を北條氏に通して義通の子義豊を殺し、北條氏の援に困て安房を奪ひ、小弓御所に反す。義明之れ

國府臺の戦

を聞て大に怒り、直に兵を以て眞里谷を攻め、義堯を降し大に勢を得、即ち關東諸國を平けて公方の舊業を復せんと期し、轉して先つ下總千葉城に迫る。義堯亦軍に従ふ。千葉昌胤急を北條氏に報して其の援助を乞ふ。天文七年十月二日、氏綱其の子氏康と共に報を得て武藏より下總に入る。義明義堯と共に國府臺に陣してその軍を邀へ、七日を以て大に臺下に戦ふ。而して義明大に敗れ遂に戦死し、義堯終に身を以て安房に通る、有名なる國府臺の戦は是なり。今の國府臺總寧寺附近一帶の丘陵の江戸川に臨むの地は、即ち當時の戰場にして、當年の里見氏の陣蹟今は化して野戰砲兵の兵營となる。小弓御所の勢威は此の一戦にして亡び、千葉氏小弓を復して舊の如く原氏をして守らしむ。北條氏はれより兩總の地を威壓す。

斯くの如くにして小弓御所俄に亡び、上杉氏の勢亦日に盛まる。而して北條氏の威獨り益、盛なり。此の頃越後上杉の宰臣長尾爲景も漸次其の勢を得て、北方より東國に臨み、關東の覇權を握らんと力めしが如きも、要するに北條氏の勢望に比すべからず。唯、上杉氏を弱むるに助けて、北條氏の業を成さし

上杉氏亡ぶ

めたるが如きの觀あるのみ。

天文十年七月、氏綱卒して子氏康嗣ぐ。氏康亦勇武の資あり。益將士の心を
 得て其の版圖を大にし、西は駿河を侵して今川氏と争ひ、北は甲斐に敵し
 て武田氏と抗し、而して東の方上杉氏に逼ると愈急なり。上杉憲政之れに對
 して駿河の今川義元と提携し、義元をして氏康の屬城駿河長久保を攻めしめ、
 自ら兵を以て武藏河越城を圍む、時に天正十四年なり。此時古河晴氏亦氏康
 に絶ちて憲政を援け、河越攻撃の軍に會す。翌十五年四月氏康來りて之れを
 討つ。晴氏憲政敗れ、晴氏古河に歸り、憲政上野に走る。已にして憲政復氏
 康に迫られて遂に自ら保つ能はず、越後に遁れて長尾景虎に投す。時に天文
 廿一年正月なり。氏康尋て平井城を陷る。此に於て關東管領家全く滅び、上
 杉氏跡を關東に絶つ。

上杉謙信關東
來侵す

廿三年十月、氏康進て古河城を攻め、公方晴氏に降し、之れを相模羽田野
(今の中郡奈野)に幽し、尋て又之れを下總關宿へ移す。氏康次て晴氏の子義氏を立て
 公方を稱せしむと雖も、要するに虚名を保たしむるに過ぎず。義氏は即ち

氏康の女の生む所なり。初め梁田晴助も亦其の女を晴氏に納れて藤氏藤政の
 二子を生む。此に於て己れの女の所生の立てられざるを見て頗る平かならず。
 事を以て越後の上杉輝虎に囑す。輝虎は長尾景虎なり。この時輝虎已に憲政
 の囑を受けて之れを諾し、因て管領家を承けて上杉氏を冒し、關東管領と稱
 す。素より東國經畧の志あり。即ち永祿三年上野に入り厩橋城を殉へて之れ
 に據り、關宿に義氏を討して之れと和し、翌年更に大舉して相摸に入り小田
 原に迫る。氏康父子堅く守りて出でず、輝虎遂に軍を徹して歸る。之れを要
 するに輝虎の來る猛烈當るべからず、暴威一時を壓すと雖も、効果を收むる
 と少なく、其の去るや其の地再ひ舊の如く、北條氏の勢望亦依然たり。

是れより先き氏康已に前年を以て家の子氏政に譲りて退隱すと雖も、尙ほ
 氏政を補けて軍國の事を見る。此の後上杉(長尾)武田今川諸氏に對しては或は
 和して婚を結ひ、或は争て兵を交へ、其の爲す所一定せずと雖も、又何れか
 其の勢力を擴張するの策より出でたるものにあらざるはなし。元龜二年十月
 遂に病を以て歿す。嗣子氏政不肖なりと雖も尙ほ積威に倚て關東の覇權を取

梁田氏關宿の役

る事舊の如し。

梁田晴助、氏康の死に乗し、更に兵を關宿に擧げて藤氏・藤政を奉す。輝虎之れを援けて天正二年を以て又越後より上野に出て、桐生・金山の諸城を攻撃し、各地を攻掠して去る。氏政同年四月を以て下野に入り、小山・榎本・結城の諸城を抜き關宿に迫る。常陸の佐竹義重亦兼て關宿に約すと雖も、恰も此時陸奥の菅名氏と兵を構ふるの故を以て來る能はず、關宿日に危し。謙信之れを聞て遂に武藏に入り、鉢形城を攻め、松山・忍成・田上田諸城を焼き、轉して小山に陣し佐竹氏を促す。氏政之れを古河に防く。已にして十一月佐竹氏北條氏と和し關宿城を致す、氏政凱旋す。

北條氏勢力の極致

是れより關東の大勢遂に全く北條氏に歸す。要するに北條氏勢力の極致は實力上に於ては氏康在世の時にありしと雖も、外形上勢力範圍の擴かりしは氏政の時を最と爲す。即ち此の時に當りて北條氏の領土と稱するは伊豆・相模・武藏・上總・下總・上野六國の殆ど全圖、及び常陸・下野・駿河及び信濃等の諸國に亘り、全く關八洲の覇權を掌握せり。此の時關東八洲の中北條氏勢力以外にあ

關東の雄族

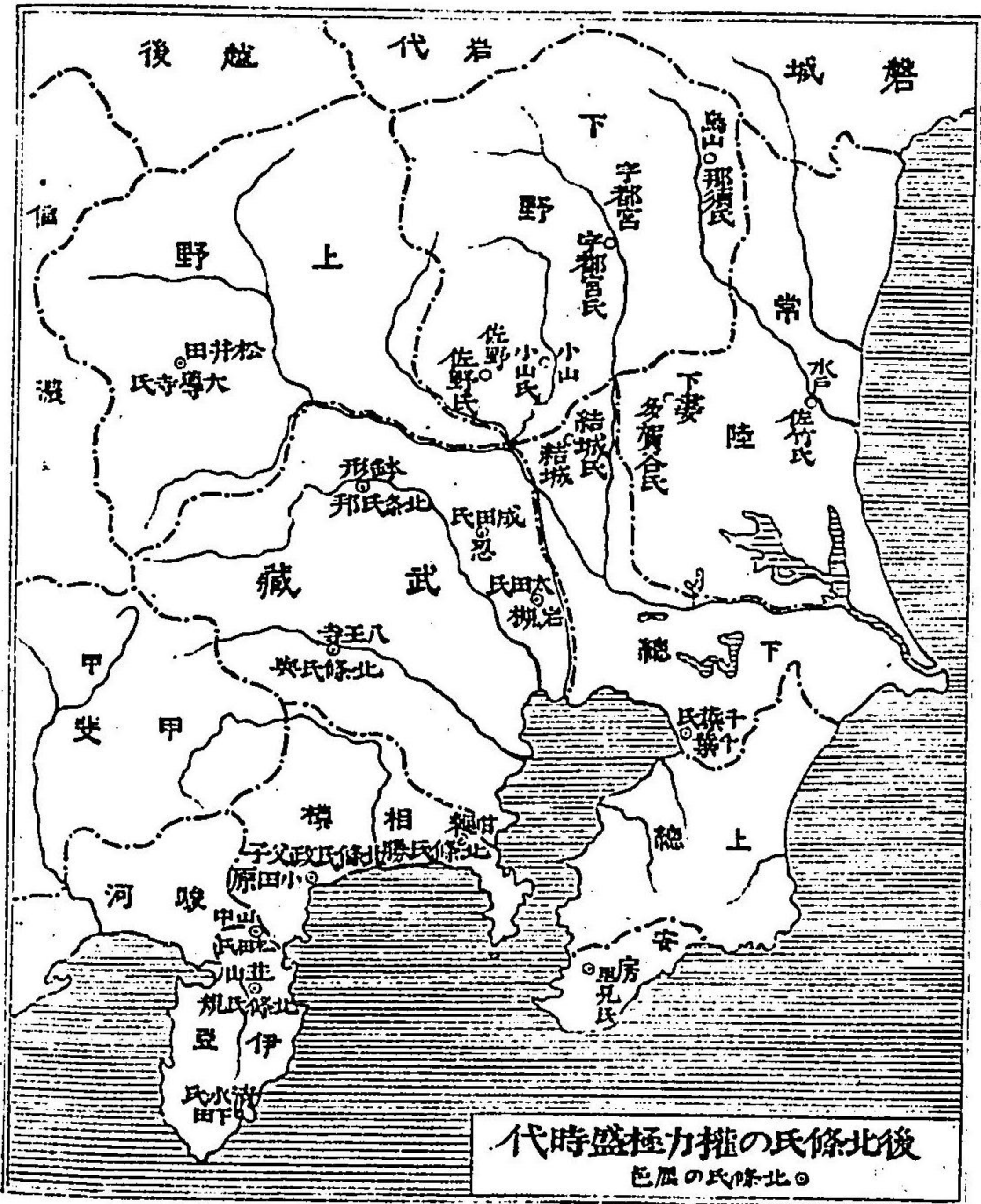
りしものを擧ぐれば、先づ安房に里見義弘ありと雖も、永祿七年正月氏康に國府臺に破られて已來は甚だ振はず、常陸の佐竹義重は此の頃已に江戸氏・大掾氏を滅して水戸城に據り、その地方の一勢力たりしも、地邊隅に在るの故を以て關東の大勢には寧ろ關係少く、却て力を奥州の方面に用るのみ。下野・宇都宮の宇都宮國綱は下野一半を有し、謙信は上野の東半を有し、武田氏は下野の西半を有するも、要するに何れも亦皆關東の覇權を動かすに足らず。

小田原繁昌

されは北條氏累代の居城地たる相模小田原は此の時代に於ては、さながら關八國の首府たるの觀を呈し、入るもの出つるもの恒に城下に噴咽して、民物の殷賑其の比なく、繁榮人を驚かす許りなりしといふ。

去程に相州小田原守護の政道私なく民を撫せしかば、近國他國の人民、懷恩移家と津々浦々の町人職人西國北國より群來ると、昔の鎌倉もいかで是れ程あらんやと覺ゆる許りに見えにけり。東は一色より板橋に至る迄其の間一里程に棚をはり、賣買敷を盡しける山海の珍物琴瑟書畫の細工に至るまで不盡といふ事なし。異國の唐物未だ目に不見、まして聞も不及器物を

當時の東國の
道路及交通の



後北條氏の権力極盛時代

北條氏の居る邑

幾等といふとなく積置たり。交易賣買の利潤は四條五條の辻にも過たり云々。(小田原配)

諸國の都邑は素より戦亂の餘弊を蒙りて一躰に荒廢し、發達の道を開く能はさりしなるべしと雖も、各地交

交易賣買

通の道路は當時諸族行兵の必要ありしより案外の發達ありしものゝ如し。殊に北條氏康の如きは最も此に留意して、道路の開通、驛傳の迅速を計られたるが如し。然れども戰國割據の時代の常として、各領主、各其の領境、國境に關所を設けて交通の擁塞に力め、以て自家防備の計を爲せしより、其の漸く延て、神社寺院の如きも恣に要地に關を構ひ、河手山手と稱して旅人より役錢を貪り、收入の補助と爲すに至れり。即ち鶴岡八幡宮は湯本及び岩淵の關を領し、鎌倉圓覺寺は箱根及び神奈川品川の關を管し、其の關料を得るを以て特權とせり。到る所此くの如き有様なるを以て、一般人民の旅行には少なからざる不便と困難とありて、道路の開通はありながら、一般に於て寧ろ擁塞の傾ありしを免れず。

交易賣買の途に就ても、東國に於て特に發達の跡あり。氏康は會て領内に令を下して、賣買に主として永樂錢を使用せしめ、鑿錢を卻けたるより、是れより惡貨は皆な關西に流出して、關東獨り良貨をととむるに至りたりといふ。